

2020年度

専任教員の教育・研究業績

神戸薬科大学

目次(専任教員の教育・研究業績)

	頁
宮田 興子	1
中山 尋量	4
北川 裕之	7
小林 典裕	12
江本 憲昭	15
内田 吉昭	18
沼田 千賀子	20
田内 義彦	25
向 高弘	29
加藤 郁夫	33
小西 守周	36
力武 良行	38
長谷川 潤	41
坂根 稔康	44
奥田 健介	47
土反 伸和	50
小山 豊	54
國正 淳一	57
玉巻 欣子	60
上田 昌史	64
大河原 賢一	68
波多野 学	71
棚橋 孝雄	74
岩川 精吾	77
畑 公也	80
四方田 千佳子	82
濱口 常男	85
松家 次朗	89
渡 雅克	92
奥川 斉	94

	頁
河本 由紀子	96
高尾 宜久	98
福井 英二	101
山本 克己	103
山野 由美子	106
竹内 敦子	110
赤井 朋子	113
竹仲 由希子	117
佐々木 直人	119
八巻 耕也	122
児玉 典子	125
灘中 里美	128
安岡 由美	132
田中 将史	135
中山 喜明	138
中島 園美	141
古林 呂之	145
佐野 紘平	148
小門 穂	151
多河 典子	154
上田 久美子	156
三上 雅久	159
西村 克己	163
辰見 明俊	166
猪野 彩	169
西山 由美	171
都出 千里	174
沖津 貴志	177
藤波 綾	181
土生 康司	184

	頁
前田 秀子	188
河内 正二	191
竹下 治範	194
武田 紀彦	198
鎌尾 まや	201
泉 安彦	205
大山 浩之	208
細川 美香	211
増田 有紀	214
堀部 紗世	216
森田 いずみ	219
富田 淑美	222
阿部 興	224
山田 泰之	226
山崎 俊栄	229
高木 晃	232
池田 義人	234
安井 基博	236
北條 寛典	239
田中 晶子	241
田中 章太	244
宗兼 将之	246
高嶋 一平	248
木口 裕貴	250
田中 亨	252

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 学長・教授	氏名 宮田 興子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年～	医薬品の化学的性質を理解するための講義である有機化学、医薬品化学、医薬品合成化学、医薬品開発を担当。更に、医薬品合成、医薬品化学の分野に相当する有機化学系 II実習を担当。いずれの場合もオフィスアワーを設けて質問に対応。講義は、板書することを心がけている。さらに、有機化学が苦手な学生には、土曜日を使用して、積極的に補講を行っている。卒業研究の学生には、実験と共に学術論文の読み方、問題解決能力の養成を心がけて指導。更に論文作成の指導。さらに、臨床の現場で役に立つ有機化学を教示するために薬理学、処方解析学とのコラボレーションも常に考えながら教えている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
(1) パートナー医薬品化学（改訂第3版）	2017年2月	官能基別にまとめた医薬品の化学的性質と生物活性との関連を記載した教科書
(2) 化学構造と薬理作用（第2版）	2015年4月1日	6年制薬学教育に必須である医薬品を化学で理解するために作成された教科書
(3) スタンダード薬学シリーズ 化学系薬学I化学物質の性質と反応	2015年2月20日	化学系薬学で学ぶ基本的な有機化合物の性質と反応を記載した教科書
(4) 臨床への有機と薬理からのアプローチ事例を基に新時代の薬学的介入を考察するー	2018年9月13日	薬学部の特徴である基礎薬学を臨床現場に活かす方法を示した教科書
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		薬学統合学習の構築～臨床薬学－薬理学－有機化学の橋渡し教育を目指して～ 第1回薬学教育学会 京都 第25回日本医療薬学会のシンポジウム「基礎と臨床の橋渡し教育を考える」 日本薬学会第136年会 一般シンポジウムS15「今何を考えるべきかー基礎がつながる薬剤師を育てるために」 日本薬学会第138年会（金沢） IS02 FIPフォーラム2018「Approach to clinical research from organic chemistry」
4 その他教育活動上特記すべき事項		2017年に十数名の先生方と臨床医薬品化学研究会を立ち上げ、現在、臨床から基礎薬学までをつなぐ新しい教育システムの考案中である。

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takeda Norihiko, Arisawa Narumi, Miyamoto Misaki, Kobori Yukiko, Shinada Tetsuro, Miyata Okiko, Ueda, Masafumi	論文	Organic Chemistry Frontiers 2019, 6, 3721-3724. Reagent-controlled regioselectivity in the [3,3]-sigmatropic rearrangement of N-(acyloxy)enamides
Yuta Ito, Masafumi Ueda, Norihiko Takeda and Okiko Miyata	論文	Chem. Eur. J. 2016, 22, 2616-2619. "tert-Butyl Iodide-Mediated Reductive Fischer Indolization of Conjugated Hydrazones"
Shoichi Sugita, Norihiko Takeda, Norimitsu Tohnai, Mikiuji Miyata, Okiko Miyata and Masafumi Ueda	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 2469-2472. "Gold-Catalyzed [3+2]/Retro-[3+2]/[3+2] Cycloaddition Cascade Reaction of N-Alkoxyazomethine Ylides"
Norihiko Takeda, Mizuki Furuishi, Yuri Nishijima, Erika Futaki, Masafumi Ueda, Tetsuro Shinada and Okiko Miyata	論文	Org. Biomol. Chem. 2018, 16(46), 8940-894. "Chiral isoxazolidine-mediated stereoselective umpolung α -phenylation of methyl ketones"
Takeda, Norihiko; Futaki, Erika; Kobori, Yukiko; Ueda, Masafumi; Miyata, Okiko	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 16342-16346. "Nucleophilic Arylation of N,O-Ketene Acetals with Triaryl Aluminum Reagents: Access to α -Aryl Amides through an Umpolung Process"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
N-アルコキシアゾメチンイリドを経由する新規連続的環化付加反応の開発	2015年5月22日	第13回次世代を担う有機化学シンポジウム
Synthesis of Benzofuro[2,3-b]pyrroles through Domino Type of Reaction involving Radical Addition Reaction	2015年7月18日	7th Pacific Symposium on Radical Chemistry (PSRC-7)

N-ベンゾイルオキシエナミドを基質とした新規連続反応の開発	2015年8月1日	第35回有機合成若手セミナー
カルボニル基の・位での立体選択的極性転換反応の開発	2015年10月26日	第41回反応と合成の進歩シンポジウム
ホモアリルアミン類とクロロホルムによる新規ラクタム化反応の開発	2015年11月19日	第45回複素環化学討論会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2019年6月～	日本私立大学協会 理事	
2019年4月～	全国薬科大学長・薬学部長会議 常任理事	
2019年4月～	神戸薬科大学学長	
2015年～	神戸薬科大学理事	
2010年4月～2013年3月	日本薬学会化学系薬学部会役員	
2009年4月～	薬剤師国家試験出題基準改定部会委員	
2010年4月～	有機合成化学協会評議委員	
2011年4月～2012年3月	近畿化学協会事業企画委員	
2012年1月～2013年12月	有機合成化学協会関西支部副支部長	
2014年1月～2015年3月	長井記念薬学研究奨励支援準備委員会委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	副学長・教授	氏名	中山 尋量
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 薬学部学生への教育		2007年1月～現在	神戸薬科大学の6年制への学生には、基礎化学、無機錯体化学、物理化学 I、総合薬学講座の講義、基礎化学実習の指導を行っている。 また、5年次生からは卒業研究の指導を行っている。		
(2) 薬学研究科院生への教育		2009年1月～2012年3月 2009年～現在	物理化学 I（旧カリ） 神戸薬科大学薬学研究科院生に薬学演習、課題研究の指導を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
薬学生のための基礎化学		2015年2月28日	編集 廣川書店		
薬学生のための基礎物理		2016年3月30日	編集 廣川書店		
物理系薬学 I. 物質の物理的性質（第2版）		2015年3月20日	編集 東京化学同人		
物理系薬学 II. 化学物質の分析		2016年4月1日	編集 東京化学同人		
物理系薬学 III. 機器分析・構造決定		2016年11月4日	編集 東京化学同人		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学生部長		2008年4月～2010年3月			
学生就職部長		2010年4月～2012年3月			
教務部長		2013年4月～2019年3月			
学生支援センター長		2018年4月～現在			
II 研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Hayashi A., Kubota M., Okamura M., Nakayama H.	論文	Chem Pharm Bull., 2015, 63(1), 13-17. "Complex Formation with Layered Double Hydroxides for the Remediation of Hygroscopicity"
Maeda H., Iga Y., Nakayama H.	論文	J. Inclusion Phenom., 2016, 86(3-4), 337-342. "Characterization of Inclusion Complexes of Betahistine with β -Cyclodextrin and Evaluation of their Antihumidity Properties"
Hayashi A., Hara N., Sugimura K., Masuda H., Oku E., Fujikake S., Noda S., Nakayama H.	論文	Clay Sci., 2016, 20(3-4) 43-48. "Intercalation Behavior of Carboxylic Acids and their Sodium Salts with Layered Double Hydroxide in Methanol"
Maeda H., Katsushiro M., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull, 2017, 32, 21-25. "Introduction of Phosphate Group into β -Arbutin by cyclo-Triphosphate"
Maeda H., Morita K., Matsuo R., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull, 2019, 35, 55-58. "Introduction of Phosphonate Group into Kojic Acid by Diphosphonate of Phosphate"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「ヒドロタルサイト様化合物とケトプロフェンの複合体形成」	2016年3月	第136回日本薬学会年会
"Phosphorylation of Arbutin with cyclo-Triphosphate in Aqueous Solution"	2016年9月	9th International Symposium on Inorganic Phosphate Materials
「シクロデキストリンによるエトドラクの苞接能評価」	2017年3月	第137回日本薬学会年会

「アセトニトリルを用いた炭酸型層状複水酸化物によるカルボン酸化合物のインターカレーション」	2018年3月	第98回日本化学会年会
「塩化物型層状複水酸化物によるカルボン酸ガス吸着特性」	2019年3月	第99回日本化学会年会
3. 講演等		
演題名	発表年・月	場所等
「層状水酸化物の医薬、環境材料への展開」	2016年9月	第2回「次世代バイオマテリアル」を考える会（明治大学）
「層状化合物を利用した環境汚染物質の除去 -層状リン酸ジルコニウムを中心に-	2016年12月	第2回桜花城北セミナー
III 学会等および社会における主な活動		
2016年9月～現在	日本無機リン化学学会副会長	
2005年4月～現在	日本薬学会近畿支部委員	
2011年4月～2018年3月	近畿化学協会代議員	
2012年9月～2015年3月	薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に関する調査研究チーム委員	
2016年8月～現在	医道審議会薬剤師分科会薬剤師国家試験出題基準改定部会委員	
2008年7月～現在	薬学共用試験センターCBT実施委員会委員	
2018年7月～現在	薬学共用試験センター財務委員会委員	
2018年4月～現在	大学コンソ大学コンソーシアムひょうご神戸FD・SD委員会 副委員長	
2017年4月～2018年3月	大学基準協会評価委員会委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 副学長・教授	氏名 北川 裕之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
<p>1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）</p> <p>(1) 本学薬学部学生への教育</p>	1997年4月-現在に至る	<p>学部学生に生化学と分子生物学の講義を行っている。</p> <p>1) 担当している分野の進歩は著しいので、下記の分担執筆した教科書を用いながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）についてプリントを作成し、適宜配付している。</p> <p>2) できるかぎり疾患、診断薬、治療薬に関連する事項を重点的に解説している。</p> <p>3) 薬剤師国家試験の難易度を学生に意識させるために、過去に出題された国家試験の問題を10問程度選び、講義終了10分前より配付し、数回確認テストとして実施している。また、更に知識を定着させるために、この問題の一部を定期試験に出題している。</p> <p>4) 講義中にレポート課題を与え、講義終了後に提出させ、添削を行ったものを次回の講義時に返却している（3回程度）。</p> <p>5) 学生による授業評価は、本学では2004年度より2年に一度行われているが、生化学、分子生物学ともに平均以上の評価を得ている。特に、最近行われた5回の授業評価では、いずれもベストティーチャー賞を受賞した（下記の4を参照）。</p> <p>学部学生に生物学系の実習指導を行っている。</p> <p>1) 組換え医薬品に関する理解を深めさせるために、最新の遺伝子工学に関する動向を反映するような実習内容に随時変更を行い、実習テキストも改訂している。</p> <p>2) 実習時間の最後に学生個々と教員が実習内容について質疑応答を行い、その日に行った実習を理解できるようにしている。</p> <p>3) 学生による実習評価も本学では2年に一度行われているが、平均以上の評価を得ておりおおむね好評である。</p>

<p>(2) 本学薬学研究科大学院生の教育研究指導</p>	<p>1994年4月-現在に至る</p>	<p>学部学生に卒業研究の指導を行っている。</p> <p>1) 学生個々に実験に対する目的意識を持たせるよう、随時質疑応答を行っている。</p> <p>2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表する機会を与えている。</p> <p>3) できるかぎり英文で書かれた論文を読むように奨励し、少なくとも年に一度はその内容をまとめて発表する機会を与えている。</p> <p>大学院薬学研究科院生への生化学（生命科学）特論講義と演習及び研究指導を行っている。</p> <p>1) 講義は、最新のデータを分かりやすく解説するために、動画を用いたパワーポイントを使用している。</p> <p>2) 演習時には、研究分野の最近の動向を学生に把握させるため、学生が主体的に国際的な雑誌に発表された論文を論理的に説明でき、活発に討論に参加できるように演習日の少なくとも2日前までにはレジュメを全員に配付することを義務づけている。</p> <p>3) 学生に論理的な思考力と表現力が身に付くように、定期的に自分の研究内容を発表させ、研究室での討論を行い、そのことを通じて現在の自分の研究内容の進展状況や問題点も把握出来るように指導している。</p> <p>4) 学生には、少なくとも毎年一回は学会発表できるように指導している。</p>
<p>(3) 医学部学生への教育</p>	<p>2008年4月-現在に至る</p>	<p>神戸大学医学部2年生に生化学（糖質の構造と機能）の講義を行っている。</p>
<p>(4) 医学研究科大学院生への教育</p>	<p>2007年4月-現在に至る</p>	<p>神戸大学大学院医学研究科院生に薬物治療学の講義を行っている。</p>
<p>(5) 他の研究科の大学院生への教育</p>	<p>2006年11月 2007年6月 2008年5月 2010年2月 2016年6月</p>	<p>北海道大学大学院先端生命科学院の院生に糖鎖生物学の講義を行った。</p> <p>北陸大学大学院薬学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。</p> <p>京都大学大学院生命科学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。</p> <p>九州大学大学院システム生命科学府院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を行った。</p> <p>名古屋大学大学院工学研究科院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を行った。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>		

NEW生化学第2版（廣川書店、編集：堅田利明、菅原一幸、富田基郎）	2006（平成18）年3月31日	「IV.4 組換えDNA技術と薬学への応用」を記述した（pp. 481-517）。
スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学 I. 生命現象の基礎（東京化学同人、日本薬学会編）	2015（平成27）年3月30日	「第5章 糖質」を記述した（pp. 28-34）。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 ベストティーチャー賞（2年ごとに表彰、ただし2014年度は表彰なし、また2018年度以降は既受賞者の表彰なし） 入試部長 大学院主幹 教務部長 入試部長 学生就職部長 キャリア支援部長	2006年度、2008年度、2010年度、2012年度、2016年度 2007年4月1日-2008年3月31日 2008年4月1日-2010年3月31日 2010年4月1日-2012年3月31日 2012年4月1日-2014年3月31日 2014年4月1日-2018年3月31日 2018年4月1日-2019年3月31日	生化学III(2006年度)、分子生物学I(2008年度)、分子生物学I(2010年度)、分子生物学I(2012年度)、分子生物学Iおよび生化学III(2016年度) 高大連携プログラムの構築に携わった。 大学院薬学研究科薬科学専攻設置申請に携わった。 薬学6年制におけるカリキュラムの改正に携わった。 高大連携プログラムの拡充、ネット出願の設置、入試制度の改革に携わった。 本学奨学生制度の拡充、4年時生の「キャリアデザイン講座」の発足に携わった。 キャリア支援プログラムの改革に携わった。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Koike, T., Mikami, T., Shida, M., Habuchi, O., and Kitagawa, H.	論文	Sci. Rep. 2015, 5, 8994. "Chondroitin sulfate-E mediates estrogen-induced osteoanabolism."

Izumikawa, T., Dejima, K., Watamoto, Y., Nomura, K. H., Kanai, N., Rikitake, M., Tou, M., Murata, D., Yanagita, E., Kano, A., Mitani, S., Nomura, K., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2016, 291 (44), 23294-23304. "Chondroitin 4-O-sulfotransferase is indispensable for sulfation of chondroitin and plays an important role in maintaining normal life span and oxidative stress responses in nematodes."
Nadanaka, S., Kinouchi, H., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2018, 293, 444-465. "Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/ β -catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion."
Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, Y.-C., Tsai, C.-F., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, S.-C., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. 2019, 15, 699-709. "Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR σ -cortactin axis."
Shida, M., Mikami, T., Tamura, J., and Kitagawa, H.	論文	Biochim. Biophys. Acts. 2019, 1863, 1319-1331. "Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha V \beta 3$."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Deciphering roles of phosphorylation and sulfation in regulating trafficking and functions of proteoglycans.	2016年10月	EMBO workshop on "Glycosylation in the Golgi complex"
Chondroitin 6-sulfation regulates perineuronal net formation and neural plasticity.	2016年12月	46th Annual Meeting of the Society of Neuroscience
Glycosaminoglycans in neural development.	2017年5月	CEREBRAL CORTEX PLASTICITY: IN AND AROUND FAST-SPIKING INHIBITORY INTERNEURONS
コンドロイチン硫酸鎖による新たな細胞増殖の制御機構	2018年11月	第16回糖鎖科学コンソーシアムシンポジウム

Deciphering the structural and functional diversity of chondroitin sulfate chains in the brain.	2018年12月	Controlling neuronal plasticity; developmental disorders and repair
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年4月～現在に至る	日本生化学会近畿支部 幹事	
2006年4月～現在に至る	プロテオグリカンフォーラム 世話人	
2007年4月～2013年12月	FCCA:Forum Carbohydrate Coming of Age 幹事	
2007年4月～2013年12月	Trends in Glycoscience and Glycotechnology 編集委員	
2007年8月～現在に至る	日本糖質学会 評議員	
2008年1月～2011年12月	Journal of Biochemistry, Advisory Board	
2008年7月～2013年3月	神戸大学グローバル COEプログラム「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」事業推進担当者	
2009年1月～2017年12月	Glycoconjugate Journal 編集委員	
2009年4月～現在に至る	神戸がん研究会 世話人	
2009年4月～現在に至る	日本結合組織学会 評議員	
2009年10月～2011年9月	日本生化学会 代議員	
2010年9月～2010年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員	
2012年4月～2017年3月	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「疾患糖鎖生物学に基づく革新的治療薬の開発」研究代表者	
2012年6月～2013年11月	科学研究費委員会専門委員	
2012年11月～現在に至る	日本糖鎖コンソーシアム(JCGG) 幹事	
2013年9月～2013年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員	
2014年1月～2019年12月	日本生化学会 「生化学」誌企画委員	
2015年4月～現在に至る	Scientific Reports 編集委員	
2015年11月～2019年10月	日本生化学会 代議員	
2015年11月～現在に至る	日本生化学会 評議員	
2016年1月～2017年12月	Journal of Biochemistry, Associate Editor	
2015年6月～2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会長	
2016年8月～2017年7月	特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員、及び卓越研究員候補者選考委員会書面審査員	
2018年1月～現在に至る	Journal of Biochemistry, Editor	
2018年4月～現在に至る	「ひょうご産学連携コーディネーター協議会」運営委員および「TL0ひょうご協議会」運営委員	
2019年4月～現在に至る	日本薬学会 理事	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	教授	氏名	小林 典裕
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002. 4. 1～2019. 12. 31		<p>調査対象の期間にわたって、『分析化学I』（1単位，化学平衡），『分析化学II』（1単位，化学物質の検出と定量），『臨床検査学II』（1単位（50%を分担），分析技術の臨床応用），『分析化学系実習』（1単位，化学物質の検出と定量）を担当してきた。授業は，指定の教科書（次項参照）に加え，必要に応じてプリントを配付して併用した。隔年で行われる授業アンケートを参考に授業の改善を図っている。前年度は，学生の出席率と授業への集中力を高める目的で，平常点（出席と授業終了前の小テスト）の加算を初めて行った。板書を多用する授業スタイルなので，早くから蛍光色のチョークを採用し，できるだけ大きく鮮明に書くように心がけている。実習では，意欲と態度を重視している。実験開始前の講義では，標準的な実験法を教卓で自ら実演し，こまめに実験室を巡回して実技指導に努めている。</p>	
2	作成した教科書、教材、参考書	2008. 1. 1～2019. 12. 31		<p>下記の教科書の執筆に関わった。 『免疫測定法』（講談社、編著），『NEW薬品分析化学』（廣川書店，編著），『NEW薬学機器分析』（廣川書店，分担），『コアカリ対応 分析化学』（丸善，分担），『ベーシック薬学教科書シリーズ2. 分析科学』（化学同人，分担），『パートナー分析化学II』（南江堂，分担），『スタンダード薬学シリーズ2. 物理系薬学 IV. 演習編』（東京化学同人，分担），『薬学分析科学の最前線』（じほう，分担），『免疫測定法－基礎から先端まで－』（講談社，編著）。 詳細については，研究活動の欄を参照のこと。このほか，学生実習用テキスト（『分析化学系実習』），授業用テキスト（『臨床検査学II』，『分析化学III』）を作成し，活用した。</p>	
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等			特になし	
4	その他教育活動上特記すべき事項			2012. 4～2014. 3 学生就職部長	

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
小林 典裕	著書	『免疫測定法』生物化学的測定研究会編（講談社，2014）.1-40, 47-76, 124-135, 152-157.
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-Shot in Vitro Evolution Generated an Antibody Fragment for Testing Urinary Cotinine with More Than 40-Fold Enhanced Affinity"
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2015, 87(24), 12387-12395. "Gaussia Luciferase as a Genetic Fusion Partner with Antibody Fragments for Sensitive Immunoassay Monitoring of Clinical Biomarkers"
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, E. Katayama, M. Fujita, M. Narasaki, A. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull.2018, 47(7), 1062-1070. "Antibodies and Engineered Antibody Fragments against M13 Filamentous Phage to Facilitate Phage-Display-Based Molecular Breeding."
I. Morita, H. Oyama, Y. Kanda, M. Yasuo, A. Ito, M. Toyota, Y. Hayashi, T. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(1), 123-131. " Enantioselective Monoclonal Antibodies for Detecting Ketamine to Crack Down on Illicit Use"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Generation, molecular breeding, and biomedical application of antibodies specific to low molecular weight drugs	2015.1	The 2015 Annual convention of the Korean Society of Applied Pharmacology
In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019.5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine

Generation of monoclonal antibodies for on-site analysis of psilocin and psilocybin in hallucinogenic mushrooms	2019. 5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
アッセイ感度の向上を目指す「抗体育種」：抗コチニン抗体を例として	2017. 7	日本法中毒学会第36年会
新世代の高性能イムノアッセイを目指す「抗体育種」	2018. 8	日本分析化学会第67年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年 4 月～2019年12月	日本分析化学会 近畿支部常任幹事	
2008年12月～2019年12月	日本臨床化学会 近畿支部評議員	
2007年 4 月～2014年6月	生物化学測定研究会 副会長	
2014年6月～2017年12月	生物化学測定研究会 会長	

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床薬学研究室	職名	教授	氏名	江本 憲昭
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2008年4月1日	「生理学」6年制課程3年次	講義では視覚的な理解を促すために図表や写真を含めたパワーポイントファイルを提示しながら進めている。講義前にパワーポイントファイルの内容をプリントし、一部穴埋め形式にして配布している。講義内容については、臨床医としての経験に基づき、具体的な疾患や症例を提示しながら最近の臨床エビデンスなどを交えるなど、学生の学習意欲を高める工夫を行っている。また、知識を定着させる目的で、国家試験の問題を改変したものを講義終了前に提示し、その内容を解説している。	
		2009年4月1日	「薬物治療学Ⅲ」6年制課程4年次		
		2009年4月1日	「実務実習事前教育」6年制課程4年次		
		2011年4月1日	「処方解析」6年制課程6年次		
		2013年4月1日	「機能形態生理学」6年制課程2年次		
		2018年4月1日	「薬物治療学Ⅳ」6年制課程3年次		
		2019年4月1日	「薬物治療学Ⅴ」6年制課程4年次		
2 作成した教科書、教材、参考書		2008年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2009年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2010年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2011年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2012年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2013年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2014年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2015年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2016年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		
		2017年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		

	2018年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2019年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2020年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作製
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年4月～2017年3月 2019年4月～現在	大学院主幹 学生部長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Adhikara IM, Yagi K, Mayasari DS, Ikeda K, Kitagawa H, Miyata O, Igarashi M, Hatakeyama K, Asada Y, Hirata KI, Emoto N.	論文	Chondroitin sulfate N-acetylgalactosaminyltransferase-2 deletion alleviates lipoprotein retention in early atherosclerosis and attenuates aortic smooth muscle cell migration. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> (2019) ; 509: 89-95.
Nugroho DB, Ikeda K, Kajimoto K, Hirata KI, Emoto N.	論文	Activation of neuregulin-4 in adipocytes improves metabolic health by enhancing adipose tissue angiogenesis. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> (2018) 504: 427-433.
Wardhana DA, Ikeda K, Barinda AJ, Nugroho DB, Qurania KR, Yagi K, Miyata K, Oike Y, Hirata KI, Emoto N.	論文	Family with sequence similarity 13, member A modulates adipocyte insulin signaling and preserves systemic metabolic homeostasis. <i>Proc Natl Acad Sci U S A.</i> (2018) 115: 1529-1534.
Arfian N, Kusuma MH, Anggorowati N, Nugroho DB, Jeffilano A, Suzuki Y, Ikeda K, Emoto N.	論文	Vitamin D upregulates endothelin-1, ETBR, eNOS mRNA expression and attenuates vascular remodelling and ischemia in kidney fibrosis model in mice. <i>Physiol Res.</i> (2018) ;67: S137-S147.
Yorifuji K, Uemura Y, Horibata S, Tsuji G, Suzuki Y, Miyagawa K, Nakayama K, Hirata KI, Kumagai S, Emoto N.	論文	CHST3 and CHST13 polymorphisms as predictors of bosentan-induced liver toxicity in Japanese patients with pulmonary arterial hypertension. <i>Pharmacol Res.</i> (2018) Aug 14. pii: S1043-6618(18)30412-2. doi: 10.1016/j.phrs.2018.08.011.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Translational Research of Endothelin System, Pulmonary Hypertension and Diabetic Nephropathy	2019年・7月	Jogja Cardiology Update 2019 Indonesia
膠原病にはなぜ肺高血圧症が合併しやすいのか	2019年・6月	第4回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会
静注PGI2製剤導入のタイミング：6th WSPHからのメッセージ	2018年・9月	第66回日本心臓病学会学術集会
Current Status and Perspective of the Pulmonary Hypertension Registries in Japan	2018年・7月	Annual Scientific Session of the Korean Pulmonary Hypertension Society 2018
インドネシアにおける心房中隔欠損症に伴う肺高血圧診療の現状	2018年・6月	第3回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1987年6月～現在	日本内科学会	(2002年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2014年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医)
1987年4月～現在	日本循環器学会	(2004年3月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医、2015年4月～2020年3月：日本循環器学会評議員)
2000年10月～現在	日本高血圧学会	(2009年10月～現在：日本高血圧学会評議員、2010年10月～現在：日本高血圧学会専門医)
2004年4月～現在	日本医学教育学会	
2012年11月～現在	国際心臓研究学会日本部会	(2012年11月～現在：国際心臓研究学会 日本部会 評議員)
2013年9月～現在	International Conference on Endothelin	International Advisory Board
2016年4月～現在	日本肺高血圧・肺循環学会	(2016年4月～現在：日本肺高血圧・肺循環学会常任理事)

専任教員の教育・研究業績

所属 数学研究室	職名 教授	氏名 内田 吉昭
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
数学 I と数学IIにおいて，習熟度別クラスの導入	2008年4月～現在に至る	入学してきた学生の数学における学力(高等学校での数学IIIおよびCの履修の有無など)に差があるので，習熟度別の授業を行っている。
統計学 I とIIにおいて，サブノートの作成	2009年4月～現在に至る	統計学をなるべく視覚を使って理解してもらうために，グラフ等を多く使用したサブノートを作成して，授業の補助として使っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
薬学系学生のための微分積分 熊澤美裕紀共著 ムイスリ出版	2016年3月	
数えて描いて塗って学ぶ グラフ理論ワークブック 内田吉昭著/日本評論社	2018年7月	
わかりやすい微分積分 内田吉昭/ 熊澤美裕紀共著 ムイスリ出版	2020年2月	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Y.Uchida	論文	Delta-unknotted operations and ordinary unknotting operations Topology and its Applications 196 (2015) 1019-1022
2. 学会発表		

内田

演題名	発表年・月	学会名
Δ -unknotting number one knot without ribbon singularity is prime	2015・8	拡大KOOKセミナー
Δ -unknotting number one knot without ribbon singularity is prime	2015・9	瀬戸内結び目セミナー
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1988年4月～現在に至る	日本数学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 沼田 千賀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～現在	大学院修士課程医療薬科学研修特論においては、緩和医療を中心に薬物療法と患者心理についての講義、ワークを行っている。ワークでは「死生観」について2～3人でのディスカッションを行い、「死」から見えてくる患者心理を感じられるように工夫している。
	2010年～現在	実務実習事前教育においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行っている。また自己の到達度合いが分かるように「ルーブリック評価」を導入している。
	2011年～現在	薬害に関する講義および薬害被害者の体験談を聞く授業を実施し、学生が薬害について深く考え討議する機会となっている。
	2013年～現在	大学院がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」において、がん医療に従事する薬剤師の養成を行っている。「がん医療薬学特論」の講義・演習で模擬患者を使った服薬指導や海外から多職種連携の研究を行っている専門の先生を招聘し、ワークショップ形式での症例検討を行うなど、実践的な教育に取り組んでいる。
	2016年～現在	1～2年次生対象の「アクティブラボ」の科目では、本学の地域連携サテライトセンター隔月で開催している「メディカル・カフェ」に学生が参加し、がん患者やそのご家族、医療従事者と直接話をする機会を設けている。この経験が、医療者としての意識や資質の向上につながっている。
	2019年9月～現在	多職種連携の授業・演習として甲南女子大学看護リハビリテーション学部と共同で行うIPE科目「在宅医療演習」を2015年から打ち合わせを重ね、2019年9月から実施となった。演習で使用する症例は、実際に在宅で活躍している薬剤師5名にインタビューを行い、それを元に作成した。現場に近い内容や問題点を含んだ、実践的な内容になっている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月15日	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門（共著）
	2011年3月～現在	実務実習事前教育用テキストの作成

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	<p>2014年4月26日</p> <p>2015年5月23日</p> <p>2016年2月14日</p> <p>2016年10月23日</p> <p>2016年11月1日</p> <p>2019年2月24日</p>	<p>一般社団法人 がん哲学外来「がん哲学外来とは」(大阪)講演</p> <p>日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 ルーブリック作成ワークショップ(星薬科大学)講演</p> <p>第10回がんプロシンポジウム「がん患者の立場から、薬剤師教育を考える」(大阪)講演</p> <p>がんプロ連携7大学合同研修会「神戸薬科大学における「がん哲学学校 メディカル・カフェ」の取り組みと参加者および学生の意識変化について」(大阪)講演</p> <p>レギュラトリーサイエンスエキスパート研修会「薬学部における薬害教育の取り組み」(東京)講演</p> <p>文部科学省：多様なニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン」事業「青少年へのがん教育～中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化～」(大阪)講演</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	<p>2010年4月～現在</p> <p>2010年1月～2016年</p> <p>2012年4月～2017年3月</p> <p>2014年4月～2016年3月</p> <p>2015年4月～現在</p> <p>2015年6月～現在</p> <p>2015年6月～2017年3月</p> <p>2017年4月～現在</p> <p>2018年4月～2020年3月</p>	<p>OSCE実施委員長</p> <p>薬学教育者・薬剤師へのFD活動として、タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップin近畿に協力</p> <p>がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」担当</p> <p>学生就職委員会 委員</p> <p>がん哲学学校 in 神戸 メディカルカフェを開催し、地域のがん教育を推進</p> <p>甲南女子大学との連携教育プログラムワーキンググループ委員</p> <p>地域連携教育推進ワーキンググループ委員</p> <p>地域連携サテライトセンター運営委員</p> <p>学生委員会 委員</p>
II 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
沼田千賀子	著書	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門（共著）
寺岡麗子、中山みずえ、湯谷玲子、沼田千賀子、岡本禎晃、平野剛、富田猛、平井みどり、北河修治	論文	1日1回張り替え型フェンタニルクエン酸塩貼付剤（フェントステープ）の薬物残存量に影響を与える要因，日本緩和医療薬学会，9，25-32(2016)
寺岡麗子，三宅真衣，伊藤真依，塩野朋香，沼田千賀子，中山みずえ，岡本禎晃，平井みどり，湯谷玲子，北河修治，坂根稔康	論文	フィルムドレッシング材による1日1回型フェンタニルクエン酸塩経皮吸収型製剤の半量投与，日本医療薬学会，43（12），671-679（2017）
横山郁子，浅田聖土，藤本佳昭，河内正二，沼田千賀子	論文	中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化，日本緩和医療薬学雑誌，11（3）：73-79（2018）
後藤恵子，富澤崇，有田悦子，沼田千賀子，野呂瀬崇彦，井手口直子，半谷真七子，平井みどり	論文	かかりつけ薬剤師に求められるコミュニケーションスタンダード（Pharmaceutical Communication Standard）の構築，日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会誌，17(2)，17-29(2019)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Adhesion Levels of Fentanyl Transdermal Products	2016年6月	9th World Research Congress of the European Association for Palliative Care
中学1年生を対象としたがん教育による意識変化	2017年6月	第11回緩和医療薬学会（札幌）

オピオイド系鎮痛剤の投与量に影響を与える因子の調査研究	2018年2月	第12回緩和医療薬学会（東京）
新人薬剤師に求められる基本的な社会的スキルに関する研究 —基本的な社会的スキルの分析—	2018年9月	第3回日本薬学教育学会大会（東京）
スボレキサントの不眠改善効果およびその因子に関する調査	2019年11月	第29回日本医療薬学会年会（福岡）
3. その他（講演等）		
演題名	発表年・月	講演場所
生きていく役割・価値との出会い ～あなたは人生から期待されている存在～	2017年1月	西神戸医療センター 緩和ケアカンファレンス（神戸）
終末期の患者に対する精神的な支援	2017年2月	日本薬学会近畿支部 第4回在宅医療推進ワークショップ（大阪）
がんサバイバーの尊厳をサポートするコミュニケーション	2017年3月	がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ（大阪）
病気と老化の原因「活性酸素」について	2018年1月	阪神シニアカレッジ（兵庫）
カフェでコミュニティとつながる～神戸薬科大学の取り組み～	2018年10月	昭和薬科大学「昭薬祭」（東京）

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2002年5月～現在	日本医療薬学会会員
2005年8月～現在	(社)兵庫県薬剤師会認定 禁煙指導認定薬剤師
2006年4月～2020年5月	兵庫県病院薬剤師会 理事
2006年4月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会員
2007年3月～現在	日本緩和医療薬学会会員
2007年4月～現在	日本ホリスティック医学協会会員
2007年11月～現在	日本メンタルヘルス協会公認 心理カウンセラー
2009年4月～2017年3月	6年制認定実務実習指導薬剤師
2009年8月～現在	日病薬認定指導薬剤師
2009年10月～2014年10月	がん薬物療法認定薬剤師
2011年4月～現在	ブザン教育協会マインドマップ®アドバイザー
2015年1月～現在	(財)レギュラトリーサイエンスエキスパート認定
2015年4月～2017年3月	日本緩和医療薬学会 広報副委員長
2015年7月～現在	(社)がん哲学外来 監事
2016年1月～現在	(社)がん哲学外来市民学会 がん哲学外来コーディネーター
2016年6月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 理事
2018年4月～現在	一般社団法人 日本ファンクショナルダイエット協会 ケトジェニックダイエットアドバイザー
2019年8月～現在	(社)臨床分子栄養医学研究会 認定カウンセラー

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 田内 義彦
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 薬学部学生への教育	2010年8月～現在 2011年4月～現在 2011年2月～現在 2012年4月～現在 2014年4月～現在 2015年4月～現在	<p>実務実習事前教育実習にて、実務家教員として調剤薬局における接遇や患者対応を中心に、臨床現場に対応できる学生の育成に従事するとともに、指導薬剤師の確保やスケジュール作成に努めている。</p> <p>社会薬学Ⅰの講義において、薬剤師の歴史、社会的役割、医薬分業について講義を行い、薬剤師の義務と責任について学部1年生に認識してもらえよう、臨床経験を活かした解説を行っている。</p> <p>「海外薬学研修」担当者として、ボストンで研修を行う学生に、より理解力を高めるために事前講義を行う。研修に同行し、アメリカにおける薬学教育と薬剤師業務を深く理解させるための補足説明や質疑応答を行い研修の成果向上に努めている。また研修終了後の報告会を催し、参加者への意識付けと後進の参加意欲の向上に努めている。</p> <p>漢方医学の講義において、漢方薬の臨床で用いる上で注意すべき点や調剤方法をビデオ等を活用し、理解してもらい、臨床上での漢方薬の活用に関し、臨床経験に基づいた指導をしている。</p> <p>調剤学Ⅰの講義において、薬剤師の責務に関し、倫理規定等を中心に身につけるべき倫理観や使命感について講義すると共に、医薬分業やチーム医療において薬剤師が担うべき責務に関し、実戦での経験を交え指導している。</p> <p>OTCヘルスケア論の講義において、これからの薬剤師が担うべきセルフメディケーションの基本原則に関し、OTC販売の実際をもとに解説し、その重要性を理解させると共に、OTCでの販売実績が多い漢方薬の販売に関し、実践的な病態解析とそれに即した処方設計を解説し、即戦力となりうる知識・技能の習得を目指し、指導を行っている。</p>

	2018年4月～現在	地域医療・プライマリケア論の講義において、これからの薬局薬剤師が担うべき地域包括ケアシステムにおける役割を、かかりつけ薬局、健康サポート薬局の機能と役割と共に現在保険薬局で担っている業務内容を元に説明し、薬剤師としての将来像の構築に役立つ指導を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年3月～現在 2015年3月～現在	実務実習事前教育用テキストの作成 「薬剤師になる人のための生命倫理と社会薬学」（法律文化社）共著
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2015年2月14日 2015年2月21日 2015年10月4日 2016年1月31日 2016年2月20日 2016年3月21日 2017年2月18日 2017年10月13日 2017年11月23日 2018年2月17日 2019年2月23日 2019年6月29日 2020年2月9日	平成26年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 株式会社祥漢堂 社内研修講演会 講演 日本東洋医学会関西支部 兵庫県部会 講演 平成27年度 兵庫県薬剤師会・兵庫県病院薬剤師会 共催講演会 講演 平成27年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 第14回近畿地協薬剤師交流集会分科会 講演 平成28年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 区民健康講座 講演（東灘区医師会） 第15回近畿地協薬剤師交流集会分科会 講演 平成29年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 平成30年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演 第9回くすりと健康セミナー（神戸薬科大学） 講演 平成30年度登録販売者の資質向上のための外部研修（兵庫県薬剤師会） 講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年1月～現在 2018年6月～現在	東灘区薬剤師会理事として、学生教育部門を担当。実務実習及び早期体験実習の受入や指導薬剤師の教育に従事。 兵庫県薬剤師会の薬学教育部門の委員として、県内における薬局実務実習の遂行に協力している。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

三木有咲, 波多江 崇, 猪野 彩, 井上知美, 上野隼平, 笠谷君代, 近藤亜美, 坂口知子, 佐々木信子, 田内義彦, 竹下治範, 辻華子, 中川素子, 野口 栄, 長谷川由佳, 水田恵美, 矢羽野早代, 山根雅子, 濱口常男	論文	子育て中の母親を対象とした調査にみる薬局薬剤師の職能認知と薬局薬剤師の課題, 社会薬学, 34 (1) : 24-33, 2015.
波多江 崇, 長谷川由佳, 白川晶一, 内海美保, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 濱口常男	論文	フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査, 医薬品相互作用研究, 39 (1) : 37-43, 2015
波多江 崇, 石田好宏, 伊東真知, 大島沙紀, 藤森可純, 猪野 彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見昭俊, 森口紗里, 濱口常男	論文	日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩基塩およびN-アセチルグルコサミンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス, 日本地域薬局薬学会誌, 4 (1) : 16-22, 2016.
波多江 崇, 田中智啓, 猪野 彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見昭俊, 濱口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖値上昇に対する難消化性デキストリンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス, 医薬品情報学, 18(4) : 289-294, 2017
高垣 伸匡, 水野 成人, 田内 義彦, 竹内 雅代, 福岡 敏雄	総説	神戸薬科大学におけるEBM ワークショップの導入と評価, 薬学教育 第4巻 (2020)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
海外薬学研修における学生の英語理解度の検証および効果的な英語事前教育についての考察	2015年7月25日	日本社会薬学会第34年会
薬学における漢方の現状	2015年10月4日	日本東洋医学会関西支部 平成27年度兵庫県部会
発信型海外薬学研修に向けた取り組み—米国の薬科大学での英語プレゼンテーション 実践報告—	2016年9月10日	日本社会薬学会第35年会
米国の薬局でのフィールドワーク実践報告—アクティブラーニングを取り入れた海外 薬学研修に向けた試み—	2017年9月23日	日本社会薬学会第36年会

米国薬学生から見た日本人薬学生の英語プレゼンテーション	2018年9月16日	日本社会薬学会第38年会
育児中の母親が薬の疑問について薬剤師に相談しない理由についての検討	2018年9月16日	日本社会薬学会第38年会
「副作用」の説明に着目した服薬指導時の薬剤師の対応についての検討	2018年9月16日	日本社会薬学会第38年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1988年4月～現在	日本薬学会 会員	
1998年4月～現在	日本医療薬学会 会員	
2003年1月～現在	日本医療薬学会 認定薬剤師	
2008年1月～現在	日本医療薬学会 指導薬剤師	
2003年4月～現在	日本薬剤師会 会員	
2013年6月～現在	日本地域薬局薬学会 会員	
2013年6月～現在	日本地域薬局薬学会 編集委員	
2014年6月～現在	日本地域薬局薬学会 理事	
2018年4月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	教授	氏名	向 高弘
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育（講義、実習） 物理化学II 放射化学 物理化学系実習		2011年4月～現在	物理化学IIの授業についてデジタル教材化し、DVDラーニング、e-ラーニングを実施している。また添削アルバイトを活用し、問題演習の添削を実施している。物理化学系実習では視聴覚教材を使用している。		
(2) 本学薬学部学生への教育（卒業研究指導）		2011年4月～現在	生命・自然現象の解明と疾患の新たな診断法・治療法の開発を目指した研究を指導している。 指導学部学生が以下の学会賞を受賞した(2015-2019年分)。		
		2015年3月31日	・日本薬学会第135年会 優秀発表賞 (2名)		
		2016年3月31日	・日本薬学会第136年会 優秀発表賞		
		2016年10月15日	・第66回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞		
		2017年10月14日	・第67回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞 (2名)		
		2018年9月8日	・第2回日本核医学会分科会放射性薬品科学研究会 CKJSRS2018トラベルgrant受賞		
		2018年10月13日	・第68回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞		
		2018年11月4日	・The 10th China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences Best Postar Award		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育 物理系基礎創薬学特論、物理系創薬学特論		2011年4月～現在	大学院生への講義と研究指導を行っている。 指導大学院生が以下の学会賞を受賞した(2015-2019年分)。		
		2015年8月21日	・第3回日本アミロイドーシス研究会学術集会 学術奨励賞		
(4) 他大学での講義		2016年6月	京都大学大学院薬学研究科の大学院生に基盤物理化学特論の講義を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書 放射化学・放射薬品学（第2版）		2011年12月30日	廣川書店(佐治英郎編集)の第2版の「第5章 原子核反応と放射性同位元素の製造」を執筆した。		

新 放射化学・放射医薬品学 (改訂第4版)	2016年8月15日	南江堂(佐治英郎ら編集)の改訂第4版の「第1章 原子核と放射能」を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 国家試験対策委員会委員 CBT実施委員会委員 神戸市消防局員への放射線実習 神戸市消防局員への放射線実習 大学院主幹 神戸市消防局員への放射線実習 神戸市消防局員への放射線実習 CBT実施委員会委員長 キャリア支援部長 神戸市消防局員への放射線実習	2013年4月～2016年3月 2013年4月～2018年3月 2015年7月13日 2016年7月21日 2017年4月～2019年3月 2017年7月20日 2018年8月2日 2018年4月～現在 2019年4月～現在 2019年9月3日	物理系担当として、国家試験対策を実施した。 CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。 神戸市消防局員16名に対し、放射線測定に関する実習を行った。 神戸市消防局員16名に対し、放射線測定に関する実習を行った。 大学院教授会、学位論文審査会の運営を担当した。 神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。 神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。 CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。 キャリア支援プログラムの改善を実施した。 神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masayori Hagimori, Takahiro Murakami, Kinue Shimizu, Motohiro Nishida, Takashi Ohshima and Takahiro Mukai	論文	<i>Medicinal Chemical Communications</i> , 7 (5), 1003-1006 (2016) "Synthesis of radioiodinated probes to evaluate the biodistribution of a potent TRPC3 inhibitor"
Masayori Hagimori, Eri Hatabe, Kohei Sano, Hirotaka Miyazaki, Hitoshi Sasaki, Hideo Saji and Takahiro Mukai	論文	<i>Biological & Pharmaceutical Bulletin</i> , 40 (3), 297-302 (2017) "An activatable fluorescent γ -polyglutamic acid complex for sentinel lymph node imaging" (Highlighted Paper Selected by Editor-in-Chief) (Featured Article in J-STAGE)

Masafumi Tanaka, Akira Hosotani and Takahiro Mukai	論文	<i>Journal of Labelled Compounds and Radiopharmaceuticals</i> , 61 (11), 857-863 (2018) "Indium-111 labeling of high-density lipoprotein-mimicking phospholipid-styrene maleic acid copolymer complexes and its biodistribution in mice"
Kohei Sano, Ling Bao, Natsuka Suzuno, Kento Kannaka, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane and Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 1 (5), 953-958 (2019) "Development of cancer-targeted single photon emission computed tomography/fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline"
Kento Kannaka, Kohei Sano, Masayori Hagimori, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane and Takahiro Mukai	論文	<i>Bioorganic & Medicinal Chemistry</i> , 27 (16), 3613-3618 (2019) "Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
NAD(P)H:quinone oxidoreductase 1(NQO1)標的放射性薬剤-安定性の向上を目指した電子供与基の導入 (優秀発表賞受賞)	2015年3月	日本薬学会第135年会
合成高分子を用いたディスク型脂質ナノ粒子の作製と物性評価 (優秀発表賞受賞)	2016年3月	日本薬学会第136年会
細胞内遊離亜鉛イオンの検出を目的とした蛍光プローブの開発 (優秀演題賞受賞)	2016年7月	第27回日本微量元素学会学術集会
がんの核医学診断を目的としたコンドロイチン硫酸被覆自己組織化ナノ粒子の開発 (優秀ポスター賞受賞)	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部大会
がんの光熱治療を目的としたコンドロイチン硫酸被覆金ナノロッドの開発 (優秀ポスター賞受賞)	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会
3. その他		
演題名	発表年・月	講演
ナノ粒子による分子イメージング	2017年2月	第14回OMIC事業推進セミナー
III 学会等および社会における主な活動		
1992年～現在	日本薬学会会員	

1997年～現在	日本薬物動態学会会員
1997年～現在	日本核医学会会員
2000年～現在	Society of Nuclear Medicine会員
2005年4月～2010年3月	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験における放射薬学関連問題に対する検討WG 九州・中国・四国支部担当委員
2006年～現在	日本分子イメージング学会会員
2007年～現在	日本癌学会会員
2008年10月～2009年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会 専門医試験小委員会委員
2009年～現在	Society of Radiopharmaceutical Sciences会員
2009年10月～2013年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会委員
2011年～現在	日本アイソトープ協会会員
2011年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員
2012年～現在	日本DDS学会会員
2013年1月～2015年3月	日本薬学会物理系薬学部世話人
2013年2月～現在	日本薬学会代議員
2013年4月～現在	日本薬剤学会会員
2014年9月～現在	日本がん分子標的治療学会会員
2015年5月～現在	金属の関与する生体関連反応シンポジウム (SRM) 評議員
2016年4月～現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験問題WG委員
2016年11月～現在	日本核医学会分科会 放射性薬品科学研究会 運営委員
2017年10月～2019年9月	日本核医学会評議員
2019年4月～現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 会長

所属 病態生化学研究室	職名 教授	氏名 加藤 郁夫
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1)薬学部学生に対する教育	2013年4月～現在	神戸薬科大学3年次生の「内分泌学」、「薬物治療学 I」、「薬物治療学 II」および「臨床生化学実習」を担当した。
(2)大学院修士課程学生に対する教育	2013年4月～現在	神戸薬科大学大学院薬学研究科修士課程学生（社会人、聴講生を含む）に対して、「病態解析治療学特論」を、また博士課程学生（社会人、聴講生を含む）に対しては、「病態薬理生化学特論」を担当：独自のプリントを作成、配布しパワーポイントを用いて解説を行っている。また、最終時間には、共通のテーマを与えて各学生に考察・発表を行わせ討論を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		「内分泌学」、「薬物治療学 I」および「薬物治療学 II」において、独自のプリント冊子を作成して、基礎から臨床に至る内容を講義した。また、最新のトピックに関しても紹介した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
(1) CBT対策委員会委員	2013年4月～2014年3月	CBT対策の実施。
(2) 実務実習運営委員会委員	2013年4月～2016年3月	実務実習の円滑なる実施。
(3) 学生就職委員会委員	2014年4月～2016年3月	学生生活や就職活動の支援。
(4) 国家試験対策委員会委員	2014年4月～2016年3月	国家試験対策の実施。
(5) 共同研究委員会委員	2015年4月～現在	共同研究の円滑なる実施。
(6) 教務委員会委員	2016年4月～2018年3月	教務運営の円滑なる実施。
(7) 研究設備等充実委員会委員	2017年4月～2020年3月	研究設備等の整備・充実。

(8) 入試委員会委員	2018年4月～2020年3月	入学試験等の円滑なる実施。
(9) 中央分析委員会委員	2019年4月～2020年3月	中央分析室の整備・充実及び円滑なる運営。
(10) 教務委員会委員	2020年4月～現在	教務運営の円滑なる実施。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
H. Antushevich, J. Bierła, B. Pawlina, M. Kapica, A. Krawczyńska, A. P. Herman, I. Kato, A. Kuwahara, R. Zabielski.	論文	Peptides 65, 1-5 (2015); Apelin's effects on young rat gastrointestinal tract maturation.
H. Antushevich, M. Kapica, A. Krawczyńska, A. Herman, I. Kato, A. Kuwahara, R. Zabielski.	論文	J. Physiol. Pharmacol. 67(3), 403-409 (2016); The role of apelin in the modulation of gastric and pancreatic enzymes activity in adult rats.
I. Kaji, Y. Akiba, I. Kato, K. Maruta, A. Kuwahara and J. D. Kaunitz.	論文	J. Pharmacol. Exp. Ther. 361(1), 151-161 (2017); Xenin augments duodenal anion secretion via activation of afferent neural pathways.
M. Słupecka-Ziemilska, P. Grzesiak, M. Jank, A. Majewska, A. Rak, P. Kowalczyk, I. Kato, A. Kuwahara, J. Woliński.	論文	PLoS One. 2018 Oct 19;13(10):e0205994; Small intestinal development in suckling rats after enteral obestatin administration.
A. Kuwahara, Y. Kuwahara, I. Kato, K. Kawaguchi, D. Harada, S. Asano, T. Inui, and Y. Marunaka.	論文	Am. J. Physiol. Gastrointest. Liver Physiol. 316(1), G785-G796 (2019); Xenin-25 induces anion secretion by activating noncholinergic secretomotor neurons in the rat ileum.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
急性拘束ストレス負荷マウスにおけるRubiscolin-6の抗うつ効果	2018年11月	日本薬学会北陸支部第130回例会; 佐藤玲菜、多河典子、加藤郁夫、光本泰秀。
Potent Antibacterial Activity of Peptides Designed from Salusin- β and HIV-1 Tat (49-57)	2018年12月	10th International Peptide Symposium / The 55th Japanese Peptide Symposium; M. Kimura, K. Kosuge, Y. Ko, N. Tagawa, I. Kato and Y. Uchida.

Secretory reflex pathway of Xenin-25 in the rat ileum.	2019年3月	9th Federation of the Asian and Oceanian Physiological Societies Congress, KOBE ; Kuwahara A., Kuwahara Y. Kato I. Inui T., Marunaka Y.
Neurogenic relaxation of Xenin on spontaneous circular muscle contractions in rat distal colon.	2019年3月	9th Federation of the Asian and Oceanian Physiological Societies Congress, KOBE ; Kuwahara Y., Kato I., Kuwahara A., Marunaka Y., Inui T.
ラット結腸における短鎖脂肪酸によるイオン分泌の神経反射回路	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会、神戸；ラット結腸における短鎖脂肪酸によるイオン分泌の神経反射回路
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1984年1月～現在	日本薬学会会員	
1986年8月～現在	日本ペプチド学会会員	
2006年5月～現在	日本内分泌学会会員	
2014年5月～現在	日本肥満学会会員	
2016年7月～現在	日本神経内分泌学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 教授	氏名 小西 守周
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	微生物学ⅠⅡ 2009年～ 免疫学ⅠⅡ 2012年と2013年度 免疫学 2014年～ 生物学系Ⅲ実習 2009年～2013年度 生物学系Ⅱ実習 2014年～2016年度 微生物学実習 2016年～	微生物学Ⅰ、Ⅱについては、アンケート結果に基づき、板書と教科書の併用で講義を進めている。免疫学は、講義時間、内容を考慮し、スライドとプリントによる講義を行っている。いずれの講義に関しても、できるだけ平易な表現を用いることで、理解しやすい授業を心がけている。さらに生物系の他講義との関わりがある内容に関しては、復習を兼ねて質問を行い、学生の集中力を維持できるようにしている。講義内容に関しては、最新の知見を取り入れつつ、薬剤師国家試験の出題範囲なども加味して、限られた講義時間の中に多くの内容を含むように無駄の無い授業を心がけている。また、いずれの講義も対象とする学生の知識レベルに合わせた講義を行うように努めている。特に免疫学に関しては、導入として前回の講義内容を説明し、集中しやすい雰囲気を作ることを心掛けている。 担当する実習は、内2016年に生物学Ⅱ実習から微生物学実習に名称が変更された。名称は変更されたものの、微生物の取り扱いに関する実習内容は大きく変更していない。実習では、できるだけ学生に考えることを推奨しており、知識や技術の習得だけではなく実験結果をもとに行う考察に関する指導に比較的多く時間をかけている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年	下記の教科書の執筆に関わった。 『薬学領域の微生物学・免疫学第2版』（廣川書店）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	Int. immunopharmacol. 2019, 67:408-416 "Maturation of dendritic cells by maitake α -glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination."
Yuan X, Tsujimoto K, Hashimoto K, Kawahori K, Hanzawa N, Hamaguchi M, Seki T, Nawa M, Ehara T, Kitamura Y, Hatada I, Konishi M, Itoh N, Nakagawa Y, Shimano H, Takai-Igarashi T, Kamei Y, Ogawa Y.	論文	Nat. Commun. 2018, 9(1):636. doi: 10.1038/s41467-018-03038-w. "Epigenetic modulation of Fgf21 in the perinatal mouse liver ameliorates diet-induced obesity in adulthood."
Nakayama Y., Masuda Y., Ohta H., Tanaka T., Washida M., Nabeshima Y., Miyake A., Itho N, Konishi M.	論文	Sci. Rep. 2017, 7:330. doi: 10.1038/s41598-017-00349-8. "Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus."
Kuroda M., Muramatsu R., Maedera N., Hamaguchi M., Fujimura H., Yoshida M., Konishi M., Itoh N., Mochizuki H., Yamashita T.	論文	J. Clin. Invest. 2017, 127(9) 3496-3509. "Peripherally derived FGF21 promotes remyelination in the central nervous system."
Ohta H., Konishi M., Kobayashi Y., Kashio A., Mochiyama T., Matsumura S., Inoue K., Fushiki T., Nakao K., Kimura I., Itoh N.	論文	Sci. Rep. 2015, 5:10049. doi: 10.1038/srep10049. "Deletion of the Neurotrophic Factor neudesin Prevents Diet-induced Obesity by Increased Sympathetic Activity."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
分泌型ヘムタンパク質Neudesinによる赤血球代謝調節機構の解析	2019年6月	第20回Pharmaco-Hematologyシンポジウム
Refeeding時の肝臓におけるFgf21の意義	2019年5月	第73回日本栄養・食糧学会大会
分泌因子Neudesinのがん免疫抑制作用について	2019年3月	日本薬学会 第139年会
III 学会等および社会における主な活動		
1999年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本肥満学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療薬学研究室	職名	教授	氏名	力武 良行
教育実践上の主な業績					
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		年月日	概 要		
総合薬学講座		2015年11月～	国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義した。		
実務実習事前教育		2015年9月～	医師としての視点からの内容も含めた実習とした。		
処方解析学・処方解析演習		2016年4月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。		
処方解析Ⅰ		2018年4月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。		
処方解析Ⅱ		2018年9月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。		
薬物治療学Ⅰ		2017年4月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。		
薬物治療学Ⅲ		2017年9月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。		
薬物治療学Ⅳ		2018年9月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。		
2 作成した教科書、教材、参考書		年月日	概 要		
図解 腫瘍薬学（川西正祐/賀川義之/大井一弥編集、南山堂）		2020年出版予定	消化器がんについて執筆した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		年月日	概 要		
臨床・基礎薬学連携シンポジウム		2018年10月21日	薬学教育に関する講演を行った。		
『神戸薬科大学研究論集Libra』第18号		2018年12月21日	本学におけるTBLトライアルに関して報告した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項		年月日	概 要		
がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン		2017年4月～	実習コーディネーターとして、事業遂行に参画した。		
Ⅱ 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>J Neurochem</i> 2018, 147(4), 495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and α -syntrophin in aquaporin-4 expression."
Tagashira T, Fukuda T, Miyata M, Nakamura K, Fujita H, Takai Y, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>Arterioscler Thromb Vasc Biol</i> 2018, 38(5), 1159-1169. "Afadin Facilitates Vascular Endothelial Growth Factor-Induced Network Formation and Migration of Vascular Endothelial Cells by Inactivating Rho-Associated Kinase Through ArhGAP29."
Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	<i>BMC Cancer</i> 2018, 18(1), 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	<i>Scientific Reports</i> . 2019, 9(1), 8065. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>Exp Cell Res</i> . 2019, 374(2), 333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
脳血管内皮細胞老化からのSASPを介したミクログリアの活性化	2019年12月	第42回日本分子生物学会年会（福岡）
9. シスプラチン耐性獲得機構におけるミトコンドリアDNA変異の役割	2019年12月	第42回日本分子生物学会年会（福岡）

Overexpression of cytotoxic T-lymphocyte-associated antigen-4 (CTLA-4) protects against abdominal aortic aneurysm (AAA) formation in mice.	2019年9月	European Society of Cardiology Congress (Paris, France)
Pharmacological blockade of C-C chemokine receptor 4 exacerbates atherosclerosis in apolipoprotein E-deficient mice.	2019年11月	The 91th AHA Scientific Sessions (Philadelphia, USA)
Nectin-Like Molecules as Novel Regulators in Angiogenesis and Atherosclerosis.	2019年3月	9th FAOPS2019 (Kobe)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1992年5月～	日本内科学会（総合内科専門医、認定内科医）	
1992年5月～	日本循環器学会（循環器専門医）	
2010年9月～	日本血管生物医学会（評議員）	
2011年6月～	日本分子生物学会	
2011年7月～	日本動脈硬化学会	
2011年9月～	日本生化学会（JB誌編集委員）	

専任教員の教育・研究業績

所属	衛生化学研究室	職名	教授	氏名	長谷川 潤
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
衛生薬学 I, II		2016年4月～		講義科目については、教科書の副次教材として独自のプリントを作成し、配布した。穴埋め形式にすることで重要なポイントが明確になるように工夫するとともに、章末にまとめ問題を載せることで定期試験に向けた勉強をやりやすくするとともに、国家試験の過去問（抜粋）を掲載することで、早いうちから国家試験を意識できるようにした。 最新の授業評価は、衛生薬学 I / 環境衛生学に関しては2018年度、衛生薬学 II に関して2019年度に行われ、おおむね良好な評価を得ている。 実習に関しては、講義との関連を意識させるような実習講義を行うとともに、最終日に討論とプレゼンテーションのコマを設け、思考力の育成と統合的 / 実質的な知識の醸成を試みている。	
環境衛生学		2017年4月～			
衛生薬学実習		2016年4月～			
2 作成した教科書、教材、参考書					
メディカルサイエンス臨床化学検査学		2014年1月		近代出版	
MY衛生薬学		2017年11月		株式会社テコム	
授業用プリント		2016年4月～2019年10月		衛生薬学 I, II, 環境衛生学で用いる授業の補助プリントを自作した。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Miura Y, Ngo Thai Bich V, Furuya M, Hasegawa H, Takahashi S, Katagiri N, Hongu T, Funakoshi Y, Ohbayashi N, Kanaho Y.		論文		Sci Rep. 2017, 7, 46649 "The small G protein Arf6 expressed in keratinocytes by HGF stimulation is a regulator for skin wound healing."	

Kamao M, Hirota Y, Suhara Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Okano T, Hasegawa H.	論文	Anal Sci. 2017, 33, 863 "Determination of Menadione by Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry Using Pseudo Multiple Reaction Monitoring."
Hirono J, Sanaki H, Kitada K, Sada H, Suzuki A, Lie LK, Segi-Nishida E, Nakagawa K, Hasegawa H.	論文	Neuroreport. 2018, 29, 174 "Expression of tissue inhibitor of metalloproteinases and matrix metalloproteinases in the ischemic brain of photothrombosis model mice."
Nakagawa K, Fujiwara K, Nishimura A, Murakami C, Kawamoto K, Ichinose C, Kunitou Y, Suhara Y, Okano T, Hasegawa H.	論文	Int J Mol Sci. 2019, 22, pii: E1971. "UBIAD1 Plays an Essential Role in the Survival of Pancreatic Acinar Cells."
Razali N, Horikawa I, Hohjoh H, Yoshikawa C, Hasegawa H.	論文	BPB Reports. 2019, 2, 39-47 "Prostaglandin-Modulated Interaction of Thymic Progenitor Cells with Blood Vessels during Estradiol-Induced Thymic Involution."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
組織の老化に伴う血管新生とその制御	2017年12月	2017年度生命科学系学会合同年次大会 (ConBio2017)
生体ストレスが誘導する血管系リモデリング	2019年3月	日本薬学会第139年会
フタル酸エステルを投与した妊娠マウスにおける骨形成因子の発現	2019年6月	第44回 日本毒性学会学術年会
Hasegawa H, Hohjoh H, Razali N, Maharjan BD, Nakagawa K, Mizutani K.	2019年7月	Neuro2019

妊娠初期のフタル酸エステル摂取による子宮の組織化学的変化	2019年9月	第92回日本生化学会大会
III 学会等および社会における主な活動		
1995年10月～現在	日本薬学会会員 (環境・衛生部会 2017年～2018年 財務委員, 2017年～現在 研究戦略委員, 2018年～現在 総務委員, 2019年～現在 学術誌編集委員)	
1995年12月～現在	日本生化学会会員 (2013年 関東支部例会 実行委員)	
2002年2月～現在	日本神経科学学会会員	
2008年2月～現在	日本細胞生物学会会員	
2008年3月～現在	日本脂質生化学会会員	
2017年1月～現在	老化促進モデルマウス (SAM) 学会会員	
2017年5月～現在	日本毒性学会会員	
2019年8月～現在	日本神経化学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	教授	氏名	坂根 稔康
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 学部学生に対する教育				教科書のポイントをまとめ、重要単語を記入できるように工夫したプリント、国家試験過去問題をまとめたプリントを作製して、学生に配布している。また、授業で説明する製剤の中で、入手可能なものに関しては購入し、製剤の実物を学生に見せている。	
(2) 大学院生への教育		2017年～ 2017年～ 2017年	創薬物理製剤学（3年生前期） 化粧品学（4年生前期）	様々な研究テーマや成果に触れることで、知識・見識を深めてもらうために、可能な範囲で、外部の研究者を招聘し、講演を聴いてもらっている。	
(3) 他大学での講義		2016年～ 2016年～ 2017年～	薬剤学特論（大学院修士課程） 臨床薬剤学特論（大学院博士課程） 薬物治療学特論（神戸大学大学院医学研究科）	修士課程の学生約20名を対象に、自分が得た研究結果を中心に解説している。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
(1) 「演習で理解する生物製剤学」（廣川書店）		2009年2月15日	第2章 薬物の分布（pp.73 - pp.96）, 第5章 薬物動態の解析（pp.189 - pp.240）を執筆した。		
(2) ベーシック薬学教科書シリーズ18 「薬物動態学」（化学同人）		2010年4月1日	第3章 薬物の分布（pp.55 - pp.80）を執筆した。		
(3) 「物理製剤学・製剤学 - 計算の解法 -」（廣川書店）		2012年1月10日	共同編集するとともに、第6章 粉体の性質（pp.29 - pp.53）, 第9章 製剤試験法（pp.79 - pp.87）を執筆した。		
(4) 「製剤学（改訂第7版）」（南江堂）		2017年4月10日	第6章 薬物の生体内動態 6-2 薬物の分布（pp.290 - pp.308）を執筆した。		

(5) 「製剤学・物理薬剤学」 (廣川書店)	2017年5月10日	共同編集するとともに、第4章「粉体」(pp.53-pp.74)、第5章「界面現象と分散系」(pp.75 - pp.97)、第6章「レオロジーと高分子」(pp.99-pp.113)を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2008年6月～2012年8月 2017年4月～ 2019年4月～	「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ in 近畿」に、タスクフォースとして参加した。 教務委員会委員 教務部長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Satoru Matsuura, Hidemasa Katsumi, Hiroe Suzukia, Natsuko Hirai, Hidetaka Hayashi, Kazuhiro Koshino, Takahiro Higuchi, Yusuke Yagi, Hiroyuki Kimura, Toshiyasu Sakane, and Akira Yamamoto	論文	<i>Proc. Natl. Acad. Sci. USA</i> , 2018, 115, 10511-10516. "L-Serine-modified polyamidoamine dendrimer as a highly potent renal targeting drug carrier"
Tomohiro Umeda, Akiko Tanaka, Ayumi Sakai, Akira Yamamoto, Toshiyasu Sakane, Takami Tomiyama	論文	<i>Alzheimer's & Dementia</i> , 2018, 4, 304-313. "Intranasal rifampicin for Alzheimer's disease prevention"
Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kaeko Araki, Mai Yoshizumi, Masakazu Enomura, Daisuke Inoue, Tomoyuki Furubayashi, Reiko Yutani, Reiko Teraoka, Akiko Tanaka, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto, Katsumi Iga, Toshiyasu Sakane	論文	<i>Eur. J. Pharm. Biopharm.</i> , 2018, 122, 1-5. "Novel strategy for improving the bioavailability of curcumin based on a new membrane transport mechanism that directly involves solid particles"
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Mari Arai, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	<i>Mol. Pharm.</i> , 2018, 15, 1105-1111. "Delivery of Oxytocin to the Brain for the Treatment of Autism Spectrum Disorder by Nasal Application"
Daisuke Inoue, Akiko Tanaka, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto, Ken-ichi Ogawara, Toshikiro Kimura, Kazutaka Higaki, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Tomoyuki Furubayashi	論文	<i>Eur. J. Pharam. Sci.</i> , 2018, 117, 21-26. "The relationship between in vivo nasal drug clearance and in vitro nasal mucociliary clearance: Application to the prediction of nasal drug absorption"

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
薬物の骨ターゲティングを目的としたデンドロン型高分子ミセル製剤の開発	2019年3月	日本薬学会第139年会
鼻腔内投与後の脳への薬物移行特性の解析: 脳の部位別動態に基づく評価	2019年5月	日本薬剤学会第34年会
鼻腔内投与されたOxytocinの脳内移行特性 (優秀演題賞受賞)	2019年7月	第35回日本DDS学会学術集会
Transnasal delivery of oxytocin to the brain for the treatment of autism spectrum disorder (Travel Grant Award 受賞)	2019年7月	第3回日韓若手薬剤学研究者ワークショップ
鼻腔内投与による Catalytide の脳内送達	2019年8月	第32回バイオメディカル分析科学シンポジウム
III 学会等および社会における主な活動		
1985年2月 ~	日本薬学会会委員 (現在に至る)	
1989年4月 ~	日本DDS学会会員 (現在に至る)	
1992年4月 ~	日本薬剤学会会員 (現在に至る)	
2016年4月 ~	日本薬学会近畿支部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬化学研究室	職名	教授	氏名	奥田 健介
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 有機化学I 有機化学III 生薬化学 有機化学IV 合成化学I 有機化学実習 基礎薬学演習 総合薬学講座 卒業研究 総合医薬品化学特論 化学系創薬学特論		2016年4月－ 2016年4月－7月 2017年4月－ 2017年9月－ 2017年4月－ 2016年4月－ 2017年1月－ 2016年9月－ 2016年4月－ 2017年4月－ 2016年4月－	<p>有機化学・合成化学の講義においては板書を中心として講義にめりはりをつけ、適宜学生の応答により理解度を確認している。有機化学Iにおいては教室後方からも見やすいように大型の分子模型も活用して立体化学の理解を促す工夫を行っている。</p> <p>生薬化学においては、生合成も有機化学反応で説明できることを強調して講義を行っている。こちらはパワーポイントファイルを提示しながら進めている。また、補助プリントを作成して活用している。</p> <p>有機化学実習においては、こまめに実習室を巡回して実技指導を行っている。また、ディスカッションを行って学生の理解を深めている。</p> <p>総合薬学講座・基礎薬学演習（強化セミナー）においては、有機化学・生薬学系の内容を分担し、ポイントを踏まえた国家試験対策・CBT対策の講義を行っている。</p> <p>卒業研究においては、学生個々の目的意識を涵養するべく、実験研究に対して責任を持って取り組めるように工夫している。また研究に関連する原著論文を選んで批判的に読解し、その内容を発表する機会を設けている。</p> <p>総合医薬品化学特論・化学系創薬学特論においては最新の創薬化学・ケミカルバイオロジー研究を踏まえた内容を盛り込んで、必ずしも本分野を専門としない学生にもこれら領域の最先端に触れられるように工夫している。</p>		
2 作成した教科書、教材、参考書 有機化学実習書		2017年4月－	2017年度より新しく生薬化学の内容を取り入れた有機化学実習書の作成を行い、2018年度、2019年度に改訂を行った。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし					
4 その他教育活動上特記すべき事項 他大学学生への教育 高等学校生徒への教育		2016年4月－6月 2016年8月、2018年8月	<p>岐阜薬科大学にて「薬学英語II」講義および「創薬合成化学」演習を行った。</p> <p>高等学校生徒に対して「くすりの開発」に関する講義を行った。</p>		

他大学学生への教育	2019年7月, 12月	中京大学にて「法学」および「日本国憲法」講義を行った(薬学関連領域に関し)。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
K. Hattori, K. Koike, K. Okuda, T. Hirayama, M. Ebihara, M. Takenaka, H. Nagasawa	論文	<i>Org. Biomol. Chem.</i> 14 (6), 2090-2111 (2016). "Solution-Phase Synthesis and Biological Evaluation of Triostin A and its Analogues"
S. Fukuda, K. Okuda, G. Kishino, S. Hoshi, I. Kawano, M. Fukuda, T. Yamashita, S. Beheregaray, M. Nagano, O. Ohneda, H. Nagasawa, T. Oshika	論文	<i>Graefes Arch. Clin. Exp. Ophthalmol.</i> 254 (12), 2373-2385 (2016). "In vivo Retinal and Choroidal Hypoxia Imaging Using a Novel Activatable Hypoxia-Selective Near-Infrared Fluorescent Probe"
M. Shimoji, H. Hara, T. Kamiya, K. Okuda, T. Adachi	論文	<i>Free Radical Res.</i> 51 (11-12), 978-985 (2017). "Hydrogen sulfide ameliorates zinc-induced cell death in neuroblastoma SH-SY5Y cells"
T. Hirayama, H. Tsuboi, M. Niwa, S. Kadota, A. Miki, K. Okuda, H. Nagasawa	論文	<i>Chem. Sci.</i> 8 (7), 4858-4866 (2017). "A universal fluorogenic switch for Fe(II) ion based on N-oxide chemistry permits the visualization of intracellular redox equilibrium shift towards labile iron in hypoxic tumor cells"
K. Oh-hashii, S. Matsumoto, T. Sakai, Y. Hirata, K. Okuda, H. Nagasawa	論文	<i>Appl. Biochem. Biotechnol.</i> 188 (4) 1009-1021 (2019). "Effects of 2-(2-chlorophenyl)ethylbiguanide on ERAD component expression in HT-29 cells under a serum- and glucose-deprived condition"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Truce-Smiles転位反応を利用したヘテロ五員環縮合[2,3-c]isoquinoline類の合成	2015年3月	日本薬学会第135年会
がんのストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究	2016年7月	第22回癌治療増感研究会

生体内硫化水素検出を目指した ¹⁹ F-MRIプローブの開発	2017年2月	第19回癌治療増感研究シンポジウム
血清およびグルコース欠乏状態での小胞体関連分解因子におけるフェンホルミン誘導体の効果に関する研究	2018年5月	第24回癌治療増感研究会
Development of Drugs for Modulating Endoplasmic Reticulum Stress Response	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
3. その他		
演題名	発表年・月	行事名
糖尿病網膜症、黄斑変性症の治療効果を可視化する網膜低酸素イメージング	2015年5月	第12回アカデミックフォーラム
糖尿病網膜症、黄斑変性症の治療効果を可視化する網膜低酸素イメージング	2015年10月	中部公立3大学新技術説明会
ガス状シグナル分子のクロストーク解明を可能とするマルチカラー蛍光イメージングプローブの開発	2018年3月	東京生化学研究会平成29年度助成研究報告会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995年12月～現在	日本薬学会会員	
2009年2月～現在	日本がん分子標的治療学会会員	
2011年10月～現在	日本分子イメージング学会会員	
2012年1月～現在	国際癌治療増感研究協会会員	
2016年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員	
2018年7月～現在	日本薬剤師会および兵庫県薬剤師会会員	
2020年4月～現在	国際癌治療増感研究協会理事	

専任教員の教育・研究業績

所属	医薬細胞生物学研究室	職名	教授	氏名	士反 伸和
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2009年～2016年	2年次生に対し「生薬化学実習」の授業を担当し、天然物の抽出や分析、生薬の確認試験や純度試験など、生薬に関する基礎的な事柄を実際に作業・習得させることを行った。実習での手技などについてパワーポイントで解説するとともに、実験作業について各学生に細やかに指導した。さらに、得られた結果から考察に至る部分については、教卓で各学生ごとに説明させ、適宜指導を行うことで考察力を高めるよう工夫を行った。		
		2010年～2015年	1年次生に対し「薬用資源学」を担当し、それぞれの植物の器官から得られる医薬品原料についてなど、薬用となる資源の講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。		
		2014年～2016年	2年次生に対し「生薬化学」を担当し、薬用植物から得られる化合物の構造、薬効、その生合成経路などの講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。		
		2015年～2016年	4年次生に対し「漢方医学」を担当し、漢方の基礎となる概念などについて、講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、概念のわかりにくい部分などについて教科書を中心として読み進めることで理解を促すなどの工夫を行った。		
		2017年～2019年	1年次生に対し「基礎生命科学」を担当し、細胞内小器官やアポトーシスなど細胞に関する基礎的な内容の理解と定着とを目指して講義を行っている。パワーポイントでイラストを使用するとともに、Youtubeなどのムービーも用いて視覚的にわかりやすくすることを心がけて取り組んでいる。また、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行っている。		

	2017年～2019年	3年次生に対し選択科目として「薬用資源学」を前半の6回、担当している。薬用成分の生合成について、反応機構や生合成に関する細胞生物学など、また遺伝子組み換え植物と医薬品生産などを、パワーポイントでイラストを使用しつつ講義をしている。
	2017年～2019年	2年次生に対し「細胞生物学実習」を担当し、細胞分裂や植物組織、動物組織の観察などの修得を目指して行っている。マウスの解剖などではムービーをiPadで見せるなどして個別指導もしつつ、顕微鏡観察では重要な点を説明しつつスケッチを促すなどの工夫を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書	2018年	教科書：基礎から学ぶ植物代謝生化学 1-328 (2018) 羊土社 水谷 正治、士反 伸和、杉山 暁史 (編集)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Shitan N, Yazaki K.	総説	Biochimica et Biophysica Acta - Biomembranes, 2019,15: 183127. doi: 10.1016/j.bbamem.2019.183127 "Dynamism of vacuoles toward survival strategy in plants"
Nakanishi-Masuno T, Shitan N, Sugiyama A, Takanashi K, Inaba S, Kaneko S, Yazaki K.	論文	Int J Phytoremediation. 2018, 20(14):1427-1437. doi: 10.1080/15226514.2018.1501333 "The Crotalaria juncea metal transporter CjNRAMP1 has a high Fe uptake activity, even in an environment with high Cd contamination."
Amano I., Kitajima S., Suzuki H., Koeduka T., Shitan N.	論文	PloS One, 2018, 13(6), e0198936. doi: 10.1371/journal.pone.0198936. "Transcriptome analysis of Petunia axillaris flowers reveals genes involved in morphological differentiation and metabolite transport"

Shitan N.	総説	Biosci. Biotechnol. Biochem. 2016, 80(7):1283-93 "Secondary metabolites in plants: transport and self-tolerance mechanisms."
Shitan N., Hayashida M., Yazaki K.	論文	Plant Signal. Behav. 2015, 10(7): e1035852 "Translocation and accumulation of nicotine via distinct spatio-temporal regulation of nicotine transporters in <i>Nicotiana tabacum</i> ."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ジャスモン酸誘導性タバコ輸送体NtNCS1の機能解析	2019年10月	第13回メタボロームシンポジウム
Transporters of secondary metabolites -Identification, characterization, and possible application to synthetic biology-	2019年3月	岩手生物工学研究センター 第240回公開セミナー
二次代謝産物の輸送体研究 ～これまでとこれから～	2018年12月	第60回日本植物生理学会年会
植物二次代謝産物の輸送機構の解明	2018年3月	岩手生物工学研究センター 第240回公開セミナー
アルカロイド生産性大腸菌および酵母への輸送体の導入と発現	2018年7月	第13回トランスポーター研究会年会
III 学会等および社会における主な活動		
1999年4月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本植物細胞生物学会会員	
2003年4月～現在に至る	日本植物生理学会会員	

士反

2007年4月～現在に至る	トランスポーター研究会会員
2011年4月～2016年7月	トランスポーター研究会世話人
2016年7月～現在に至る	トランスポーター研究会顧問
2009年4月～現在に至る	日本生薬学会会員
2014年4月～現在に至る	日本生薬学会 代議員、関西支部委員
2020年4月～現在に至る	日本生薬学会 関西支部支部長
2009年4月～現在に至る	日本薬学会会員
2017年4月～現在に至る	ファルマシア 編集委員
2019年4月～現在に至る	日本薬学会学術誌 編集委員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 教授	氏名 小山 豊
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	薬理学Ⅲ 2017年～ 薬理学Ⅳ 2018年～ 総合薬学講座2017年～	
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年 10月 2018年 3月 2018年 12月	『日本薬学会編 スタンダード薬学シリーズⅡ医療薬学Ⅰ - 薬の作用と体の変化および 薬理・病態・薬物治療』 東京化学同人 赤池昭紀、小澤孝一郎、小山 豊 望月眞弓、山元俊憲 編集 『新しい疾患薬理学』 第4章 循環器内科領域の疾患に用いる薬物 p 255-309 南江堂 岩崎克典、徳山尚吾 編集 『薬物治療総論/症候・臨床検査/個別化医療（臨床薬学テキストシリーズ）』 第1章 薄理の作用と体の変化 中山書店 乾 賢一 監修 赤池昭紀 編集
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Koyama Y	論文	Functional alterations of astrocytes in mental disorders: pharmacological significance as a drug target. Front Cell Neurosci. 2015 9:261
Koyama Y, Ukita A, Abe K, Iwamae K, Tokuyama S, Tanaka K, Kotake Y.	論文	Dexamethasone downregulates endothelin receptors and reduces endothelin-induced production of matrix metalloproteinases in cultured rat astrocytes Mol Pharmacol. 2017, 92, 57-66.
Michinaga S, Kimura A, Hatanaka S, Minami S, Asano A, Ikushima Y, Matsui S, Toriyama Y, Fujii M, Koyama Y.	論文	Delayed administration of BQ788, an ETB antagonist, after experimental traumatic brain injury promotes recovery of blood-brain barrier function and a reduction of cerebral edema in mice. J Neurotrauma. 2018 35:1481-1494.
Michinaga S, Koyama Y.	論文	Dual roles of astrocyte-derived factors in regulation of blood-brain barrier function after brain damage. Int J Mol Sci. 2019 20 :571
Koyama Y, Sumie S, Nakano Y, Nagao T, Tokumaru S, Michinaga S.	論文	Endothelin-1 stimulates expression of cyclin D1 and S-phase kinase-associated protein 2 by activating the transcription factor STAT3 in cultured rat astrocytes. J Biol Chem. 2019. 294:3920-3933.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Regulation of animal behaviors through brain reward	2015年 9月27日	The 5th International Symposium of Itch
The effects of selective endothelin ET _B receptor antagonists on cold injury-induced down-regulation of aquaporin 4 expressions in mice	2015年 7月28日	第38回日本神経科学大会
Blockade of endothelin ETB receptor ameliorates blood-brain barrier disruption through increase of angiotensin-1 after traumatic brain injury in mice	2018年 7月3日	The 18th World Congress of Basical and Clinical Pharmacology

Recovery of blood-brain barrier disruption and reduction of brain edema by BQ788, an ETB receptor antagonist, after traumatic brain injury in mice	2018年 9月16日	第12回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム
Bosentan, an endothelin receptor antagonist ameliorates vasogenic edema after traumatic brain injury in mice	2019年 9月22日	The Sixteenth International Conference on Endothelin
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年12月～2014年12月	公益社団法人 日本薬学会代議員	
2011年 ～現在	Neurochemistry International誌 Editorial Advisory Board	
2011年4月～2017年3月	厚生労働省 薬剤師国家試験委員	
2012年 ～現在	The Journal of Pharmacological Sciences誌 Advisory Board	
2012年3月～2018年2月	厚生労働省 医道審議会薬剤師分科会 薬剤師国家試験K・V部会委員	
2012年4月～2014年3月	公益社団法人 日本薬理学会企画教育委員	
2014年1月～現在	文部科学省 科学技術動向研究センター専門調査員	
2016年1月～2017年12月	公益社団法人 薬学教育協議会 薬理学関連教科担当教員会議 副委員長	
2015年10月～現在	公益社団法人 日本薬理学会代議員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学臨床教育・研究センター	職名	教授	氏名	國正 淳一
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2018年4月～現在に至る		4年次生の地域医療・プライマリケア論の講義を担当している。毎回配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。	
		2017年7月～現在に至る		5年次の卒業研究Ⅰ並びに6年次の卒業研究Ⅱを担当している。現場の病院（7施設）あるいは薬局（1施設）において臨床研究を実施している。臨床研究施設での実際の課題を研究することにより、問題発見能力及びその解決能力の醸成を図っている。加えて、社会人としてのコミュニケーション能力の養成も併せて育成できる。	
		2017年9月～現在に至る		6年次生の処方解析学、処方解析演習を担当している。処方解析学では配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。処方解析演習では演習問題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。	
2 作成した教科書、教材、参考書 薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト2018年版		2018年3月		実務実習用のテキストに関して作成・編集に加わった。 （じほう, 日本病院薬剤師会近畿ブロック・日本薬剤師会近畿ブロック 編）	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2017年7月～現在に至る		神戸薬科大学 生涯研修企画・運営委員会委員	

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
波多江 崇, 池浦 奈穂, 河原 宏之, 河内 正二, 長谷川 豊, 杉山 正敏, 沼田 千賀子, 國正 淳一, 濱口 常男	論文	腎機能に着目した入院時持参薬チェックの重要性, 医薬品相互作用研究 2015, 36, 33-37
浦野公彦, 巽 康彰, 恒川由巳, 長田孝司, 上井優一, 服部亜衣, 曾田 翠, 堺 陽子, 岩本喜久生, 國正淳一, 脇屋義文	論文	薬局早期体験学習における一般用医薬品についての愛知学院大学薬学生への認識・理解度調査, 愛知学院大学薬学会誌, 2015, 6, 7-14
中村一仁, 浦野公彦, 田中万祐子, 西口加那子, 堺 陽子, 片野貴大, 鍋倉智裕, 山村恵子, 國正淳一	論文	保険薬局における残薬の確認に伴う疑義照会が及ぼす調剤医療費削減効果の検討, 医療薬学, 2015, 40, 522-529
堺陽子, 岩尾岳洋, 國正淳一, 松永民秀	論文	薬物動態および毒性試験への応用を目指したヒトiPS細胞由来肝細胞の作製とその培養技術, 愛知学院大学薬学会誌, 2015, 8, 7-14
國正淳一, 堺陽子, 浦野公彦	論文	国内における危険ドラッグの実態と対策, 愛知学院大学薬学会誌, 2016, 9, 8-14
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
経口抗がん薬を含む術後補助化学療法における病院および保険薬局薬剤師との協働支援の有用性評価	2019年3月	日本臨床腫瘍薬学会学術大会2018
化学療法誘発性の悪心・嘔吐予防目的のオランザピン投与量に関する検討	2019年3月	日本薬学会第139年会
睡眠薬使用後にせん妄が出現した患者のICU 入室中におけるリスク因子の探索	2019年3月	第8回日本薬剤師レジデントフォーラム
経口抗がん薬を含む術後補助化学療法における薬業協働支援の有用性	2019年3月	第8回日本薬剤師レジデントフォーラム

肺由来細胞のエベロリムス反応性におけるSTAT3遺伝子多型の	2019年7月	医療薬学フォーラム2019
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年4月～現在に至る	日本医療薬学会認定指導薬剤師	
2005年4月～現在に至る	日本医療薬学会評議員	
2014年6月～現在に至る	日本中毒学会評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 英語第二研究室	職名 教授	氏名 玉巻 欣子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2014年4月～現在に至る	【1年次必修英語】「英語I・III」において、大学生として知っておくべき英文法を基礎から学ばせる授業を実施している。パワーポイントのスライド等を利用して、単調にならず分かりやすい文法授業を心がけている。
	2015年4月～現在に至る	2年次必修科目「総合文化演習」において、「闘病記から医療を考える考える」というテーマでゼミを行っている。学生はナラティブ・メディスンの枠組にそって闘病記を読み、それを土台に各自テーマを見つけて研究し、発表する。学生相互のアクティブな学びを通して思考力を高める授業を目指している。
	2012年4月～現在に至る	【1年次必修】教養教員として、1年次必修科目「早期体験学習」を担当している。病院・薬局訪問のサポート、第三施設訪問の付添、発表会のサポート、また実習先病院・薬局への挨拶など、円滑な授業運営を目指している。「救命救急インストラクター」として学生の救急救命講習の指導も行っている。
	2012年4月～現在に至る	【2年次必修英語】「英語V・VI」において、薬学生が最低限知っておくべき医学英語語彙・表現の習得、医療系英文読解・速読力の向上を目指す授業を実施している。2013年度からは、eラーニングを取り入れた授業を開始し、教員による対面授業とeラーニングを融合した授業を展開している。
	2013年4月～現在に至る	【2年次選択英語】「実用英語」において、eラーニング自己学習と対面授業によるTOEIC対策に重点を置いた授業を実施している。
	2015年4月～現在に至る	【2年次必修】「総合文化演習」において、「患者体験記・闘病記から医療を考える」というテーマでゼミを展開している。ナラティブ・メディスンの枠組みに基づいて闘病記を読み、テーマを設定し、SGD、プレゼンテーション、レポートを通して様々な角度から医療についての考察を深めさせている。

	2012年4月～現在に至る	【4年次選択英語】「実用薬学英語」において、外国人患者に対する英語での服薬指導に必要な医学・薬学英語の語彙・表現を学ぶ授業を実施している。学生同士のロールプレイ、英文での家庭医学書読解、薬剤師会話のリスニングなど、多角的な方法で医療系英語力増強に努めている。2012年度学生評価によるベストティーチャー賞受賞。
	2013年4月～現在に至る	【海外薬学研修】当該研修の事前講義と現地での指導を担当している。リスニング力、英語でのプレゼンテーション指導に重点を置いている。研修先のポストンでは、マサチューセッツ薬科健康科学大学との交流、学生を伴って市内の薬局でのフィールドワークなど、積極的な研修活動をサポートしている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備事業申請担当	2012年	「e-ラーニング教材利用による薬学生の総合的英語力向上」というプロジェクトにて文科省への申請を行い、採択された。PC51台が導入され、e-ラーニング教材ソフトであるALC NetAcademy2 「医学英語<基礎>コース」、「スーパースタンダードコース」等を導入し、英語授業で活用している。
平成24年度ベストティーチャー賞受賞	2013年6月	2012年度「実用薬学英語I」学生評価によるベストティーチャー賞受賞。
神戸大学医学部医学科での医学英語教育	1999年4月～2018年3月	神戸大学医学部医学科5年次「臨床英語」担当（非常勤講師）
日本薬学会平成27年度文部科学省委託事業「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」	2016年1月～2018年3月	「海外の薬学教育との比較調査委員会 改訂コアカリ英訳作業部会」メンバーとして改訂コアカリ英訳を行っている。文部科学省 平成28年度 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」報告書（平成29年3月）p.156
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
金子利雄、河野円、Eric M. Skier、竹内典子、 <u>玉巻欣子</u> (50音順33名中23番目) 堀内正子、中村明弘、他	著書	日本薬学会編『実用薬学英语』 Unit 14 (pp.91-95). (2015) (東京化学同人)
Tamamaki, K.	研究ノート	“The Efficacy of English E-Learning as Preparatory Training for Study Abroad” Journal of Kobe Pharmaceutical University in Humanities and Mathematics. Vol. 15. pp.59-70. 2015.
入交重雄、川越栄子、相見良成、濱西和子、長谷川仁志、岩田淳、守屋利佳、平野美津子、黒住和彦、Baoul Breugelmanns、高田淳、 <u>玉巻欣子</u> 、福沢嘉孝、森茂、五十嵐裕章、服部しのぶ、陰山幾男、James Hobbs、平孝臣、鈴木光代、一杉正仁、安藤千春、塩田充、芦田ルリ (掲載順)	著書	日本医学英語教育学会編『医学・医療系学生のための総合医学英語テキストStep 1』 6. Chest Pain (pp.60-71). (2016) (メジカルビュー社)
平井清子、金子利雄、堀内正子 (責任者)、齋藤弘明、板垣正、河野享子、金澤洋子、 <u>玉巻欣子</u> (編著者)、田沢恭子、山田恵、井原久美子、和治元義博. 日本薬学英语研究会編	著書	『薬学生のための英語1』Unit 8, Unit 14 (pp. 55-62, 102-109). Listening & Speaking. Unit 1~16. (2017) (成美堂)
黒住和彦、小島多香子、永山正雄、濱西和子、高田淳、 <u>玉巻欣子</u> 、五十嵐裕章、服部しのぶ、福沢嘉孝、森茂、入交重雄、川越栄子、相見良成、平野美津子、守屋利佳、大下晴美、亀岡淳一、鈴木光代、青木洋介、芦田ルリ、塩田充、松本珠希、一杉正仁、安藤千春、(掲載順) Clive Langham、Timothy Minton. 日本医学英語教育学会編	著書	『医学・医療系学生のための総合医学英語テキストStep 2』 3. Acute myocardial Infarction. pp.31-44. (メジカルビュー社)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
<u>玉巻欣子</u> 「外国人模擬患者を利用した薬学英语教育—4年次「実用医療英語」実践報告—」	2016年8月27-28日	第1回日本薬学教育学会 (京都) 講演要旨集 p.138 (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> 「ナラティブ・メディスンを意識した薬学部教養教育の試み—神戸薬科大学2年次『総合文化演習』玉巻ゼミでの取り組み—」	2017年9月2-3日	第2回日本薬学教育学会 (名古屋) 講演要旨集p.123. (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> 、田内義彦「米国の薬局でのフィールドワーク実践報告—アクティブラーニングを取り入れた海外薬学研修に向けた試み—」	2017年9月23-24日	日本社会薬学会第36年会 (大阪) 『社会薬学 (Jpn. j. Soc. Pharm.) 』 Vol. 36. Suppl. 2017. p. 51.
<u>玉巻欣子</u> 、田内義彦「神戸薬科大学における発信型海外薬学研修プログラムの構築と検証—米国薬学部でのプレゼンテーションと薬局フィールドワークの取り組み—」	2018年9月1-2日	第3回日本薬学教育学会 (東京) 講演要旨集p.123. ポスター発表

玉巻欣子, 田内義彦「米国薬学生から見た日本人薬学生の英語プレゼンテーション」	2019年9月16日	日本社会薬学会第38年会（松山）ポスター発表
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
玉巻欣子「医療系学部における英語教育」（招待講演）	2018年10月7日	日本大学私立大学ブランディング事業「スポーツ日大によるアンチ・ドーピング教育研究拠点確立とポストオリンピックへの展開」体育の日イベント
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2008年4月～2012年3月	大学英語教育学会研究企画委員	
2010年4月～2015年3月	大学英語教育学会社員	
2015年4月～現在	大学英語教育学会会員	
2014年7月～2018年6月	日本医学英語教育学会評議員、医学英語検定試験制度委員	
2009年7月～2014年6月 2018年7月～現在	日本医学英語教育学会理事、医学英語検定試験制度委員	
2015年6月～現在	日本社会薬学会会員	
2016年～現在	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	教授	氏名	上田 昌史
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
薬学入門、有機化学系の実習、演習および講義を担当した		2001年度～現在		3年次配当(2013年度から2年次)の有機化学系II実習では、医薬品を実際に合成する実習を実施した。また、未知検体の構造決定を化学反応や確認試験を利用して行った。医薬品の性質を深く理解させるために、スモールグループディスカッションを通して使える有機化学について教育した。	
		2009年度～2015年12月		2年次配当の有機化学演習では、復習を兼ねた小テストを毎回行い、学生の理解度の状況を把握した上で、問題解答解説を行った。	
		2010年度～2012年度		神戸大学医学部保健学科の学生に、基礎有機化学の講義を行った。高校で学んだ有機化学の内容を大学レベルの視点から解説し、有機化合物の性質に影響を及ぼす官能基について概説した。さらに、習熟度を考慮しながら、医薬品の開発過程や最新の医薬品事情について説明した。	
		2012年度～2014年度		1年次の薬学入門の講義を担当した。解熱鎮痛薬を化学系薬学の観点から講義し、有機化学が生命現象の理解に重要であることを概説した。また、スモールグループディスカッションを実施し、薬学関連科目の密なつながりについて説いた。	
		2012年度～現在		3年次配当の医薬品化学(旧有機化学VI)の講義では、医薬品構造と薬理作用の関連性について解説し、薬学における有機化学の重要性について説いた。また、高学年になっても忘れない覚える有機化学ではなく考える有機化学を徹底して説いた。	
		2014年度～2016年11月		2年次配当の有機化学IVの講義では、カルボン酸誘導体の反応について講義した。医薬品に多く含まれるカルボニル基の反応を、生体内での反応や医薬品の反応を例に挙げて、学生が興味をもつように心掛けた。	
		2017年4月～現在		2年次配当の有機化学IIIの講義では、アルケンおよびアルキンの性質や反応について講義した。有機化学の基礎であるので、反応機構を丁寧に何度も繰り返し説明し、学生全体の理解度の向上を目指した。	
		2018年8月～現在		4年次配当の夏期集中講義として、合成化学IIを担当した。これまで学修した有機化学関連分野の知識の定着と応用力の醸成のため、複雑な化合物の合成経路の立案をSGD形式で行った。また、学生同士の総合評価も組み入れた評価を行った。	
2 作成した教科書、教材、参考書		2001年（毎年改訂）		有機化学系II実習書	

	2015年	スタンダード薬学シリーズⅡ 3 日本薬学会編 化学系薬学 I. 化学物質の性質と反応、東京化学同人、SB023
	2015年	化学構造と薬理作用 医薬品を化学的に読む 廣川書店、中枢神経興奮薬、脳循環・代謝改善薬
	2017年	パートナー医薬品化学 南江堂、第3章 複素環化合物、複素環関連医薬品
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Ueda M., Doi N., Miyagawa H., Sugita S., Takeda N., Shinada T., Miyata O.	論文	Chem. Commun., 2015, 51(20), 4204-4207. "Reaction of Cyclopropenes with a Trichloromethyl Radical: Unprecedented Ring-opening Reaction of Cyclopropanes with Migration"
Doi N., Takeda N., Miyata O., Ueda M.	論文	J. Org. Chem., 2016, 81 (17), 7855-7861. "Regiodivergent Ring-Opening Reaction of Trichloromethylcyclopropane Carboxylates"
Ito Y., Ueda M., Takeda N., Miyata O.	論文	Chem. Eur. J., 2016, 22(8), 2616 - 2619. "tert-Butyl Iodide-Mediated Reductive Fischer Indolization of Conjugated Hydrazones"
Sugita S., Takeda N., Tohnai N., Miyata M., Miyata O. Ueda M.	論文	Angew. Chem. Int. Ed., 2017, 56(9), 2469-2472. "Gold-Catalyzed [3+2]/Retro-[3+2]/[3+2] Cycloaddition Cascade Reaction of N-Alkoxyazomethine Ylides"
Nishida Y., Takeda N., Matsuno K., Miyata O., Ueda M.	論文	Eur. J. Org. Chem. 2018, 3928-3935. "Acylative Coupling of Amine and Indole Using Chloroform as a Carbonyl Group"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

N-アルコキシアゾメチンイリドを経由する新規連続的環化付加反応の開発	2015年・5月	第13回次世代を担う有機化学シンポジウム
N-アルコキシプロピルアミド類の閉環反応を基盤とするイソキサゾール合成	2016年・9月	第46回複素環化学討論会
Aminocarbonylation of homoallylic amine with chloroform	2017年・7月	18th Tetrahedron Symposium Asia Edition
オキシムエーテルを有するシクロプロペン類を基質としたピロール類の新規合成法の開発	2018年・8月	第38回有機合成若手セミナー
Synthesis of pyrazoles from conjugated hydrazone through acid-promoted β -protonation/nucleophilic addition/cyclization/aromatization sequence	2019年・9月	7th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
連続的結合形成反応の開発と複素環構築への展開	2014年・3月	日本薬学会第134年会 (奨励賞受賞講演)
共役イミン類への付加反応を基盤とするドミノ型反応の開発	2014年・8月	第34回有機合成若手セミナー (依頼公演)
共役イミン類のドミノ型反応	2015年・2月	立命館大学創薬基盤化学研究 第10回若手セミナー (依頼公演)
窒素原子上にヘテロ原子をもつイミンおよびアミドの特性を活用したヘテロ環合成	2018年・1月	近畿化学協会ヘテロ原子部会第3回懇話会 (依頼公演)
連続するヘテロ原子を活用した複素環合成	2019年・2月	第11回徳島文理大学薬学部学術講演会 (依頼公演)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

上田昌史

1999年～現在に至る	日本薬学会会員
2000年～現在に至る	有機合成化学協会会員
2011年～現在に至る	近畿化学協会会員
2011年2月～現在に至る	有機合成化学協会関西支部幹事
2009年4月～2011年3月	日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員
2011年5月～2016年5月	次世代を担う有機化学シンポジウム世話人
2017年5月～現在に至る	日本薬学会広報委員
2017年8月～現在に至る	アメリカ化学会会員
2019年4月～現在に至る	日本薬学会 学術誌編集委員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 教授	氏名 大河原 賢一
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 学部学生への教育	2018年～ 2018年～ 2018年～ 2018年～ 2020年～ 2018年～	毎回の講義内容に関連する演習問題を宿題として課し、翌週の講義の冒頭で解答・解説を行うことで、復習を促すと共に、遅刻の抑止力となることを期待している。 薬物動態学1（3年次前期） 臨床薬剤学I（4年次前期） アクティブラボ（1～3年次通年） 薬剤学・製剤学実習（3年次後期） 臨床薬剤学II（6年次前期） 総合薬学講座（6年次通年）
(2) 大学院生への教育	2018年～ 2018年～	最新のトピックを取り入れると共に、自分自身の研究生活で経験した様々な事柄（主に失敗談）を披露することで、受講生のモチベーション上昇に繋がればと期待している。 薬剤学特論（大学院修士課程） 臨床薬剤学特論（大学院博士課程）
(3) 他大学での講義	2018年4月～2018年8月 2019年9月2-3日 2020年秋に実施予定	岡山大学薬学部「薬剤学」（3年生前期） 岡山大学大学院自然科学研究科「薬の体内動態とその解析手法について」集中講義 京都大学大学院薬学研究科にて特論講義予定
2 作成した教科書、教材、参考書		
『創薬科学-ゲノム創薬が拓く未来-』（裳華房、2017）	2017年	「薬物の送達システム」（pp. 242-268）を執筆
図解 腫瘍薬学（川西正祐/賀川義之/大井一弥編集、南山堂）	2020年出版予定	「マイクロRNAを用いた次世代がん診断」を分担執筆
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
	該当なし	
4 その他教育活動上特記すべき事項		

	該当なし	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Araki#, K. Ogawara#, H. Suzuki, R. Kawai, T. Watanabe, T. Ono and K. Higaki (#, equally contributed)	原著論文	J. Controlled Release, 2015, 200, 106-114. "Augmented EPR effect by photo-triggered tumor vascular treatment improved therapeutic efficacy of liposomal paclitaxel in mice bearing tumors with low permeable vasculature"
K. Ogawara, T. Shiraishi, T. Araki, T. Watanabe, T. Ono and K. Higaki	原著論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2015, 82, 154-160. "Efficient anti-tumor effect of photodynamic treatment with polymeric nanoparticles composed of polyethylene glycol and polylactic acid block copolymer encapsulating hydrophobic porphyrin derivative"
K. Ogawara, Y. Fukuoka, Y. Yoshizawa, T. Kimura, and K. Higaki	原著論文	J. Pharm. Sci., 2017, 106, 1143-1148. "Development of safe and potent O/W emulsion of paclitaxel to treat peritoneal dissemination"
K. Ogawara and K. Higaki	総説	Chem. Pharm. Bull., 2017, 65, 637-641. "Nanoparticle-Based Photodynamic Therapy: Current Status and Future Application to Improve Outcomes of Cancer Treatment"
大河原賢一、浅井知浩、兵頭健治、浅野 誠、菊池 寛	総説	Drug Delivery System, 2018, 33, 105-114. "EPR効果に影響を及ぼす因子の体系化に向けて"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
(シンポジウム、招待講演) Optimization of cancer treatment with nano-DDS formulations	2016年9月	International seminar on pharmacology and clinical pharmacy: Current trend of molecular pharmacology in the drug development and clinical use (Hotel Harris, Bandung, Indonesia)
光増感剤内封ポリマーナノ粒子を用いた光線力学療法における抗腫瘍効果決定因子の解析	2017年7月	第33回日本DDS学会 (みやこめっせ、京都)

乳癌由来細胞FM3A固形がんモデルマウスに対する血管新生阻害剤SU5416前投与によるパクリタキセル内封微粒子製剤の抗腫瘍効果への影響	2018年5月	第33回日本薬剤学会（グランシップ、静岡）
（シンポジウム、招待講演） Optimization of cancer treatment with nano-DDS formulations: Knowledge of tumor vasculatures to make things work	2018年7月	The 2nd Workshop for Korea-Japan Young Scientists on Pharmaceutics (Sookmyung Women's University, Seoul, Korea)
光増感剤内封ポリマーナノ粒子製剤を用いた光線力学療法の抗腫瘍効果に及ぼす血管新生阻害剤前投与の影響	2019年3月	日本薬学会第139年会（幕張メッセ、千葉）
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2011年4月～	日本薬剤学会 FG世話人（2015年より副リーダー，2019年よりリーダー）	
2011年4月～	日本薬剤学会 代議員	
2014年4月～	日本DDS学会 評議員	
2017年4月～	日本薬物動態学会 評議員	
2018年4月～	日本薬学会 近畿支部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	教授	氏名	波多野 学
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2020年4月～現在		1年次の「有機化学II」を指導している。有機化合物の構造・性質・反応に関する基本的事項を習得させる。解説や演習では、生体内の反応や生物活性物質との関連などに触れ、学生に興味を持たせるよう取り組んでいる。	
		2020年4月～現在		3年次の「機器分析学実習」を指導している。化学物質を分析を目的とする物質の定性・定量に関する基本的事項を修得させる。PLQの実施や積極的な議論を行い、理解を深める工夫をしている。	
2 作成した教科書、教材、参考書		2019.12～(執筆中)		有機合成化学協会編「現代有機合成のための触媒反応(編集 檜山爲次郎, 野崎京子, 中尾佳亮, 中野幸司)」	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Manabu Hatano, Takuya Mochizuki, Keisuke Nishikawa, Kazuaki Ishihara		論文		Enantioselective Aza-Friedel-Crafts Reaction of Indoles with Ketimines Catalyzed by Chiral Potassium Binaphthylidysulfonates. ACS Catal. 2018, 8(1), 349-353.	

Manabu Hatano, Yuji Tabata, Yurika Yoshida, Kohei Toh, Kenji Yamashita, Yoshihiro Ogura, Kazuaki Ishihara	論文	Metal-Free Transesterification Catalyzed by Tetramethylammonium Methyl Carbonate. Green Chem. 2018, 20(6), 1193-1198.
Manabu Hatano, Haruka Okamoto, Taro Kawakami, Kohei Toh, Hidefumi Nakatsuji, Akira Sakakura, Kazuaki Ishihara	論文	Enantioselective Aza-Friedel-Crafts Reaction of Furan with α -Ketimino Esters Induced by a Conjugated Double Hydrogen Bond Network of Chiral Bis(phosphoric Acid) Catalysts. Chem. Sci. 2018, 9(30), 6361-6367.
Manabu Hatano, Tatsuhiro Sakamoto, Tomokazu Mizuno, Yuta Goto, Kazuaki Ishihara	論文	Chiral Supramolecular U-Shaped Catalysts Induce the Multiselective Diels-Alder Reaction of Propargyl Aldehyde. J. Am. Chem. Soc. 2018, 140(47), 16253-16263.
Manabu Hatano, Kosuke Nishio, Takuya Mochizuki, Keisuke Nishikawa, Kazuaki Ishihara	論文	Highly Active Chiral Dilithium(I) Binaphthyldisulfonate Catalysts for Enantio- and Chemoselective Strecker-Type Reactions. ACS Catal. 2019, 9(9), 8178-8186.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Multiselective Diels-Alder Reaction Induced by Chiral Supramolecular Lewis Acid Catalysts	2017年・8月	International Symposium on Pure & Applied Chemistry (ISPAC) 2017 (招待講演)
Multiselective Diels-Alder Reaction Induced by Chiral Supramolecular Lewis Acid Catalysts	2017年・9月	The 8th International Meeting on Halogen Chemistry (HALCHEM VIII) (招待講演)
高活性第四級アンモニウム塩触媒を用いるエステル交換反応	2017年・12月	日本プロセス化学会2017ウィンターシンポジウム (受賞講演)
Development of Chiral Supramolecular Catalysts for Multiselective Diels-Alder Reaction	2019年・3月	Asian International Symposium - Organic and Green Chemistry, The 99th CSJ Annual Meeting (招待講演)
Chiral Macrocyclic O-Shaped Catalysts for Enantioselective Addition of Lithium Acetylides to Simple Ketones	2019年・9月	The 14th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (招待講演)
2. その他		
演題名	発表年・月	学会名

Boron Tribromide-Assisted Chiral Phosphoric Acid Catalysts for Highly Enantioselective Diels-Alder Reaction of 1,2-Dihydropyridines	2015年・7月	The 39th Naito conference: The chemistry of organocatalysts (招待講演)
Boron tribromide-assisted chiral phosphoric acid catalysts for highly enantioselective Diels-Alder reaction of 1,2-dihydropyridines	2015年・12月	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (PACIFICHEM 2015) (招待講演)
Lanthanum(III) Catalysts for Highly Efficient and Chemoselective Transesterification	2016年・6月	International Symposium on Organometallic Chemistry of Rare Earths (招待講演)
高次選択的Diels-Alder反応を制御するキラル超分子触媒の開発	2016年・11月	分子研研究会「若い世代が創る次世代型分子触媒の開発とその展望」(招待講演)
Multiselective Diels-Alder Reaction Induced by Chiral Supramolecular Lewis Acid Catalysts	2016年・12月	The 1st M&M SYNTECH Unit International Meeting 2016 (招待講演)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1998年4月～現在に至る	日本化学会会員	
2000年4月～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2000年4月～現在に至る	近畿化学協会会員	
2003年4月～現在に至る	日本プロセス化学会会員	
2007年4月～現在に至る	アメリカ化学会会員	
2017年4月～2020年3月	先端錯体工学研究会会員	
2010年4月～2012年3月	日本化学会東海支部化学教育協議会委員	
2012年4月～2016年3月	日本化学会東海支部代議員	
2015年4月～2018年3月	有機合成化学協会東海支部庶務幹事	
2016年4月～2020年3月	日本プロセス化学会東海支部幹事	
2016年4月～現在に至る	産学研究協力委員会「分子性触媒による高度分子変換技術」第194委員会・メンバー	
2017年4月～2020年3月	有機合成化学協会東海支部幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 棚橋 孝雄
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		
有機化学の講義	1984年4月～2016年3月	理解を助けるために補助プリントを作成、また視覚教材を利用している。
有機化学実習	1984年4月～2007年3月, 2013年4月～2016年3月	ディスカッションを通して、理解の深化をはかる。
薬学入門の講義	2007年4月～2013年3月	視覚教材を利用している。
有機化学演習の講義	2013年4月～現在に至る	毎回提出させた問題プリントを添削し、返却している。
総合文化演習	2016年4月～現在に至る	ディスカッションを通して、思考力、表現力の深化をはかる。
「くすりと科学」の講義	2016年4月～現在に至る	プリント、視覚教材を利用している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
卒後研修講座で講演	2007年4月～2013年3月	神戸薬科大学同窓会の各地区支部が主催する公開卒後研修講座で、6年制薬学教育に関する講演を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
教務部長	2002年4月～2006年3月	教務部長として、教育内容と教育システムの改善と新カリキュラムの編成を行った。
薬学教育者・薬剤師へのFD活動	2002年4月～2013年3月	タスクフォースやチーフタスクフォースとして。薬剤師のためのワークショップin近畿に協力。
副学長	2005年10月～2007年3月	副学長として学長を補佐し、大学の運営に協力。
学長	2007年4月～2013年3月	学長として、教育全般を統括し、他大学や各種機関との教育連携を推進。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Duy Hoang Le, Katsumi Nishimura, Takao Tanahashi	論文	Nat. Prod. Communications 2016, 11(7), 949-952. "Alkaloids from the Tuber of <i>Stephania</i> cf. <i>rotunda</i> "
Duy Hoang Le, Katsumi Nishimura, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	J. Nat. Prod. 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i> "

棚橋孝雄	総説	薬学雑誌 2017, 137(12), 1443-1482. 「薬用植物および単離培養地衣菌の二次代謝物の多様性」
Yukiko Takenaka, Takao Tanahashi	論文	Phytochemistry Lett. 2018, 26, 64-67. "Biosynthetic Origin of Alkylated Decaline-type Polyketides and Induction of a New Metabolite by Addition of Benzoate in Cultured Mycobionts of <i>Pyrenula</i> sp."
Katsumi Nishimura, Shinji Horii, Takao Tanahashi	論文	Heterocycles 2018, 97 (2), 865-876. "Asymmetric Synthesis of O-Methylneferine"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
<i>Garcinia mangostana</i> の葉部と果皮のキサントン類のDNAポリメラーゼ阻害活性	2015年3月	日本薬学会第135年会
Sesquiterpene derivatives from cultured lichen mycobionts of <i>Diorygma</i> sp.	2015年8月	63rd International Congress and Annual Meeting of the Society for Medicinal Plant and Natural Product Research
DNA polymerases inhibitory polyprenylated benzoylphloroglucinols from the fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i>	2015年8月	Inaugural Symposium of the Phytochemical Society of Asia (ISPSA) 2015 Tokushima
<i>Garcinia oblongifolia</i> の樹皮に含まれるキサントン類について	2015年9月	日本生薬学会第62回年会
共生型子囊菌 <i>Pyrenula</i> sp. に由来する Pyrenulic acid 類の生合成遺伝子の同定.	2018年9月	日本生薬学会第65回年会
III 学会等および社会における主な活動		
2001年4月～2016年3月	日本薬学会近畿支部委員	
2002年2月～2005年12月	日本地衣学会評議員	
2002年2月～2013年12月	日本地衣学会誌編集委員	
2007年6月～2013年5月	兵庫県公衆衛生協会理事	
2007年10月～2013年3月	日本私立大学協会本部理事	
2008年6月～2010年5月 2010年11月～2013年3月	日本私立薬科大学協会理事	

2012年6月～2013年3月	全国薬科大学長・薬学部長会議常任理事
2012年6月～2014年5月	一般社団法人薬学教育協議会理事
2014年1月～2018年12月	日本地衣学会会長
2016年4月～現在にいたる	日本薬学会近畿支部顧問

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 岩川 精吾
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 実習テキスト（実務実習事前教育、薬剤学・製剤学実習）の改訂 大学院特論プリントの毎年の改訂	2009年～2018年3月 2006年～2018年3月	実務実習事前教育（-13年まで）、薬剤学・製剤学実習（14年-）実習書の毎年改訂 最新の学術知見を盛り込んで講義用プリントを毎年更新
2 作成した教科書、教材、参考書 『わかりやすい生物薬剤学第5版』（廣川書店） 『高齢者ケア必携よく使われる薬ハンドブック第2版』（中央法規）	2014年3月 2014年6月	薬物の腎排泄について執筆 高齢者に汎用される医薬品の作用、副作用、注意事項を記載
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 日本薬学会第131年会シンポジウム「新しい大学教育と大学連携」で発表	2011年3月	「医薬共同による創薬・育薬を担う医療人の育成を通じた私立・国立大学間の連携」について発表
4 その他教育活動上特記すべき事項 神戸薬科大学教務部長 神戸薬科大学大学院薬学研究科主幹 神戸薬科大学副学長 兵庫県立大学看護学部で臨床薬理学を講義 兵庫県立大学看護学部で薬理学を講義	2006年4月～2010年3月 2010年4月～2013年3月 2013年4月～2018年3月 2006年～2019年 2018年4月～2019年9月	看護学専攻学生に薬物治療について安全性面を含めて講義 看護学専攻学生に薬理学を講義
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Hosokawa M., Tanaka S., Ueda K., Iwakawa S., Ogawara KI	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2019, 509(1), 249-254. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells with intrinsic resistance to decitabine."
Tatsumi A., Inoue S., Hamaguchi T., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41 (2) , 277-284. "The effect of ethanol on the hydrolysis of ester-type drugs by human serum albumin."
Ueda K., Masuda A., Fukuda M., Tanaka S., Hosokawa M., Iwakawa S.	論文	Drug Metab. Pharmacokinet. 2017, 32(6), 301-310, "Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells"
Hosokawa M., Tanaka S., Ueda K., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40 (12) , 2199-204 . "Different schedule-dependent effects of epigenetic modifiers on cytotoxicity by anticancer drugs in colorectal cancer cells."
Tanaka S., Hosokawa .M, Matsumura J., Matsubara E., Kobori A., Ueda K., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40 (8) , 1320-5 . "Effect of zebularine on invasion activity and intracellular expression level of let-7b in colorectal cancer cells."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者の調査	2019年3月	日本薬学会第139年会
イオン交換基と疎水基を併せ持つ逆相系カラムによるヌクレオチドの分析：移動相条件による比較	2019年3月	日本薬学会第139年会
ヒト大腸がんHCT116細胞におけるイマチニブのENT1阻害効果に及ぼすアルブミンの影響	2019年3月	日本薬学会第139年会
DNAメチル基転移酵素阻害剤デシタビンに対する体制を改善する物質の探索	2019年3月	日本薬学会第139年会

岩川

ヒト大腸がん細胞におけるオキサリプラチン感受性を決定する microRNAの探索	2019年3月	日本薬学会第139年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2000年4月～2017年12月	日本薬学会近畿支部委員	
2005年4月～2018年12月	日本医療薬学会委嘱指導薬剤師	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 畑 公也
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
ドイツ語	1981年～現在に至る	「読む」「書く」「聞く」「話す」の総合的なドイツ語運用能力の養成を目指す。授業中にできるだけ多くの口頭、筆記による練習を行うことによって技能の定着を図っている。
教養リテラシー	2006年～現在に至る	総合文化演習のプレトレーニングとして、日本語の読み書き能力の涵養とスモールグループによるディスカッションとプレゼンテーションの訓練を行っている。
総合文化演習	1995年～現在に至る	「現代の音楽」と「ドイツの歴史と文化」をテーマに小グループによる演習を行っている。テーマ設定や発表、レポート作成に際し、学生の自発性を尊重し、積極性を引き出すことを目指している。
講義「現代の音楽」	2006年～2019年	アンケートやインタビューによって学生の意見を聞き、その結果を授業に反映させることにより、双方向的な教育を行っている。
早期体験学習	2008年～現在に至る	新入生の薬学学習に対するモチベーションを高めるための実習を指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		小山淳子、中平典子、畑公也、児玉典子「神戸薬科大学図書館における学習支援に向けた活動について」(Libra 2015, 15, 95-107)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2012年～2016年	図書館長の業務に従事。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
畑 公也	研究ノート	Libra 2016, 16, 1-17(3月発行) 「『環境音楽』、または『環境』と『音楽』」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
1978年～現在に至る	日本独文学会会員	
1978年～2019年	阪神ドイツ文学会会員	
1978年～現在に至る	大阪大学ドイツ文学会会員	
1978年～現在に至る	オーストリア文学会会員	
2007年～現在に至る	日本ポピュラー音楽学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 四方田 千佳子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 薬学部学生への教育	2017年4月～現在	神戸薬科大学薬学部6年制の1年生の社会薬学Ⅰ及び4年生の医薬品開発Ⅰの講義を分担して行っている。ジェネリック医薬品，バイオシミラー，薬価，オーファンドラッグ，市販後対策，国際ハーモナイゼーション，レギュラトリーサイエンスの概念等について講義を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年 2017年4月～現在	薬学が語るDDSの世界，京都広川書店，共同執筆 各講義のプレゼン資料を作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2017年4月 2018年2月 2018年7月	神戸薬科大学エクステンションセンターリカレントセミナーにおいてジェネリック医薬品の品質確保に関する研修講演を行った。 大学同窓会京都支部研修会 で後発医薬品に関する情報と品質について講演 大学同窓会東海支部研修会 で後発医薬品に関する情報と品質について講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2019年8月	前職にて，分析化学会主催の分析実技講習会講師，JAICA食品分析コース講師として教育活動に参加 健康食品領域研修認定試験委員会委員長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Shibata H, Izutsu K, Yomota C, Okuda H, Goda H	論文	Drug Dev. Ind. Pharm., 41, 1276-86(2015), Investigation of factors affecting in vitro doxorubicin release from PEGylated liposomal doxorubicin for the development of in vitro release testing conditions.

四方田千佳子, 中田裕二,	論文	金属不純物の分析法に関する研究, 医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス, 47, 210-218 (2016)
Hiroaki Furukawal, Naoto Ichimarul, Shinji Watanabel, Keijiro Suzukil, Eisaku Terashital, Makoto Nishino, Hirotoomo Ochil, Dan Davis and Chikako Yomota.	論文	APPLICATION OF METAL IMPURITY TRACE ANALYSIS IN PHARMACEUTICAL MATERIALS USING UNIQUE FP METHOD FOR ASSESSMENT ELEMENTS BASED ON ICH Q3D, Adv. X-ray Anal. 60, 120-134 (2017)
四方田千佳子	総説	バイオ医薬品とバイオシミラーについて, 日本薬剤師会雑誌, 70, 265 (2018)
四方田千佳子	総説	バイオシミラーのレセプト情報からの現状～NDBオープンデータを活用した普及状態の把握～, 医薬ジャーナル, 55, 3 (2019)
四方田千佳子	総説	医薬品原薬における問題と今後の課題、ジェネリック研究、13(2)、67-78 (2019)
四方田千佳子	総説	バルサルタン、ラニチジンのニトロソアミン混入問題について、PHARMA TEC JAPAN、36、31-37(2020)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ロキソプロフェン含有一般用医薬品の溶出挙動の比較	2018年8月	日本ジェネリック医薬品バイオシミラー学会
スイッチOTC 鎮痛解熱薬の溶出性の比較検討	2018年10月	第68回 日本薬学会近畿支部総会・大会
球形吸着炭製剤の吸着特性の比較	2019年5月	日本薬剤学会第34年会
一般用ロキソプロフェンナトリウム錠の溶出挙動の比較	2019年5月	日本薬剤学会第34年会
一般用単味イブプロフェン錠の溶出挙動の比較	2019年5月	日本薬剤学会第34年会
III 学会等および社会における主な活動		
2010年4月 ～	日本ジェネリック医薬品・バイオシミラー学会理事	

四方田

2008年5月～2017年3月	日本薬剤学会評議員
1976年3月～	日本薬学会会員
1978年5月～	日本薬剤学会会員
2005年5月～	厚生労働省後発医薬品の生物学的同等性ガイドライン検討会委員
2010年1月～2018年1月	薬事・食品衛生審議会臨時委員
2015年9月～	内閣府食品安全委員会研究・調査企画事後評価部会委員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 濱口 常男
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	<p>2010年4月～現在に至る</p> <p>2010年4月～現在に至る</p> <p>2010年10月～現在に至る</p> <p>2011年4月～現在に至る</p> <p>2011年10月～現在に至る</p> <p>2012年4月～現在に至る</p> <p>2018年10月～現在に至る</p>	<p>4年次生の薬事関係法規・薬事制度の講義を担当している。毎回配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。</p> <p>4年次生の実務実習事前教育実習を担当している。実習開始時での講義では、実習テキスト及びパワーポイントを利用し、医療人として醸成すべき態度、実習の目的及びその内容を説明している。SDGを組み入れた実習では、病院・薬局の指導薬剤師をタスクとして参加させて、医療における薬剤師業務の重要性の理解を深めさせるようにしている。また、調剤実習では、調剤技能の習得の徹底を図るため、病院・薬局の指導薬剤師に参加してもらい、医療現場の臨場感と緊張性のある実習を目指している。また、各調剤台を頻繁に見回り、調剤の手技が正しく適正に行われるように点検している。調剤技能の評価については、実習生2人ずつのグループで実習を行い、互いに相手の調剤技能を評価させることにより、調剤技能の確実な習得を目指している。</p> <p>4年次生の安全管理医療の講義を担当している。プリントを配布し、適時パワーポイント及びDVDを利用している。</p> <p>6年次生の処方解析学、処方解析演習を担当している。処方解析学では配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。処方解析演習では演習問題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。</p> <p>6年次生の薬学総合講座を担当している。薬学総合講座では法規・制度の講義を担当し、教科書および薬剤師国家試験過去問題のプリントを利用している。</p> <p>6年次生の薬学総合講座（再履修生）を担当している。薬学総合講座では法規・制度の講義を担当し、教科書および薬剤師国家試験過去問題のプリントを利用している。</p> <p>4年次生の処方解析Ⅱを担当している。配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。</p>
2 作成した教科書、教材、参考書	<p>病院・薬局実務実習Ⅰ 病院・薬局に共通な薬剤師業務</p> <p>2007年4月</p>	<p>医薬品情報の収集、分析、評価、加工及び提供について解説した。 （東京化学同人、日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会・日本医療薬学会 編）</p>

計算実践トレーニング帳	2009年1月	OSCEおよび臨床実習に対応した計算能力の向上について解説書した。 化学同人, 前田初男 編)
わかりやすい薬事関係法規・制度第4版	2018年3月	薬事関係法規・制度について解説した。 (廣川書店, 木方 正, 安田一郎, 佐藤拓夫, 神村英利 編)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
一般市民講座	2010年4月24日	神戸薬科大学市民公開講座
一般市民講座	2012年3月6日	神戸市老眼大学
4 その他教育活動上特記すべき事項		
なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Akitoshi Tatsumi, Masaya Okada, Yoshihiro Inagaki, Sachiyo Inoue, Tsuneo Hamaguchi, Seigo Iwakawa	論文	Biol. Pharm. Bull., 2016, 39(8), 1364-1369. "Differences in Esterase Activity to Aspirin and p-Nitrophenyl Acetate among Human Serum Albumin Preparations"
竹下治範, 井上知美, 高瀬尚武, 波多江 崇, 室井延之, 濱口常男	論文	医薬品情報学, 2017, 18, 270-276. 「副腎皮質ステロイド軟膏剤の適正使用に向けたFinger-tip unitによる服薬指導の実態調査と製剤学的使用性の評価」
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 濱口常男	論文	医薬品情報学, 2018, 20, 98-103. 「PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響」
Akitoshi Tatsumi, Sachiyo Inoue, Tsuneo Hamaguchi, Seigo Iwakawa	論文	Biol. Pharm. Bull., 2018, 41 (2), 277-280. "The Effect of Ethanol on the Hydrolysis of Ester-Type Drugs by Human Serum Albumin"
濱口常男	著書	廣川書店, 2018, 3-5. 「わかりやすい薬事関係法規・制度第4版 (神村英利, 木方 正, 佐藤拓夫, 安田一郎 編)」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
エルロチニブによる間質性肺疾患発症メカニズムの解明	2016年3月	日本薬学会第136年会

PTP 包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会
有害事象自発報告データベースを用いた非アルコール性脂肪肝炎(NASH)の原因薬剤の探索	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼすフィルムの素材及び膜厚の影響	2018年3月	日本薬学会第138年会
高湿度下における市販錠剤の重量と硬度に及ぼす包装素材の相違について	2019年3月	日本薬学会第139年会
III 学会等および社会における主な活動		
2002年4月～2004年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2003年1月～2007年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第03-0185号	
2004年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2006年4月～2012年3月	兵庫県薬剤師会理事	
2006年4月～2010年1月	日本病院薬剤師会代議員	
2008年1月～2012年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第08-03-0185号	
2008年1月～2012年12月	日本医療薬学会認定薬剤師制度 指導薬剤師 第08-08-1013号	
2008年4月～2010年1月	日本病院薬剤師会代議員会議事運営委員	
2008年4月～2010年3月	日本病院薬剤師会近畿ブロック薬剤業務委員会委員	
2008年4月～2012年6月	日本病院薬剤師会近畿ブロック事務局庶務	
2010年3月～現在に至る	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員会委員	
2010年4月～2012年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2012年4月～現在に至る	兵庫県病院薬剤師会監事	
2012年4月～2019年3月	兵庫県薬剤師会薬学教育部委員	
2013年1月～2017年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第13-03-0185号	
2013年1月～2017年12月	日本医療薬学会認定薬剤師制度 指導薬剤師 第13-08-1014号	
2016年4月～2018年3月	兵庫県薬剤師会大学支部長	

濱口

2018年1月～2022年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第18-03-0185号
2018年1月～2022年12月	日本医療薬学会認定薬剤師制度 指導薬剤師 第18-08-1014号
2019年4月～現在に至る	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員会委員長
2019年5月～現在に至る	薬学教育協議会 WEBシステム検討委員会委員
2019年7月～現在に至る	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習中央調整機構委員会委員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学部	職名 教授	氏名 松家 次朗
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002年4月～2010年3月	大学院の前期課程において「医療倫理学特論」を担当し、生命倫理学の成立背景と考え方を論ずるとともに医療専門職の倫理についても講義を行う。（ただし開講年度は隔年である）
	2002年4月～2020年3月	神戸大学医学系大学院において「保健倫理学特論」を担当し、主に医療専門職の倫理学を講義する。（オムニバス形式）
	2006年4月～	「社会薬学」Ⅰ・Ⅱでは、生命倫理学の成立背景と基本的な事例を参考に、生命倫理学の基本的な考え方を論じ、さらに、医療専門職としての薬剤師の倫理について講義を行う。（ただし、2013年4月より「社会薬学」Ⅱのみの講義。2015年度より新カリに移行し、廃止）「現代社会論」では、民主主義社会における行動規範の基本的構造を具体的問題（2015年度からは、定常化社会における社会保障の問題）を取り上げながら講義する。「医療と人間」では、終末期をめぐる種々の倫理的・社会的問題（2015年度からは、生命倫理学の最近の主要問題：2020年3月で終了）を取り上げながら講義を行う。「総合文化演習」Ⅰ（平成25年度より「総合文化演習」に名称変更）では、現代医療の問題をテーマとし、学生の資料調査、発表、及びレポート作成の指導を行う。
	2008年4月～	「生命倫理学」と「医療倫理学」において各倫理における主要問題と課題をとりあげ、ケーススタディーも援用しながら講義を行う。「総合文化演習」Ⅱ（平成26年度より廃止）では、医療における倫理的問題をテーマとして、学生の資料調査、発表、レポート作成の指導を行う。
	2010年4月～	大学院修士課程において医薬品研究開発特論共同担当し、講義を行う。
2012年4月～	大学院薬学研究科薬学専攻博士課程において「薬学研究基盤形成」（オムニバス形式）で生命倫理について講義を行う。	

	2013年4月～	「教養リテラシー」において発表、調査、レポートの書き方(2015年度からは主に本の読み方、論点のまとめ、キーワード探索等の)指導を行う。神戸大学医学部(医学科・保健学科)との合同初期体験実習の指導を行う。(初期体験実習は、2020年3月まで)
	2016年4月～2020年3月	社会科学研究室ゼミ(卒業研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)の指導を始める。
	2016年9月～2020年3月	2年生後期科目として医療コミュニケーション演習を始める。
	2017年9月～	3年生後期科目として医療倫理学演習を始める。SGDによるケーススタディ。
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年3月	共著 『薬剤師になる人のための生命倫理と社会薬学』 (法律文化社)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005年4月～2007年4月	早期体験学習の担当委員の一人となり新入生全員を対象とした早期体験学習を指導する。
	2013年4月～	(同上)
	2015年3月17日	新カリに早期体験の一環として救命救急講習が組み込まれたため、神戸市の応急手当普及員(救急インストラクター)の認定を受ける。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格に関する講義(承前)」(神戸薬科大学研究論集Libra第15号、2015年3月)

松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格にかんする講義（承前）（神戸薬科大学研究論集Libra第16号、2016年3月）」
松家次朗	翻訳	改訳：クリスティアン・ヴォルフ「哲学一般についての予備的叙説」山本道雄著『ドイツ啓蒙の哲学者クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記—ドイツ啓蒙思想の一潮流 2—』所収。Pp. 129-255.
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格にかんする講義（承前）（神戸薬科大学研究論集Libra第17号、2017年3月）」
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

渡

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 渡 雅克
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2013年4月～現在	1年次の初期体験臨床実習 4年次の実務実習事前学習，処方解析1を分担 5年次の学外実務実習，IPW演習
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
京都薬科大学 非常勤講師	1999～2007	大学院病院薬学特論
宝塚市立看護学校 非常勤講師	2001～2008	薬理学
神戸学院大学 非常勤講師	2006～2008	病院実習導入講義
武庫川女子大学 非常勤講師	2006～2008	病院実習導入講義
神戸薬科大学 非常勤講師	2006～2008	病院実習導入講義
兵庫医療大学 教育教授	2010～2012	実務実習事前学習講義
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

渡

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1976年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1990年4月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2004年4月～2008年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2008年4月～2012年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2008年4月～2010年3月	日本病院薬剤師会 編集委員会 地域編集委員	
2008年4月～2012年3月	日本病院薬剤師会 予備代議員	
2008年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会西宮支部長	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 奥川 齊
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		4年次の実務実習事前学習 漢方医学 5年次の学外実務実習
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年6月27日 2016年10月23日 2017年1月24日 2017年2月12日 2017年7月2日 2017年7月23日 2018年1月24日 2018年7月8日 2018年10月1日 2019年1月23日 2019年6月23日 2019年7月28日	自然と漢方 健康サポートセミナー（神戸）講演 漢方 up to date 東洋医学会関西支部例会（神戸）講演 漢方の不思議であたりまえのこと シニアカレッジ（西宮）講演 高齢者と漢方 神戸薬科大学同窓会京都支部講演会（京都）講演 がん医療と漢方 神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会（徳島）講演 高齢者と漢方 京都女子薬剤師会講演会（京都）講演 漢方の不思議であたりまえのこと シニアカレッジ（西宮）講演 小児における漢方薬神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会（徳島）講演 漢方と養生 第13回健康サポートセミナー（神戸）講演 漢方と養生 シニアカレッジ（西宮）講演 夏かぜ・夏バテと漢方 神戸薬科大学同窓会山口支部講演会（山口）講演 痛みと漢方薬 神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会（徳島）講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月～現在	エクステンションセンター 健康食品講座企画委員
II 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1973年4月～現在	日本東洋医学会会員	
1973年5月～現在	日本生薬学会員	
1980年4月～現在	日本薬学会会員	
2011年3月～現在	日本臨床腫瘍学会会員	
2017年10月～現在	兵庫県立こども病院 治験審査委員会外部委員	

河本

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 教授	氏名 河本 由紀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年4月～ 2018年4月～	実務実習事前学習 学外実務実習 総合薬学講座 早期体験学習
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
兵庫県下の病院における院内感染対策としてのワクチン接種に関する実態調査	2015年1月	第36回日本病院薬剤師会近畿学術大会
兵庫県中小病診対策部活動報告	2016年1月	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会
神戸市立医療センター中央市民病院におけるトレーシングレポート運用の現状と課題	2019年1月	第40回日本病院薬剤師会近畿学術大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2000年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会代議員	
2004年4月～2016年3月	兵庫県薬剤師会病診支部長	
2004年4月～現在に至る	兵庫県病院薬剤師会副会長	
2012年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会療養病床委員会委員	
2012年4月～現在に至る	兵庫県薬事協会理事	
2014年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会近畿ブロック中小病診委員会委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 地域連携サテライトセンター	職名 教授	氏名 高尾 宜久
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年4月～現在	4年生を対象に「地域医療・プライマリケア論」を担当している。
	2018年4月～現在	4年生を対象に「在宅医療」を担当している。
	2019年4月～現在	5年生を対象に「在宅医療演習」を担当している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2007年6月～2013年7月	認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップタスクフォース
	2017年4月～現在に至る	エクステンションセンター事業統括委員会委員
	2017年4月～2018年3月	生涯教育企画委員会委員
	2017年4月～現在に至る	生涯研修事業委員会委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
高尾宜久、麻生美樹、増本憲生、南幸栄、岩川精吾	論文	日本医療マネジメント学会雑誌第17巻第3号，2016。「転倒転落危険度の新たな予測指標としての夜間12時間活動量と日中歩数との比率検討」

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
神戸薬科大学地域連携サテライトセンターにおける健康サポートセミナー	2018年3月	日本薬学会 第138年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995年6月～2012年3月	日本病院薬剤師会 生涯教育認定薬剤師	
1999年4月～現在に至る	日本薬剤師研修センター 認定薬剤師	
1999年5月～現在に至る	神戸市応急手当普及員（救急インストラクター）	
2003年12月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2004年5月～2006年5月	兵庫県病院薬剤師会評議員	
2004年12月～現在に至る	日本医療マネジメント学会会員	
2007年10月～2010年5月	兵庫県病院薬剤師会伊丹支部支部長	
2008年11月～2016年3月	日本病院薬剤師会 実務実習指導薬剤師認定	
2008年4月～2010年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2010年3月～現在に至る	日本薬剤師研修センター 認定実務実習指導薬剤師	
2010年4月～2016年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事	
2010年4月～2016年3月	兵庫県薬剤師会 医療保険部委員	
2010年4月～2017年3月	武庫川女子大学非常勤講師	
2012年3月～現在に至る	公認スポーツファーマシスト	
2014年4月～現在に至る	一般社団法人薬学教育評価機構 評価実施員	
2015年12月～現在に至る	日本アンガーマネジメントファシリテーター	
2016年2月～現在に至る	日本老年薬学会会員	

高尾

2016年2月～現在に至る	キャラバンメイト・認知症サポーター
2016年3月～現在に至る	ユマニチュード入門研修終了者
2017年4月～現在に至る	東灘区薬剤師会理事
2017年2月～現在に至る	日本アンガーマネジメントキッズトレーナー
2017年9月～現在に至る	禁煙指導認定薬剤師
2018年5月～現在に至る	神戸市薬剤師会理事
2018年5月～現在に至る	コグニサイズ指導者

福井

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学臨床教育・研究センター	職名	教授	氏名	福井 英二
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年4月～現在に至る	4年次生の実務実習事前教育			
	2017年4月～現在に至る	5年次生の学外実務実習			
	2017年12月～現在に至る	6年次生の総合薬学講座			
	2018年4月～現在に至る	1年次生の早期体験学習			
	2019年10月～現在に至る	5年次生のIPW演習			
	2020年4月～現在に至る	6年次生のがん薬物療法論			
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項	2019年4月～現在に至る	がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン 実習コーディネーター			
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
薬剤師が入院前常用薬の有害事象を検討する重要性	2016年・5月	第19回日本臨床救急医学会総会・学術集会2016
認知症・せん妄サポートチームの現状と薬剤師の取り組みについて	2016年・9月	第26回日本医療薬学会年会
Successful management of treatment-related toxicity with Daikenchuto during the anti-cancer treatment in a patient with Down syndrome	2016年・12月	第58回日本小児血液・がん学会学術集会
ニボルマブの糖尿病・内分泌系疾患検査状況に関する単施設調査(後視的コホート研究)	2016年・12月	第57回日本肺癌学会学術集会
直接作用型経口抗凝固薬(DOAC)の適正使用状況調査	2017年・3月	第81回日本循環器学会学術集会
III 学会等および社会における主な活動		
1981年5月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1998年9月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2000年2月～現在に至る	日本臨床栄養代謝学会(旧:日本静脈経腸栄養学会)会員	
2003年3月～現在に至る	日本クリニカルパス学会会員	
2004年11月～現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員	
2005年8月～現在に至る	日本癌治療学会会員	
2012年4月～2016年5月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2013年5月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2014年4月～2016年3月	日本病院薬剤師近畿ブロック薬事制度委員会委員	
2014年6月～2016年5月	兵庫県薬剤師会薬局経営部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	職名	氏名
薬学臨床教育・研究センター	教授	山本 克己
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年4月～現在	4年次の実務実習事前教育
	2017年4月～現在	5年次の学外実務実習
	2017年4月～現在	6年次の総合薬学講座
	2018年4月～現在	5年次・6年次の病院（2施設）における卒業研究を担当
	2019年4月～現在	4年次の処方解析学Ⅱ並びに6年次処方解析学を担当
2 作成した教科書、教材、参考書 薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト 2010年版～2018年版（各年改訂）（じほう） 研究倫理審査申請準備ガイド （日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進準備委員会）	2010年～2018年	「計数・計量調剤」の項を執筆
	2018年3月	研究計画書の記載方法について監修
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 臨床・基礎薬学連携シンポジウム（主催 神戸薬科大学） 「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育のあり方」	2018年10月	演題：「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育を目指して」
4 その他教育活動上特記すべき事項 大阪薬科大学 特任・招聘教授 近畿大学薬学部 実務実習評価連絡会議 委員	2009年4月～2015年3月	病院実習導入講義（注射剤混合調製）
	2010年4月～2016年3月	病院・薬局実務実習指導者による評価の妥当性の検証
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
村田久枝, 寺本有里, 秋田幸子, 北口剛吉, 大井美和, 藤尾みどり, 山本克己	論文	新しい注射剤調剤・供給システムにおける調剤済み注射剤の返却減少効果の評価, 大阪警察病院医学雑誌, 32, 26-34 (2016) 査読あり
小林政彦, 但馬重俊, 山本克己, 村田久枝, 石倉久美子, 真常美紀, 吉良俊彦, 谷本祐子, 木下里紗, 辻井佳代, 堀越博一, 守島繁昭, 前田恵治, 隠岐尚吾	論文	大阪市天王寺区における5病院と保険薬局の連携～疑義照会項目における統一の効果と課題～, 日本薬剤師会雑誌, 70(3), 27-32, (2018)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
病棟薬剤業務の取り組みと効果 ～配薬準備業務への関わり～	2015年1月	第36回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
タブレット端末を活用した薬剤業務支援システムの構築	2015年11月	第25回日本医療薬学会年会
“間違わせない仕組み”の導入による医療安全強化と業務の効率化	2017年2月	第38回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
採用薬剤の適正使用に関わる電子カルテ薬剤マスタ管理の重要性	2017年2月	第38回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
高齢者の睡眠導入剤投与における転倒・転落事故対策とクリニカルパス活用効果	2017年3月	第10回日本医療マネジメント学会 大阪支部学術集会
3. その他		
講演名	発表年・月	会の名称
チーム医療をコーディネートする薬剤師の総合力	2016年9月	第26回日本医療薬学会年会 ランチョンセミナー
CKDおよび糖尿病性腎症患者への薬物治療のポイント	2017年4月	田辺三菱製薬 薬剤師のためのWEB講演会
学校薬剤師の研究活動における今後について	2018年3月	平成29年度第2回大阪府薬剤師会学薬部会 学校薬剤師研修会
学術研究倫理審査について	2019年2月	大阪府薬剤師会 平成30年度学術研究倫理に関する研修会
無菌調製の基礎知識	2019年9月	令和元年度大阪府薬剤師会 無菌調剤室利用者研修会 I
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2008年4月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 理事 (2010年4月～2016年6月 副会長)	
2018年6月～現在	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 顧問	

2017年6月～現在	公益社団法人 臨床心臓病学教育研究会(JECCS) 理事
2017年6月～現在	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会 審査委員
2011年7月～現在	大阪府献血推進協議会 適正使用対策部会 委員
2016年9月～現在	公益社団法人 日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進委員会 委員
2017年3月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 学術研究倫理審査委員会 委員長
2009年7月～現在	薬剤師研修センター 認定実務実習指導薬剤師
2008年4月～2016年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 理事 (2010年4月～2016年6月 副会長)
2016年7月～2018年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 監事
2008年4月～2018年3月	公益社団法人 日本薬剤師会 代議員
2010年4月～2014年3月	一般社団法人 日本病院薬剤師会 代議員
2011年5月～2017年3月	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会選考協議会 委員
2015年8月～2018年5月	大阪府地域職域連携推進協議会 NCD対策検討部会 委員
1980年～現在	日本薬学会 会員
2006年～現在	日本医療薬学会 会員

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	准教授	氏名	山野 由美子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		1985年4月～現在に至る	「機器分析学実習」（以前は有機化学系Ⅲ実習と称した）を指導している。学生がより理解を深められるよう討議を活発に行い、また、関連した国家試験問題も紹介して解説している。		
		1985年4月～現在に至る	研究室に配属された学生の研究指導を行っている。実験操作法、実験ノート作成の仕方、研究の進め方、文献の読み方など、基本からの指導を行っている。また、定期的に報告書を作成させ、卒業前にはパワーポイントを用いて口頭発表を行わせている。		
		2004年4月～現在に至る	「有機化学演習」を受け持ち、有機化学の演習を行っている。電子の動きにより化学反応が説明できることを理解させるために、電子の動きを中心に冊子にまとめて教材とした。2018年度からは習熟度の高いクラスを受け持っているため、応用問題も用意して、解説を行っている。		
		2007年10月～2019年	「有機化学Ⅳ」では、最も重要で少し難解なカルボニル基の化学を解説している。教科書の重要な説明文には赤線を引かせ、また、黒板にできるだけ反応機構をカーブした矢印で書き、復習がしやすくなるように努めた。また、練習問題を解かせ、本人が理解度をチェックできるよう工夫した。2019年度は、スライドプリントを配り、スライドを用いた授業を行った。削減できた黒板に書く時間分を、反応機構を書かせる時間や問題を解く時間に当てた。		
		2017年10月～現在に至る	「合成化学Ⅰ」では、有機化学Ⅰ～Ⅳまでで教えきれていない重要と思われる所を教科書から抜き出し、プリントに要点をまとめて、講義を行っている。本年度は、生物有機化学分野を担当した。生体成分の性質や反応を化学構造式から考えら得るように、PPTで講義した。		

	2009年10月～2017年3月	4年次生に対する授業科目として、「精密有機合成化学」（2016年度まで有機化学Ⅶと称した）の講義を行っていた。医薬品合成を例として、これまでに習った有機化学がどのように応用されているか解説した。CBT受験前であることを意識し、基本的な反応を復習できるよう努めた。また、教材冊子の中には問題を掲載し、自主学習がしやすいよう工夫した。
	2009年10月～2015年3月	2年次生に対する授業科目として、「生物有機化学」の講義を行っていた。生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう、黒板にできるだけ構造式を書き、どの官能基がどのように反応するのか解説した。また、要点をまとめた冊子を作成し、教科書のページ数も記載して、自主学習しやすいよう工夫した。
2 作成した教科書、教材、参考書	2009年～2015年	「生物有機化学」の教材作成：生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう要点にまとめた。
	2009年～2018年	「精密有機合成化学」の教材作成：これまでに習った有機化学の知識で理解できる医薬品合成例と、スペクトルを冊子にまとめた。
	2009年～現在	「有機化学系Ⅲ実習書」の作成
	2020年	「合成化学1」の教材作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yamano Y., Ematsu K., Kurimoto H., Maoka T., Wada A.	論文	Marine Drugs 2015, 13, 159-172. "Total synthesis of gobiuxanthin stereoisomers and their application to determination of absolute configuration of natural products: revision of reported absolute configuration of epigobiuxanthin"

Yamano Y., Nishiyama Y, Aoki A., Maoka T., Wada A.	論文	Tetrahedron 2017, 73, 2043-2052. "Total synthesis of lycopene-5,6-diol and gamma-carotene-5',6'-diol stereoisomers and their HPLC separation"
Yamano Y., Sasaki H., Wada A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2017, 65, 940-944. "Versatile Amine-Promoted Mild Methanolysis of 3,5-Dinitrobenzoates and Its Application to the Synthesis of Colorado Potato Beetle Pheromone"
Yamano, Y., Masumoto, M., Takaichi, S., Wada, A.	論文	Tetrahedron 2018, 74, 1533-1539. "Total synthesis of myxol and deoxymyxol stereoisomers and their application to determining the absolute configurations of the natural products"
Koizumi, J., Takatani, N., Kobayashi, N., Mikami, K., Miyashita, K., Yamano, Y., Wada, A., Maoka, T., Hosokawa, M.	論文	Marine Drugs 2018, 16, 426. "Carotenoid profiling of a red seaweed <i>Pyropia yezoensis</i> : insights into biosynthetic pathways in the order Bangiales"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Myxolおよびdeoxymyxol立体異性体の全合成とキラルHPLC分析による天然物の立体配置の決定	2017年9月	第31回カロテノイド研究談話会
3,5-ジニトロベンゾイル基のアミンによる温和なメタノリシスとCBP-フェロモン合成への応用	2018年3月	日本薬学会第138年会
アミノ基を導入した非環式レチノイドの合成	2019年3月	日本薬学会第139年会
光学活性 α -カロテンの合成とHPLCによるエナンチオマー分離条件の確立	2019年9月	第33回カロテノイド研究談話会
Siphonaxanthinおよびloroxanthinの全合成	2019年9月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
III 学会等および社会における主な活動		
1983年1月～現在に至る	日本薬学会会員	

山野

1986年1月～現在に至る	日本ビタミン学会会員
1995年1月～現在に至る	日本カロテノイド研究会会員
2002年4月～現在に至る	有機合成化学協会会員
2014年10月～現在に至る	近畿化学協会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 中央分析室	職名 准教授	氏名 竹内 敦子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年8月～2019年12月	構造解析学II（分担）で質量分析法の応用編を担当した。実際のスペクトル解析も演習形式で行い、理解を深める講義を行った。
	2017年9月～2019年12月	分析化学III（新カリ）（分担）を担当した。薬学研究で生体分子を解析するために必要な分析法を習熟させることを目的として講義を行った。
	2008年4月～2019年12月	分析化学III（旧カリ）から構造解析学（分担）、薬学英語入門I、薬学英語入門IIの講義を担当した。分析化学III（旧カリ）-構造解析学では、生体分子を解析する方法としての質量分析法を習熟させることを目的として講義を行った。3年次前・後期で担当する薬学英語入門I・IIでは、医療や薬学などを中心とする自然科学の分野で必要とされる英語の基礎的な知識を修得し、同時に理系英語の初歩的な技能と運用能力を養成することを目的として講義を行った。
	2002年4月～2010年12月	実習としては、2002年から2007年度まで有機化学系実習II、2008年度から現在まで有機化学系III実習を担当した。質量分析計の前での測定を実演したり、自ら作成したポスターを使って質量分析に対する理解を深めるための努力をするとともに、国家試験を意識した解説も行った。
	1981年4月～2019年12月	毎年数名のゼミ生ならびに大学院生の指導を行った。質量分析を通して、研究の目的、実験結果の考え方を把握し、さらなる研究意欲を培わせることを心がけて指導を行った。また、プレゼンテーションについても、わかりやすく聞き手に伝えるかをポイントにおいて指導した。大学院講義では、学生が研究に活用できるような質量分析に関する最近の話題について講義した。
2 作成した教科書、教材、参考書		質量分析法の原理や基礎的内容を学習するための図式化などを取り入れたプリント教材を作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takarada T, Rochmah MA, Harahap NIF, Shinohara M, Saito T, Saito K, Lai PS, Bouike Y, Takeshima Y, Awano H, Morioka I, Iijima K, Nishio H, Takeuchi A	論文	Brain Dev. 2017 "SMA mutations in SMN Tudor and C-terminal domains destabilize the protein."
Ar Rochmah M, Harahap NIF, Niba ETE, Nakanishi K, Awano H, Morioka I, Iijima K, Saito T, Saito K, Lai PS, Takeshima Y, Takeuchi A	論文	Brain Dev. 2017 "Genetic screening of spinal muscular atrophy using a real-time modified COP-PCR technique with dried blood-spot DNA."
Sato K., Yamashita T., Ohuchi H., Takeuchi A., Gotoh H., Ono K., Mizuno M., Mizutani Y., Tomonari S., Sakai K., Imamoto Y., Wada A., Shichida Y.	論文	Nat. Commun., 2018, 9(1), 1255. doi: 10.1038/s41467-018-03603-3. "Opn5L1 is a retinal receptor that behaves as a reverse and self-regenerating photoreceptor" 査読あり
Katsuda T, Matsuzaki J, Yamaguchi T, Yamada Y, Prieto-Vila M, Hosaka K, Takeuchi A, Saito Y, Ochiya T.	論文	Elife. 2019 Aug 8;8. pii: e47313. "Generation of human hepatic progenitor cells with regenerative and metabolic capacities from primary hepatocytes."
Takaoka Y, Takeuchi A, Sugano A, Miura K, Ohta M, Suzuki T, Kobayashi D, Kimura T, Sato J, Ban N, Nishio H, Sakaeda T.	論文	PLoS One. 2019 Nov 15;14(11):e0225244. "Establishment of the experimental procedure for prediction of conjugation capacity in mutant UGT1A1."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
スプライシングを制御するタンパク質CUG-BP1の挙動	2018. 3	日本薬学会第138年会
Resveratrolの安定性評価と細胞内での代謝物解析	2018. 5	日本質量分析学会・日本プロテオーム学会2018年合同大会

Evaluation of UDP-glucuronosyltransferase 1A1 activity towards bilirubin	2018. 8	22nd International Mass Spectrometry Conference
濾紙血DNA を用いた新生児スクリーニングシステムの開発	2019. 3	日本薬学会第139年会
マウス採尿法によるプロスタグランジン代謝物の定量操作の工夫について	2019. 5	第67回質量分析総合討論会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1981年～2009年	日本ビタミン学会会員	
1981年～	日本薬学会会員	
2001年～	日本質量分析学会会員	
2004年～	日本医用マススペクトル学会会員	
2005年～2017年	American Society for Mass Spectrometry会員	
2006年7月	第33回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	
2010年7月	第37回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	
2013年7月	第40回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員長	
2013年～	BMS研究会世話人	
2014年～	日本医用マススペクトル学会評議員	
2015年7月	第42回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	
2017年7月	第44回BMS (Biological Mass Spectrometry) コンファレンス実行委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 英語第一研究室	職名 准教授	氏名 赤井 朋子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
英語	1992年～現在に至る	<p>1年生、2年生を対象に英語の総合的な運用能力の養成を目的とした授業を行う。具体的な授業内容は科目や時期によって異なり、教科書も様々なものを使用してきたが、中でも自然科学的な内容(医療や健康、環境問題等)のテキストは早くから積極的に使用してきた。また、4年制の時代(～2005年)においては、1クラスの人数が約80人と非常に多かったため、人数が多くても遜色がないようにビデオ教材など視聴覚教材の使い方を様々な工夫して授業を行った。</p> <p>2013年度から導入された選択必修制の英語の授業(2年次生「英語V」「英語VI」)においては、病院での簡単な英会話や、医療に関する英文の講読を行っている。習熟度別に授業が行われる科目(1年次生「英語I」「英語II」「英語III」「英語IV」)においては、英語を得意としない学生にもわかりやすいように、理解度をチェックしながらの双方向的な授業を心がけている。いずれの科目においても、会話や読解、問題解決等、様々な機会において、ペア・ワークやグループ・ワークを積極的に活用している。</p> <p>学生による授業評価アンケートは、回収率がかなり高いにもかかわらず、学内平均を上回っているため、おおむね好評であると言える。</p>
総合文化演習	1995年～現在に至る	<p>2年生を対象に演習形式の授業を行う。映画や演劇に関するゼミとイギリス文化に関するゼミを担当。作品に関するディスカッションや文献購読などの演習を行い、その上で、学生の研究発表とレポート作成を指導する。2002年度からスモール・グループ・ディスカッション方式も取り入れ、特定の課題についてすべての学生がディスカッションに参加できるように工夫している。また、演劇や映画を通して人間や文化に対する理解を深め、グローバル社会に欠かせない、文化の多様性に対する寛容性を養うことも視野に入れている。そして、互いの意見を尊重しながら問題解決につなげていくコミュニケーションの取り方をゼミ生が習得できるように心がけている。</p> <p>現在この科目は、学生による授業評価アンケートの対象科目からはずされているが、過去にアンケートを取っていた時には、学内平均よりかなり高い評価を得ていた。</p>

早期体験学習	2005年～現在に至る	新入生の早期体験学習が円滑に行われるように様々な形で学生のサポートを行っている。特に、2005年度（早期体験学習トライアル）、2009年度、2013年度、2017年度には新入生の担任としてクラス授業を行い、体験学習後のプレゼンテーションの指導や、報告書原稿の添削等を行っている。また、学生の学習先である病院や薬局を訪問したり、学生の引率を行ったりもしている。
2 作成した教科書、教材、参考書 授業のプリントを作成	2013年～現在に至る	英語V、VIにおいて、学生が予習しやすいように、各章毎に予習プリントを作成し配布している。薬学に特化した市販の教科書が比較的少ないため、既存の教科書を本学の学生向けにカスタマイズして使用している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項 入学予定者のための英語教育	2003年～現在に至る	推薦入試による入学予定者に、あらかじめ問題集を送付し、返送されてきた学生の解答に目を通した上で、2月にそれに関する解説の授業を行っている。
クラス担任	2005年～現在に至る	クラス担任として、種々の関係業務に従事。
習熟度別英語科目のとりまとめ役	2013年～現在に至る	習熟度別英語科目である「英語II」「英語IV」において、担当の先生方（非常勤講師）と、毎年、テキスト選定や授業の運営等についてミーティングを重ねている。本学の場合、学生間で英語の学力に大きな差が見られるので、教員同士の連携やコミュニケーションをはかることにより、多様な学生への効果的な対応に取り組んでいる。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

赤井 朋子	著書（共著）	『ロンドンの劇場文化―英国近代演劇史―』（朝日出版社、2015年）113-140.
赤井 朋子	著書（共著）	『ステージ・ショウの時代』（森話社、2015年）278-304.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「検閲と規範―ノエル・カワード作 <i>This Was a Man</i> （1926）について―」（口頭発表）	2015年6月	2015年度日本演劇学会全国大会
「1910年代の英国演劇と坪内士行」（口頭発表）	2016年6月	英米文化学会比較文学分科会
“Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Imitation and Adaptation of Musical Revue in 1920s Japan”（口頭発表）	2017年8月	Association for Asian Performance 17th Annual Conference
“Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Translation and Adaptation of Western Comedies in Late 1910s-1920s Japan”（口頭発表）	2018年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2018
“The Takarazuka Girls’ Opera and the Urban-Rural Boundary”（口頭発表）	2019年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2019
3. その他		
「ロンドンの劇場文化―英国近代演劇史―」（ワークショップ）	2015年9月	第33回英米文化学会大会

「交差するまなざしー外国（人）が見つけた日本、日本（人）が見つけた日本をめぐってー」 (ワークショップ)	2018年9月	第36回英米文化学会大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1992年4月～現在	日本英文学会、日本シェイクスピア協会会員	
2000年4月～現在	日本演劇学会会員	
2004年4月～現在	日本比較文化学会会員	
2004年6月～2008年6月	日本演劇学会幹事	
2006年8月～現在	国際演劇学会(IFTR)会員	
2010年4月～2011年8月	IFTR Osaka実行委員	
2011年8月～現在	英米文化学会会員	
2017年3月～現在	Association for Asian Performance会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学基礎教育センター	職名 准教授	氏名 竹仲 由希子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
有機化学実習の講義と実験指導	2002年1月～2017年	基礎的な実験操作をパワーポイントを用いた事前の講義で詳しく説明し、イメージし易くしている。
有機化学演習の講義	2006年4月～現在に至る	毎回小テストをおこない、学生の理解度を確認しながら進めている。
有機化学Iの講義	2008年10月～2016年	まとめおよび練習問題のプリントを配布し、学生が学習内容を整理し易くしている。毎回小テストをすることにより、分からない箇所を学生に認識させる。
生薬化学の講義	2017年4月～現在に至る	天然由来の化合物を骨格毎に生合成経路も含めてまとめたプリントを配布している。講義では、生薬学や有機化学で学んだことの復習もかねながら、色々な観点から構造式をとらえられるようにしている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
チューター学生に対する指導	2005年4月～2008年3月	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takefumi Onodera, Yukiko Takenaka, Sachiko Kozaki, Takao Tanahashi, and Yoshiyuki Mizushina	論文	<i>Int. J. Oncol.</i> 2016, 48 (3), 1145-1154. "Screening of Mammalian DNA Polymerase and Topoisomerase Inhibitors from <i>Garcinia mangostana</i> L. and Analysis of Human Cancer Cell Proliferation and Apoptosis"

Duy Hoang Le, Katsumi Nishimura, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	<i>J. Nat. Prod.</i> 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i> "
Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Nobuo Hamada, Takao Tanahashi	論文	<i>Heterocycles</i> 2017, 94 (9), 1728-1735, doi:10.3987/com-17-13704. "A cytotoxic pyranonaphthoquinone from cultured lichen mycobionts of <i>Haematomma</i> sp."
Yukiko Takenaka, Takao Tanahashi	論文	<i>Phytochemistry Letters</i> , 2018, 26 , 64-67. "Biosynthetic origin of alkylated decaline-type polyketides and induction of a new metabolite by addition of benzoate in cultured mycobionts of <i>Pyrenula</i> sp."
Duy Hoang Le, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	<i>Vietnam J. Chem.</i> , 2019, 57 (1), 112-115, doi:10.1002/vjch.201960018. "Evaluation of DNA polymerase inhibitory activities of depsidones, depsides and diaryl ethers from the Vietnamese lichen <i>Rimelia clavulifera</i> "
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Sesquiterpene derivatives from cultured lichen mycobionts of <i>Dicorygia</i> sp.	2015年8月	63rd International Congress and Annual Meeting of the Society for Medicinal Plant and Natural Product Research
<i>Garcinia oblongifolia</i> の樹皮に含まれるキサントン類について	2015年9月	日本生薬学会第62回年会
<i>Fraxinus rhynchophylla</i> の果実の成分研究	2016年3月	日本薬学会第136回年会
<i>Garcinia mangostana</i> の葉部の成分研究	2016年3月	日本薬学会第136回年会
ベトナム産地衣類より単離培養した地衣菌の代謝物の多様性	2016年7月	日本地衣学会第15回大会
III 学会等および社会における主な活動		
2010年1月～2011年12月	日本地衣学会評議員	
2014年1月～2015年12月	日本地衣学会監事、評議員	
2016年1月～2017年12月	日本地衣学会庶務幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 准教授	氏名 佐々木 直人
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年10月～2017年3月	3年次生の薬物治療学Ⅱを担当した。臨床医としての経験を生かした講義を行った。
	2018年9月～現在	3年次生の薬物治療学Ⅲを担当している。臨床医としての経験を生かした講義を行っている。
	2018年4月～現在	4年次生の処方解析Ⅰ・処方解析Ⅱを担当している。病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義している。
	2016年10月～現在	4年次生の実務実習事前教育を担当している。臨床医としての経験を生かした教育を行っている。
	2017年11月～現在	6年次生の総合薬学講座を担当している。国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義している。
	2016年10月～2020年3月	6年次生の処方解析学・処方解析演習を担当した。病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
	2016年10月～現在	学部学生および大学院生に実験操作、実験ノート作成、研究発表などの指導を行っている。また、学生自身が目的意識をもって研究を進められるように指導している。
	2017年4月～現在	大学院修士課程において病態解析治療学特論の講義を行っている。
	2018年4月～現在	大学院博士課程において疾患解析治療学特論の講義を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sasaki N, Yamashita T, Kasahara K, Fukunaga A, Yamaguchi T, Emoto T, Yodoi K, Matsumoto T, Nakajima K, Kita T, Takeda M, Mizoguchi T, Hayashi T, Sasaki Y, Hatakeyama M, Taguchi K, Washio K, Sakaguchi S, Malissen B, Nishigori C, Hirata K.	論文	Arterioscler Thromb Vasc Biol. 37:66-74, 2017. "UVB exposure prevents atherosclerosis by regulating immunoinflammatory responses."
Hayashi T, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Emoto T, Amin HZ, Yodoi K, Matsumoto T, Kasahara K, Yoshida N, Tabata T, Kitano N, Fukunaga A, Nishigori C, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	J Am Heart Assoc. 6(9):e007024, 2017. "Ultraviolet B Exposure Inhibits Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice by Expanding CD4+Foxp3+ Regulatory T Cells."
Sasaki N.	論文	Photomedicine and Photobiology. 39:7-15, 2018. "Ultraviolet B irradiation as a novel strategy to prevent atherosclerotic cardiovascular disease."
Yoshida N, Emoto T, Yamashita T, Watanabe H, Hayashi T, Tabata T, Ozawa G, Hoshi N, Hatano N, Sasaki N, Mizoguchi T, Amin HZ, Hirota Y, Ogawa W, Yamada T, Hirata K.	論文	Circulation. 138:2486-2498, 2018. "Bacteroides vulgatus and Bacteroides dorei Reduce Gut Microbial Lipopolysaccharide Production and Inhibit Atherosclerosis."
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Scientific Reports. 9(1):8065, 2019. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
共抑制分子CTLA-4はアンジオテンシンII誘導性マウス腹部大動脈瘤の形成を抑制する	2019年3月	日本薬学会第139年会
Immune Checkpoint Proteins and Regulatory T Cells as Critical Immune Modulators in Atherosclerotic Disease and Cancer.	2019年3月	第83回日本循環器学会学術集会

動脈硬化性疾患に対する新規免疫療法の開発	2019年7月	第51回日本動脈硬化学会総会
紫外線を用いた新規心血管疾患治療法の開発	2019年7月	第41回日本光医学・光生物学会
Pharmacological blockade of C-C chemokine receptor 4 exacerbates atherosclerosis in apolipoprotein E-deficient mice.	2019年11月	The 91th American Heart Association Scientific Sessions
3. その他		
演題名	発表年・月	講演会名
動脈硬化を予防しよう！ ～免疫、腸内細菌と動脈硬化症の関係～	2017年4月	神戸薬科大学 第18回公開市民講座
腸から病気を予防できる？ ～腸内細菌と生活習慣病の関係～	2017年7月	神戸薬科大学 第18回健康食品講座
おなかから動脈硬化を予防しよう！ ～腸内細菌と動脈硬化症の密接な関係～	2018年7月	神戸薬科大学 第10回健康サポートセミナー
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2000年5月～現在	日本内科学会会員（2005年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2015年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医）	
2000年5月～現在	日本循環器学会会員（2008年4月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医）	
2008年6月～現在	日本動脈硬化学会会員（2019年7月～現在：評議員）	
2008年12月～現在	日本免疫学会会員	
2012年5月～現在	American Heart Association会員	
2015年5月～現在	日本臨床免疫学会会員	
2016年11月～現在	日本薬学会会員	
2017年6月～現在	日本光医学・光生物学会	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 准教授	氏名 八巻 耕也
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002.4.1 - 2003.4.1 - 2006.3.31 2006.4.1 - 2009.3.31 2006.4.1 - 2011.3.31 2016.4.1 - 2018.4.1 - 2007.4.1 - 2007.4.1 - 2009.4.1 - 2013.4.1 - 2014.4.1 - 2018.4.1 - 2018.4.1 - 2020.3.31 2018.4.1 - 2020.3.31	薬理学実習（兼担） 情報リテラシー助手 薬理学Ⅱ（兼担） 臨床薬理学特論（兼担） アクティブラボ（兼担） 病態解析治療学特論（兼担） 薬理学Ⅰ 薬学総合講座（兼担） 基礎薬学（C B T）演習（兼担） 薬学入門（兼担） 医薬品毒性学（兼担） 高齢者医療（兼担） 在宅医療演習（兼担） 海外薬学研修（兼担） 講義においては自作のプリントやプレゼンテーションを作成し、学生の理解が深まるように努力した。また、講義中も適宜、学生に反応を確認したり、問いかけを行うことにより、学生が講義を理解しているかを把握するように努めた。 2008年度の薬理学Ⅱ、2012年度の薬理学Ⅰの講義では、授業評価を基にした「ベストティーチャー賞（学内賞）」を受賞した。

2 作成した教科書、教材、参考書		講義を行うにあたり、自作のプリントやプレゼンテーションを作成し利用した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		<p>学術論文 八巻 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果”</p> <p>学術論文 八巻 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治 薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299. “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果”</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005. 4. 1 - 2006. 4. 1 - 2007. 3. 31 2007. 4. 1 - 2020. 3. 31	<p>高校での出張講義</p> <p>チューター（成績不良な学生への学習支援）</p> <p>実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース</p> <p>高校、大学（正規の講義以外）、卒後の薬剤師のための教育にも可能なかぎり参画している。</p>
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yamaki K., Yoshino S.	論文	Monoclon Antib Immunodiagn Immunother. 2015, 34, 83-9. "Therapeutic Potential of Monoclonal IgA Antibodies in Allergic Diseases: Suppressive Effect of IgA on Immune Responses Induced By Re-exposure to Antigen in Sensitized Mice by Monoclonal IgE Antibody That Binds to a Different Epitope of the Same Antigen."

Yamaki K., Yoshino S.	論文	Monoclon Antib Immunodiagn Immunother. 2015, 34, 423-31. "Establishment of a Mouse Anti-ovalbumin IgE Monoclonal Antibody That Induces FcεRII (CD23)-dependent Activation Without FcεRI-Dependent Activation."
Yamaki K., Yoshino S.	論文	Immunopharmacol Immunotoxicol. 2016, 38,131-44. "IgA directly inhibits antigen-dependent B cell activation following distinctive distribution of the antigen in mice."
Yamaki K., Yoshino S.	論文	J. Immunol. Methods, 2016, 428, 58-68. "A new, rapid in vivo method to evaluate allergic responses through distinctive distribution of a fluorescent-labeled immune complex: Potential to investigate anti-allergic effects of compounds administered either systemically or topically to the skin."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ワクチンの副作用軽減を目的とした抗原特異的 IgA の応用：アナフィラキシーおよび免疫応答に対する抑制作用	2015 年 3 月	日本薬学会 第 135 年会
抗原の特徴的分布 (ASDIS) を指標とする簡便で迅速な新規アレルギーマウスモデルの確立	2016 年 3 月	日本薬学会 第 136 年会
IgA の抗原特異的な感作抑制作用	2017 年 3 月	日本薬学会 第 137 年会
皮膚への免疫複合体の斑点状の分布を指標とした IgG 依存性アレルギーモデル (G-ASDIS) の確立とそれを利用した抗アレルギー物質の探索	2018 年 3 月	日本薬学会 第 138 年会
Src family kinase 阻害薬 saracatinib の抗アレルギー作用	2019 年 3 月	日本薬学会 第 139 年会
III 学会等および社会における主な活動		
特になし		

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学基礎教育センター	職名	准教授	氏名	児玉 典子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2009年～現在に至る	抗生物質学・感染制御学（微生物学・生化学含）の国家試験対策としてCBT演習（2013年から基礎薬学演習と変更）や薬学総合講座の講義をスライド及び要約プリントを配布して行う。		
		2009年～現在に至る	3年生前期開講科目の抗生物質学を担当し、オフィスアワーなど開催して学習支援を行う。2014年からは後期開講科目の感染制御学に変更し、統合的科目（感染微生物・感染機構・発症・治療・予防）として位置付け、考える授業を行う。		
		2008年～現在に至る	3年生通年開講科目の薬学英語入門Ⅰ・Ⅱを担当する。2011年からは生命科学を題材としたオリジナルテキストを用いて、大学での専門科目の復習及び統合能力を向上させるために英語を介した生命科学を学ぶ授業（内容言語統合型学習：CLIL）を行う。また授業に協調学習を積極的に導入し、TBL法からジグソー法を活用した学習効果を検討中である。さらに2018年から教育支援ソフトを用いた双方向性授業を検討中である。		
		2009年～現在に至る	1年生後期開講科目の生化学Ⅰ（糖質）を担当し、他の専門教科への橋渡しの授業を行う。2015年からは1年前期開講となる。		
		2008年～現在に至る	薬学基礎教育センターにて留年生の学習及び生活指導を行う。2017年からは学力レベルの向上を目指し、復習を中心としたリトリーブアワーを発展させたピアリトリーブアワーや反転ピアリトリーブアワーを実施している。		
		2008年～現在に至る	薬学基礎教育センターにてPTESS（学生の学生による薬学学習支援活動）制度の企画・実施を行う。		
		2009年～2010年	薬学基礎教育センターにてTOEIC初級勉強会（500～600点目標）や英語でニュースを読むなどの勉強会を開催する。		
		2009年～現在に至る	薬学基礎教育センターにて学習カウンセリングを行う。		
		2013年～現在に至る	薬学教育センターにて、入学時のプレースメント（化学、生物、物理）を実施するとともに、1年後期終了後のリプレースメントテスト（生物）の作成及び実施を1年生対象に行い、学生の学力レベルを統計的に明らかにするとともに、入学区分による学生の学習能力について追跡調査を行う。		

	2013年～現在に至る	新入生の学業成績の向上及び、学力の低い学生の早期発見・早期学習支援を目指して、学習方法、学習不安、学習意欲の調査を実施している。
	2018年～現在に至る	新入生対象（希望者）のリメディアル化学勉強会を開催し、学生の勉強方法及び知識の定着を目指して、クリッカーを用いた双方向性授業を検討中である。
2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月	HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease-
	2016年3月	HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease- 改訂版
	2018年9月	感染制御学 病原微生物との共存と戦い 初版
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2015年3月	日本薬学会（第135年会）シンポジウム 講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年10月～現在 2017年8月～現在 2010年10月～現在 2010年12月～2014年12月 2012年 4月～現在 2013年9月	キャリアカウンセラー資格取得（CCE, Inc. 認定 GCDF-Japan） キャリアコンサルタント資格取得（キャリアコンサルティング協議会 認定） ゲシュタルト療法研修修了資格（日本心理療法士協会） TA心理カウンセラー2級資格取得（日本心理療法協会） 認定心理士資格取得（日本心理学会） 睡眠健康指導士上級（日本睡眠教育機構認定）
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
児玉典子, 小山淳子	総説	YAKUGAKUZASSHI, 2016, 136 (3), 381-388. “初年次教育における統合教科の学習を促進するファクターとしてのジグソー法の試み”
児玉典子, 小山淳子	研究ノート	Libra, 2017, 17, 1-14. “初年次教育における反転授業とジグソー法を組み合わせたアクティブ・ラーニングの試み”
児玉典子, 小山淳子	研究ノート	Libra, 2018, 18, 45-57. “チーム基盤型学習におけるピア評価の重要性の認識及び関連因子の探索”

児玉

児玉 典子, 細川 美香, 藤波 綾, 小山 淳子, 竹内 敦子	論文	薬学教育, 2018, 2, 167-174. "薬学英語学習の過程で生じる正感情と影響要因の検討—動機づけ予測に関連した感情の観点からの考察—"
児玉典子, 小山淳子, 安岡由美	研究ノート	Libra, 2019, 19, 1-9. "Audience response system (ARS) の学習意欲に及ぼす影響因子について—学習意欲を向上させる双方向性授業を目指して—"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
神戸薬科大学薬学基礎教育センターにおける適切な自律性支援の検討—学習意欲研究における学習の動機づけと自己決定感との関連—	2017年9月	日本薬学教育学会 (第2回) ポスター発表
ジグソー法を用いた薬学英語学習に関する学力層別学習意識調査結果について	2018年3月	日本薬学会 (第138年会) ポスター発表
クリッカーを活用した研修会参加前後における気分と意欲の変化及び関連性	2018年9月	日本薬学教育学会 (第3回) ポスター発表
薬学英語学習者の達成関連感情と学習方略及び自己効力感との関連について	2019年3月	日本薬学会 (第139年会) ポスター発表
クリッカーを用いた双方向性授業の実践例と学生の意識調査	2019年8月	日本薬学教育学会 (第4回) ポスター発表
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 准教授	氏名 灘中 里美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 本学薬学部学生への教育	2008年4月-現在に至る	<p>学部学生に分子生物学の講義を行っている。</p> <p>1) 担当している分野の進歩は著しいので、講義担当のコアカリの SB0s を満たすように努めながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）についてプリントを作成し、適宜配付している。</p> <p>2) ベーシックな分子生物学的知識を習得する課目であるが、できるだけ医療に関連するよう解説し、高学年で習う臨床系の科目の理解につながる基盤をつくってもらえるように努めている。</p> <p>3) 1回の講義では、なるべくテーマを絞り、1つのテーマに関して単回で終了するように心掛けている</p> <p>4) 講義した内容が薬剤師国家試験にどのように出題されているかを知ってもらうために、過去に出題された国家試験の問題を10～20問選んでプリントで配布して解説を行い、これらの問題に関連したものを定期試験に出題している。</p> <p>5) 講義内容を深く理解してもらうために、文章問題を演習として取り入れている。また、昨今の国家試験に対応できる能力を養うため、定期試験ではマーク式問題だけでなく思考力を問う文章問題を出题している。</p>
	2007年4月-現在に至る	<p>学部学生に生物学系の実習指導を行っている。</p> <p>1) 実習前の導入講義では、講義で習った基礎知識を復習するとともに、実習内容が医学・薬学の領域で実際に活用されていることが想像できるように努めている。また、コンパクトにまとめて30分以内で説明が終了するように心掛けている。</p>

		2) 実習時間後に学生個々と教員が実習内容について質疑応答を行い、その日に行った実習を理解できるようにしている。
	2007年4月-現在に至る	学部学生に卒業研究の指導を行っている。 1) 受け身の講義と違い、参加型の実習であるので、学生自身が問題解決していけるようなトレーニングを行えるよう心掛けている。具体的には、学生のレベルに合った課題を与え、実験目的や方法を説明した後は、各自で日常の実験計画を立ててもらい、学生自身の力で課題を解決していくようなスタイルをとっている。学生だけでは目標達成が難しい場合はサポートするが、目標をクリアできない場合においても、答えのない課題に対してアプローチしていくプロセスを経験してもらうように心掛けている。 2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表するためのサポートを行っている。 3) 卒業研究I, II で行った研究活動の成果をまとめる卒業論文の作成、および研究成果を発表する際のプレゼンテーションの指導を行っている。
(2) 本学大学院生への教育	2007年4月-現在に至る	大学院特論（生化学特論）の講義を担当している。研究活動を通して知り得た最新の知識を講義で紹介できるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年4月-現在に至る 2008年4月-現在に至る	生物学系II実習（生化学実習）テキスト 分子生物学II 補助プリント
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Nadanaka, S., Kinouchi, H., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. (2018) 293, 444-465 doi:10.1074/jbc.M117.814509 Chondroitin sulfates-mediated N-cadherin/ β -catenin signaling associated with basal-like breast cancer cell invasion.
Nadanaka, S. and Kitagawa, H.	論文	Biochim. Biophys. Acta (2018) 1862, 791-799. doi:10.1016/j.bbagen.2018.01.002 Exostosin-like 2 regulates FGF2 signaling by controlling the endocytosis of FGF2.
Miyata, S., Nadanaka, S., Igarashi, M., and Kitagawa, H.	論文	Front. Integr. Neurosci. (2018) 12, 3. doi: 10.3389/fnint.2018.00003 Structural variation of chondroitin sulfate chains contributes to molecular heterogeneity of perineuronal nets.
Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, Y.-C., Tsai, C.-F., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, S.-C., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. (2019) 15, 699-709. doi.org/10.1038/s41589-019-0274-x Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR σ -cortactin axis.
Nadanaka, S., and Kitagawa, H.	総説	Glycoforum (2019) 22 (3), A8. doi:10.32285/glycoforum.22A8 Insight into the key roles of chondroitin sulfate proteoglycans in cancer biology
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
神経細胞の分化を調節するコンドロイチン硫酸の動的な生合成制御機構	2016. 09. 25-27	第89回日本生化学会大会 (仙台)
硫酸化糖鎖の合成制御異常が脳の発生に与える影響 Dysregulated Glycosaminoglycan Biosynthesis Affects Proliferation of Interneurons During Neural Development	2017. 12. 06-09	ConBio2017 生命科学系学会合同年次大会 第40回日本分子生物学会年会、第90回日本生化学会大会
がん細胞の増殖や浸潤シグナルを制御するグリコサミノグリカン Insights into the key roles of glycosaminoglycan signaling in cancer biology	2019. 09. 18-20	第92回日本生化学会大会

Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/beta-catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion	2019.09.29- 10.03	11th International Conference on Proteoglycans
神経可塑性に関わるセマフォリン3Aが認識する糖鎖構造の解析	2019.08.19 - 21	第38回日本糖質学会年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
入会している学会	日本分子生物学会	
	日本生化学会	
	細胞生物学会	
	糖質学会	

専任教員の教育・研究業績

所属 放射線管理室	職名 准教授	氏名 安岡 由美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2013年～現在に至る 2009年～現在に至る 2010年, 2014年, 2018年 1990年～現在に至る 1991年～現在に至る 1991年～現在に至る 2010年～現在に至る	放射化学：放射線に関する基礎知識 放射線管理学：放射線に関する総合的理解 早期体験学習：問題意識を持ち早期体験学習への積極性の育成 物理化学系実習(放射線実習)：放射性物質の安全取扱い ゼミ生の教育：環境放射能・公衆衛生 放射線業務従事者教育訓練：法令を順守と放射性物質の取り扱い法 実務実習事前教育:放射性医薬品の取り扱いについて
2 作成した教科書、教材、参考書	2007年～現在に至る	物理化学系実習(放射線実習) テキスト
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tanaka, A., Minami, N., Yasuoka, Y., Iimoto, T., Omori, Y., Nagahama, H., Muto, J., Mukai, T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2017,177, 324-330. "Accurate measurement of indoor radon concentration using a low-effective volume radon monitor."
Goto, M., Yasuoka, Y., Nagahama, H., Muto, J., Omori, Y., Ihara, H., Mukai, T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2017,174, 412-418. "Anomalous changes in atmospheric radon concentration before and after the 2011 northern Wakayama Earthquake (Mj 5.5)."
Goto, M., Yasuoka, Y., Nagahama, H., Muto, J., Omori, Y., Ihara, H., Mukai, T.	論文	Scientific reports 2018, 8,13028. "Non-parametric detection of atmospheric radon concentration anomalies related to earthquakes."
Wakabayashi, A., Yasuoka, Y., Janik, M., Nagahama, H., Fukuhori, N., Mori, Y., Arai, Y., Fujii, S., Mukai, T.	論文	Radioisotopes 2019 68 317-329. "Derivation and validity evaluation of calibration factors for activated-charcoal radon collectors."
Higuchi S., Kamishiro Y., Ishihara M., Yasuoka Y., Mori Y., Hosoda M., Iwaoka K., Tokonami S., Takahashi R., Janik M., Muto J., Nagahama H., Mukai T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2019,184, 426-429. "Evaluation of a radon air monitor in the measurement of radon concentration in water in comparison with a liquid scintillation counter."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
活性炭型ラドン検出器による屋内ラドン濃度測定の見直し	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部大会
Evaluation of a radon air monitor as a measurement of radon concentration in water in comparison with a liquid scintillation counter	2018年9月	9th International Conference on High Level Environmental Radiation Areas- For Understanding Chronic Low-Dose-Rate Radiation Exposure Health Effects and Social Impacts (ICHLERA 2018)

Validation of radon-film-badge for measurement of radon in water	2018年9月	9th International Conference on High Level Environmental Radiation Areas- For Understanding Chronic Low-Dose-Rate Radiation Exposure Health Effects and Social Impacts (ICHLERA 2018)
2018年大阪府北部地震前後の大気中ラドン濃度変動の検討	2019年7月	第56回アイソトープ・放射線研究発表会
監視モニタによる空気中ラドン濃度測定の見直し —温度依存性の評価—	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1990年～現在に至る	日本薬学会会員	
1990年～現在に至る	日本アイソトープ協会	
1990年～現在に至る	日本保健物理学会会員	
2001年～現在に至る	日本放射線安全管理学会会員	
2002年11月～現在に至る	放射線医学総合研究所 客員協力研究員	
2006年～現在に至る	日本地球化学学会会員	
2009年～現在に至る	日本温泉科学会	
2011年9月～現在に至る	日本地震学会	
2011年4月～2012年3月	日本放射線安全管理学会 メンタルケア委員会 委員	
2011年9月～2013年3月	日本保健物理学会 専門研究会「暮らしの放射線Q&A対応委員会委員」	
2011年9月11日	神戸市消防局 感謝状	
2011年11月1日	平成23年度主任者部会年次大会ポスター賞	
2014年7月～現在に至る	岡山県 環境放射線等測定技術委員会委員	
2016年10月～現在に至る	ISO/TC147(水質) /SC3 (放射線測定) 国内審議委員会委員	
2017年10月12日	日本アイソトープ協会 平成29年度放射線安全取扱部会表彰 放射線安全取扱部会功労表彰	

専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	准教授	氏名	田中 将史
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2018年～現在 2020年～現在 2016年～現在 2017年～現在 2008年～2019年 2014年～2016年 2019年 2014年・16年	基礎化学実習（1年次後期） 基礎化学（1年次前期、兼担） 物理化学Ⅲ（2年次後期、兼担） 生物物理化学（3年次前期） 薬学英語入門Ⅰ（3年次前期） 物理化学Ⅳ（3年次前期） 物理系創薬学特論（大学院博士） 物理系基礎創薬学特論（大学院修士）		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

Tanaka M. *, Hosotani A., Tachibana Y., Nakano M., Iwasaki K., Kawakami T., Mukai T.	論文	Langmuir 2015, 31 (46): 12719-12726. "Preparation and Characterization of Reconstituted Lipid-Synthetic Polymer Discoidal Particles"
Takase H., Tanaka M. *, Yamamoto A., Watanabe S., Takahashi S., Nadanaka S., Kitagawa H., Yamada T., Mukai T.	論文	Amyloid 2016, 23 (2): 67-75. "Structural Requirements of Glycosaminoglycans for Facilitating Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A"
Tanaka M. *, Nishimura A., Takeshita H., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2017, 202: 6-12. "Effect of Lipid Environment on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A"
Tanaka M. *, Kawakami T., Okino N., Sasaki K., Nakanishi K., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Arch. Biochem. Biophys. 2018, 639: 9-15. "Acceleration of Amyloid Fibril Formation by Carboxyl-Terminal Truncation of Human Serum Amyloid A"
Takase H., Tanaka M. *, Nakamura Y., Morita S., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2019, 221: 8-14. "Effects of Lipid Composition on the Structural Properties of Human Serum Amyloid A in Reconstituted High-Density Lipoprotein Particles"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
合成高分子を用いたディスク型脂質ナノ粒子の作製と物性評価	2016年3月	日本薬学会第136年会
AAアミロイドーシス発症に及ぼすグリコサミノグリカン硫酸基の影響	2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会
合成高分子を用いたHDL模倣ナノ粒子の作製と生体イメージング応用の検討	2016年7月	第26回バイオ・高分子シンポジウム

Effect of Carboxyl-Terminal Truncation on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A	2018年3月	16th International Symposium on Amyloidosis
AAアミロイドーシス発症の分子基盤の解明	2019年4月	AASAA (AAアミロイドーシスと血清アミロイドA) 研究会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
	日本薬学会正会員	
	日本生化学会正会員	
	日本膜学会正会員	
	日本ペプチド学会正会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	微生物化学研究室	職名	准教授	氏名	中山 喜明
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)		2014年より2016年	「生物学系Ⅱ実習」(3年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。		
		2015年より現在	「アクティブラボ」(1-3年次通年)を分担した。低学年次の研究室未配属学生に対して微生物化学研究室で行なっている研究について、体験学習を行った。		
		2015年より現在	「薬学入門」(1年次前期)を分担した。生物系薬学に関する基礎的講義を実施した。SGDやピア評価により能動的学習の導入を実践した。		
		2016年より現在	「微生物化学実習」(2年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。		
		2017年より現在	「免疫学」(2年次後期)を分担した。		
(2) 本学薬学部学生への研究指導		2014年より現在	研究室に配属された学部学生に対して、研究指導を実施した。		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育		2013年, 2017年, 2019年	「生命科学特論」を分担。大学院生に対して、講義を実施した。		
(4) 他大学での講義		2015年	京都大学大学院薬学研究科「基盤生物化学概論・生命科学概論講義」を分担した。		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			学術論文 八巻 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果”		

		<p>学術論文 八巻 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治 薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299. “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニツッペーパー導入が 生み出す学習意欲と学習効果”</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	<p>2016年より現在 2018年6月14日</p>	<p>実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース 兵庫県立小野高校への出張授業「薬学とは」</p>
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masuda Y., Ohta Y, Morita Y, Nakayama Y, Miyake A, Itoh N, Konishi M.	論文	<p>“Expression of Fgf23 in activated dendritic cells and macrophages in response to immunological stimuli in mice.” Biological and Pharmaceutical Bulletin. 38(5), 687-693. (2015)</p>
Masuda Y., Nawa D., Nakayama Y., Konishi M., Nanba H.	論文	<p>“Soluble β-glucan from Grifola frondosa induces tumor regression in synergy with TLR9 agonist via dendritic cell-mediated immunity.” Journal of Leukocyte Biology. 98(6), 1015-1025. (2015)</p>
Nakayama, Y., Masuda, Y., Ohta, H., Tanaka, T., Washida, M., Nabeshima, Y., Miyake, A., Itho, N., Konishi, M.	論文	<p>“Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus.” Scientific Reports. 7(1)310. (2017)</p>
Masuda, Y., Nakayama, Y., Tanaka, A., Naito, K., Konishi, M.	論文	<p>“Antitumor activity of orally administered maitake α-glucan by stimulating antitumor immune response in murine tumor.” PLoS One. 12(3)e0173621. (2017)</p>

Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M	論文	“Maturation of dendritic cells by maitake α -glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination.” International Immunopharmacology. 67;408-406 (2019)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Galnt17/Wbscr17 knockout mice shows decreased growth and hyperprolactinemia	2015年9月	Glyco2015
胸腺におけるFgf21の役割	2015年12月	BMB2015
不飽和脂肪酸負荷により誘導されるFgf21の脂質代謝機構の解析	2016年5月	生化学会近畿支部会
FGF21は胸腺細胞の成熟化を促進する	2016年5月	生化学会近畿支部会
分泌型ヘムタンパク質Neudesin遺伝子欠損マウスは赤血球代謝亢進と貯蔵鉄減少を示す	2018年11月	分子生物学会年会
III 学会等および社会における主な活動		
2004年8月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2012年8月～現在に至る	日本糖質学会会員	
2017年11月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床心理学研究室	職名	准教授	氏名	中島 園美
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る	<p>「社会心理学」対人関係における様々な理論や実験を概説し、自己と他者の考えや行動への理解が深まることを目的とした。質問紙などの心理学的手法を用いて自己分析を行ったり、理論に関連する学生自身の考えやエピソード、自分の課題などを小レポートとして書いて提出することを求め、学生の主体的・能動的な学習態度を引き出すという参加型授業も導入した。小レポートについては、次回の授業にて学生にフィードバックを行い、小レポートへの積極的な関与を高めたり、お互いの考えがシェアできるようにした。</p>			
	2012年4月～現在に至る	<p>「総合文化演習」大学生の発達支援教育プログラムとして、将来のビジョンを獲得することを目的としたソリューション・フォーカスト・アプローチを導入した表現療法を実施している。さらに、疾患に関連する映画を用いたグループ発表を行い、患者や患者の家族への理解や生と死、医療のあり方について考えを深めた。また毎回SGDと小レポートを導入し、自己表現力や言語化能力向上を目指している。プレゼンテーション力を高めるために、まず最初に、グループでの発表、次に個人での発表と段階的にプレゼンテーション体験を積めるようにしている。その際、学生が到達目標を明確に理解できるように、ルーブリックを作成し、学生自身で達成度を評価できるようにした。それによって、自分の課題を発見することを目指した。</p>			
	2015年4月～2017年8月	<p>「臨床心理学」医療人として、患者と患者の家族への共感を基盤としたコミュニケーション能力を養うために、各疾患毎に心理的特徴を中心に概説し、望ましい関わり方を提示した。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。さらに講義内容が医療現場で実践できるように、ケースを設定して、ロールプレイ、SGDを導入し、最後に自身のロールプレイを振り返り、考察や今後の自身の課題を小レポートにまとめることを求めた。次回の授業にて数名分の小レポートを読み上げてコメントをし、小レポートへの積極的な関与を高めたり、より多くの適切な対応例を知ることができるようにした。</p>			
	2015年9月～現在に至る	<p>「人の行動と心理」全人的医療を遂行できる医療人を養成するために、患者と家族の心理社会的側面を理解したり、医療現場でのコミュニケーション力の基盤を形成することを目指し、1年次に「人の行動と心理」、2年次の前期で「医療コミュニケーション」、後期で「医療コミュニケーション演習」と体系的・段階的なカリキュラムとなっている。まず、1年次での「人の行動と心理」では、人の行動と心理のメカニズムやプロセスを学び、患者や家族の心理的な問題をアセスメントし、適切に援助するための基盤を形成する内容となっている。授業の後半は、コミュニケーション・トレーニングである「アサーション」ワークを導入している。内容は、学生の身近な問題をケースとして取り上げ、自分の考えや気持ちを、相手の立場や気持ちも考慮しながら、適切な言葉で伝え、相互尊重の関係を築くことのできるコミュニケーション・スキルの獲得を目的とした構成にしている。そして、次回の授業において、学生のレポートの中のいくつかを取り上げフィードバックを行い、同級生の適切な表現をモデリングできるよう意図している。</p>			

<p>2016年4月～現在に至る</p>		<p>「医療コミュニケーション」1年次の「人の行動と心理」で学んだことを基盤として、2年次の本授業では、医療人として、患者と患者の家族への共感的なコミュニケーションを実践できるように、各疾患毎の患者の心理的特徴を中心に説明し、望ましい関わり方を提示した。また、患者の家族のストレスも説明し、家族にも配慮やサポートが必要なことを伝えた。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。 授業の後半では、コミュニケーショントレーニング「アサーション」の「傾聴」ワークを導入し、ロールプレイ、SGDを用いている。最後に自身のロールプレイを振り返り、考察や今後の自身の課題を小レポートにまとめることを求めた。次回の授業にて数名分の小レポートを読み上げてコメントをし、小レポートへの積極的な関与を高めたり、より多くの適切な対応例を知ることができるようにした。さらに、今後増加が著しい認知症高齢者の支援が円滑に実施できるよう、「神戸市認知症サポーター養成講座」を講師を招いて実施した。</p>
<p>2016年10月～現在に至る</p>		<p>「医療コミュニケーション演習」「医療コミュニケーション」で学んだことを基盤とした患者や家族への支援や医療チームのメンバーへの対応する実践力を獲得するために、臨床事例を設定し、小グループで、ロールプレイ、SDGを行った。小グループでの活動を通して、チームでの問題発見・解決能力を養うことも意図している。</p>
<p>2016年11月～現在に至る</p>		<p>「医療倫理学演習」医療現場における倫理的問題を有する事例を提示し、SGDをしてワークシートに記入という構成になっている。導入において、学生がテーマに興味をもち、活発なディスカッションが行えるよう、関係する内容の新聞記事や映画などを紹介してから、事例を提示するという工夫を行なっている。</p>
<p>2018年9月～現在に至る</p>		<p>「高齢者医療」において、『高齢者の心理と接し方』担当。現代の超高齢社会、医療者として高齢者と円滑にコミュニケーションを取るための基盤となる高齢者の心理的側面を概説した。今後の薬剤師の在宅医療への積極的な参画が求められることから、在宅医療の事例を提示し、患者の立場では、どのように感じるか、どんな医療を求めているかなどワークシートをもとにSGDを行なってもらった。患者の体験を知り、患者の立場で考えられ医療人の態度育成を意図している。</p>
<p>2019年4月～現在に至る</p>		<p>「在宅医療演習」において『認知症カフェ』での体験学習を担当。認知症の人と家族介護者との交流体験を通して、在宅医療を担う医療者の態度育成を目指した。学生は、認知症の人への回想的アプローチであるメモリーブックを作成する作業をすることで傾聴態度を体験する。その体験を自分の中で意味づけができるよう、体験終了後、活動して影響を受けたことや自分の課題など小レポートとしてまとめる作業を行なう。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>		
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>	<p>2013年9月</p>	<p>「教育プログラムとしてのコラージュ療法－誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した試み－」日本心理臨床学会第32回秋季大会 大会シンポジウム発表 口頭発表 抄録集111, 2013</p>
	<p>2013年10月</p>	<p>「コラージュ療法に認知物語アプローチを導入した教育プログラム開発研究－コラージュ作品を用いてのグループ・ディスカッションの効果－」日本コラージュ療法学会第5回大会 一般演題 口頭発表 抄録集24-25, 2013</p>

4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年10月	第70回リカレントセミナー 講演「薬剤師のためのコーチング - コーチングスキルを用いて患者さんとのコミュニケーション力をアップしよう」 -
	2016年6月	2016年度喫煙者の「禁煙教育」講演「認知行動アプローチで禁煙ワーク」 場所：神戸薬科大学
	2016年6月	第1回健康サポートセミナー 講演「幸福へのヒントを得る心理学」 場所：東灘区民センター（うはらホール）8階 会議
	2016年9月	平成28年度 兵庫地区大学月曜懇談会 9月例会 講演「軽度発達障害の特徴と学生支援」 場所：神戸薬科大学
	2018年3月	がん哲学学校 in 神戸 第17回メディカル・カフェ 講演「ストレス・マネジメント」 場所：地域連携サテライトセンター
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表（2015～2019年度に行った学会発表）		
演題名	発表年・月	学会名
成人アトピー性皮膚炎患者の精神的ストレス反応の予防因子とリスク因子のコーピング探索	2016年9月	日本心理臨床学会第35回秋季大会
アトピー性皮膚炎症状にまつわるネガティブ体験がコーピング体験に及ぼす影響-搔破行動と「自責」コーピングに焦点を置いて	2017年9月	日本心理臨床学会第36回秋季大会
薬学生の高齢者とのコミュニケーション力に影響を及ぼす要因の探索-今後の教育プログラム作成への活用と展望（4）-	2017年8月	第2回日本薬学教育学会大会
ソリューション・フォーカスト・アプローチカラージュ療法の応用-	2018年8月	日本心理臨床学会第37回秋季大会
薬学生による「認知症カフェ」の取り組み-メモリーブック作成による認知症患者と家族介護者との交流プログラム-	2018年9月	第3回日本薬学教育学会大会
III 学会等および社会における主な活動		
2006年4月～現在に至る	日本心理臨床学会員	
2009年4月～現在に至る	カウンセリング学会員	
2009年4月～2017年11月	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪はびきの医療センター（旧大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター） 教育入院プログラム「ストレス・マネジメント」心理教育担当、アトピー性皮膚炎患者および家族へのカウンセリング担当	

2013年4月～現在に至る	日本コラーゲ療法学会員
2014年10月15日	帝塚山学園（帝塚山大学） 講演 教育セミナー「ストレスマネジメント-対人関係を円滑にするコミュニケーション-」
2014年12月	「重症アトピー性皮膚炎患者への長期的支援としての集団コラーゲ療法-作品と認知物語療法を通して表現された心的世界の検討-」 第62回 京都文教コラーゲ療法研究会 講演
2015年12月～現在に至る	日本心身医学会員

専任教員の教育・研究業績

所属 製剤学研究室	職名 准教授	氏名 古林 呂之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 学部学生に対する教育	2018年10月～	3年次科目『薬剤設計学』、6年次科目『総合薬学講座』を担当している。 SBOsに基づき、薬剤師国家試験で取り扱われる内容をできる限り盛り込んだ資料を作成し、配布している。
2 作成した教科書、教材、参考書 (1) 製剤化のサイエンス(改訂7版) 寺田勝英／高山幸三編集 (2) 「わかりやすい薬物動態計算問題の解き方」(ネオメディカル)	2015年3月23日 2019年3月28日	製剤化のサイエンス 第2部製剤設計 第2章製剤化と製剤試験法 「I 医薬品添加物」、「II 製剤化」ネオメディカル(pp.174-pp.202)を執筆した。 ①腎クリアランスpp.113-pp.118、②クレアチニンクリアランス(Cockcroft-Gaultの式) (pp.119-pp.123)を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Manami Tomisaki, Mayuko Kawakami, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2017, 96, 284-289. "Nasal drug absorption from powder formulations: The effect of three types of hydroxypropyl cellulose (HPC)"
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Mari Arai, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 1105-1111. "Delivery of Oxytocin to the Brain for the Treatment of Autism Spectrum Disorder by Nasal Application"
Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kaeko Araki, Mai Yoshizumi, Masakazu Enomura, Daisuke Inoue, Tomoyuki Furubayashi, Reiko Yutani, Reiko Teraoka, Akiko Tanaka, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto, Katsumi Iga, Toshiyasu Sakane	論文	Eur. J. Pharm. Biopharm., 2018, 122, 1-5. "Novel strategy for improving the bioavailability of curcumin based on a new membrane transport mechanism that directly involves solid particles"
Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto, Ken-ichi Ogawara, Kazutaka Higaki, Akiko Tanaka, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Tomoyuki Furubayashi	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 4462-4469. "Quantitative Estimation of the Effect of Nasal Mucociliary Function on in Vivo Absorption of Norfloxacin after Intranasal Administration to Rats"
Daisuke Inoue, Akiko Tanaka, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto, Ken-ichi Ogawara, Toshikiro Kimura, Kazutaka Higaki, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Tomoyuki Furubayashi	論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2018, 117, 21-26. "The relationship between in vivo nasal drug clearance and in vitro nasal mucociliary clearance: Application to the prediction of nasal drug absorption"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ラマン分光法を利用した粉末状薬物の経鼻吸収性推定法の構築Ⅱ～培養細胞上での溶解パターン評価～	2018年5月	日本薬剤学会第33年会
鼻腔内投与による α -Galactosylceramideの頸部リンパ節への直接送達に関する検討	2018年7月	第34回日本DDS学会学術集会
鼻腔内投与による α -Galactosylceramideの頸部リンパ節送達性改善に関する検討	2019年3月	日本薬学会第139年会
ラマン分光法を利用した粉末状薬物の経鼻吸収性推定法の構築Ⅲ～培養細胞上での結晶溶解解析～	2019年5月	日本薬剤学会第34年会
α -Galactosylceramideの鼻腔内投与による免疫活性化に関する検討	2019年7月	第35回日本DDS学会学術集会
3. その他		
講演演題名	発表年・月	会名
点鼻剤の過去・現在・未来～薬物動態学・製剤学から点鼻剤を考える～	2019年10月	第183回神戸西ブロック薬学研修会

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1995年9月～	日本薬物動態学会委員（現在に至る）
1996年1月～	日本薬学会会員（現在に至る）
1997年1月～	日本薬剤学会会員（現在に至る）
2001年7月～	日本DDS学会会員（現在に至る）
2008年9月～	米国薬学会 American Association of Pharmaceutical Scientists 会員（現在に至る）
2013年9月～	創剤フォーラム会員（現在に至る）
2014年6月～	日本薬剤師会・岡山県薬剤師会会員（現在に至る）
2015年11月～	岡山実験動物研究会会員（現在に至る）

専任教員の教育・研究業績

所属 薬品物理化学研究室	職名 准教授	氏名 佐野 紘平
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 本学薬学部学生への教育（講義、実習）	2016年～現在	物理化学系実習（2年次後期） 化合物の加水分解反応速度、表面張力の測定に関する実習等を担当。
	2016年～現在	物理化学Ⅲ（2年次後期）（分担、6コマ） 溶液の性質および電気化学に関する講義を担当、e-ラーニングを実施。
	2016年～現在	アクティブラボ（1～3年次通年） 1～3年次の学部学生に対して、物理化学関連の実験指導を実施。
	2017年～現在	薬学入門（1年次前期） 物理系薬学に関する基礎的講義を実施。
	2017年～現在	アイソトープ演習（3、4年次前期）（分担、6コマ） 放射線取扱主任者試験（国家試験）の資格取得を目指し、問題演習を実施。 2018年度、受講生から第1種放射線取扱主任者試験に1名合格。
(2) 本学薬学部学生への教育（講義、実習）	2016年～現在	研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。 担当学生計4名が学会優秀発表賞を受賞（計5件）。
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2016年～現在	大学院生に対して、講義および研究指導を実施。
	2019年	物理系創薬学特論（大学院博士）
(4) 他大学での講義	2017年7月14日	京都大学大学院薬学研究科の大学院生にセラノスティックス分子プローブに関する講義を実施。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし

4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kohei Sano, Manami Ohashi, Kengo Kanazaki, Akira Makino, Ning Ding, Jun Deguchi, Yuko Kanada, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Bioconjugate Chemistry</i> , 28 :1024-1030 (2017) Indocyanine green-labeled polysarcosine for in vivo photoacoustic tumor imaging .
Kohei Sano, Yuko Kanada, Kengo Kanazaki, Ning Ding, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Journal of Nuclear Medicine</i> , 58 :1380-1385 (2017). Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues.
Kohei Sano, Yuko Kanada, Katsushi Takahashi, Ning Ding, Kengo Kanazaki, Takahiro Mukai, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Molecular Pharmaceutics</i> , 15 :3997-4003 (2018) Enhanced delivery of radiolabeled polyoxazoline into tumors via self-aggregation under hyperthermic conditions.
Kohei Sano, Ling Bao, Natsuka Suzuno, Kento Kannaka, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane, Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 1 :953-958 (2019) Development of cancer-targeted single photon emission computed tomography/fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline.
Kento Kannaka, Kohei Sano, Masayori Hagimori, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane, Takahiro Mukai	論文	<i>Bioorganic & Medicinal Chemistry</i> , 27 :3613-3618 (2019) Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
がんの光熱治療を目的としたコンドロイチン硫酸被覆金ナノロッドの開発 (優秀ポスター賞受賞)	2018年・10月	第68回 日本薬学会近畿支部総会・大会
Enhanced delivery of radiolabeled thermoresponsive polymers into tumors under hyperthermic conditions for internal radiotherapy. (Best Poster Award受賞)	2018年・11月	The tenth China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences

Development of SPECT/Fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline derivative for detection of tumors. (Best Poster Award受賞)	2018年・11月	The tenth China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences
Internal radiotherapy using radiolabeled polyoxazoline that are thermoresponsively self-aggregated in tumor tissues.	2019年・9月	第78回 日本癌学会学術総会
熱応答凝集性ポリマー型放射性薬剤を用いる内用療法の開発研究	2019年・11月	第59回 日本核医学会学術総会
3. その他（講演等）		
演題名	発表年・月	学会名
水溶性ポリマーを母体とするがんの診断・治療用プローブの開発（日本薬学会物理系薬学部会奨励賞 受賞講演）	2017年・3月	日本薬学会 第137年会
Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues. (日本核医学会研究奨励賞（最優秀賞）受賞講演)	2018年・11月	第58回 日本核医学会学術総会
水溶性高分子の物理化学的特性に基づくがんのセラノスティクス薬剤の創製（日本薬学会奨励賞）受賞講演	2019年・3月	日本薬学会 第139年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年～現在	日本薬学会会員	
2006年～現在	日本分子イメージング学会会員	
2008年～現在	日本核医学会会員	
2016年～現在	日本DDS学会会員	
2019年～現在	日本癌学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	社会科学研究室	職名	准教授	氏名	小門 穂
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2019年4月～ 2020年4月～	<p>「医療政策倫理入門」では、医療者として考え判断するための基盤を身につけることを目標とし、医療政策という制度的な観点から医療倫理に関する原則、歴史と現状についての講義を行う。</p> <p>「医療倫理学」では、医療倫理の減速や主要な問題について講義した後、事例を用いたグループワークを行う。「総合文化演習」ではQOLを取り上げ、受講生の文献精読、発表、レポート作成を指導する。</p>		
2	作成した教科書、教材、参考書				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

小門穂	著書	『フランスの生命倫理法 生殖医療の用いられ方』ナカニシヤ出版、2015年
Jungen Koimizu, Minori Kokado, Kazuto Kato	論文	Ethical Perspectives of Japanese Engineers on Ambient Assisted Living Technologies: Semi-structured Interview., Asian Bioethics Review, July 2018, 10(2), 143-155.
小門穂	論文	セクシュアルマイノリティーと生殖補助医療—フランスの動向から、『上智ヨーロッパ研究』第10号、2018年3月、67-83頁
小門穂	論文	女性の身体の資源化に抗う—代理出産をめぐる日仏の動向、『科学技術社会論研究』17巻、2019年4月、93-103頁
小門穂	論文	フランスにおける性別表記変更の脱医療化—21世紀司法の現代化法のインパクト、『ジェンダー法研究』第6号、2019年12月、157-165頁
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
フランス生命倫理法2018年改正と市民参加—生殖医療をめぐる議論を中心に	2018年12月	第30回日本生命倫理学会年次大会
Who Can Use ART? An analysis of the Current Debate in France over the Revision of Laws Governing Reproductive Technologies.	2019年5月	GARC, New Reproductive Technologies and Global Assemblages: Asian Comparative Perspectives.
Gametes Move Across Borders : Forefront of Reproductive Tourism	2019年9月	4S (Society for Social Studies of Science)
生殖ツーリズムと国内法規制—フランス生命倫理法2019年改正から	2019年11月	第64回日本生殖医学会
公募ワークショップ「生殖における概念の再定義—〈専門家〉による人体・技術への意味づけから」にて「生殖する身体の性別はいかに判断されるのか—フランスの動向から」	2019年12月	第31回日本生命倫理学会年次大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年4月～現在に至る	日本生命倫理学会会員	
2005年9月～現在に至る	科学技術社会論学会会員	
2015年4月～現在に至る	日本医事法学会会員	

2016年12月～現在に至る	日本フランス語教育学会会員
2017年2月～現在に至る	4S (Society for Social Studies of Science) 会員
2018年1月～現在に至る	日本生命倫理学会国際交流委員会委員
2018年1月～現在に至る	日本生命倫理学会編集委員会委員
2019年4月～現在に至る	京都生命倫理研究会世話人

専任教員の教育・研究業績

所属	病態生化学研究室	職名	講師	氏名	多河 典子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年10月～2016年9月 2009年10月～ 2013年10月～ 2017年4月～ 2009年4月～9月 1987年4月～ 2005年9月～ 2008年～ 1987年4月～ 1987年4月～1990年3月	学部3年生 臨床検査学 I 講義 学部1年生 生化学 I 講義 学部3年生 内分泌学 講義（2コマ） 学部3年生 臨床生化学 講義（科目名変更 旧 臨床検査学 I） 学部1年生 早期体験学習指導 学部4～6年生に卒業研究I・II指導 学部6（旧4）年生 総合薬学講座講義（2（1）コマ） 病態解析治療学特論（病態生化学特論） 1～2コマ 学部3（4）年次生 臨床検査（臨床化学）実習指導 学部4年生 臨床検査総論実習指導		
2	作成した教科書、教材、参考書	2006年10月～ 2009年10月～	臨床生化学（臨床検査学 I） 講義プリント 生化学 I 講義用プリント		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2009年～2011年	推薦入学者の宿題作成、質問会で解説を行った。		
4	その他教育活動上特記すべき事項	2010. 11. 10, 2011. 11. 11, 2014. 6. 21	出張講義 県立明石南高校、県立姫路南高校、県立小野高校		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Tagawa N, Kubota S, Kobayashi Y, Kato I.		論文	Steroids. 2015;93:77-86. "Genistein inhibits glucocorticoid amplification in adipose tissue by suppression of 11 β -hydroxysteroid dehydrogenase type 1."		
Masumoto K, Tagawa N, Kobayashi Y, Kusuda S.		論文	Pediatr Neonatol. 2019;60(5):504-511. "Cortisol production in preterm infants with or without late-onset adrenal insufficiency of prematurity: A prospective observational study."		

Mitsumoto Y, Sato R, Tagawa N, Kato I.	論文	J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo). 2019;65(2):202-204. "Rubiscolin-6, a δ -Opioid Peptide from Spinach RuBisCO, Exerts Antidepressant-Like Effect in Restraint-Stressed Mice."
2. 学会発表 (2015-2019年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
マウス脂肪組織におけるnesfatin-1の発現・分泌促進について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2018/4/26	第91回日本内分泌学会学術総会
肥満モデルマウスの視床下部及び脂肪組織での新規エネルギー代謝関連ペプチドの発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬大 2) 鹿児島大院医歯	2018/8/24	第58回日本臨床化学会年次学術集会
消化管ホルモンxeninのELISA法の開発 多河 典子1)、中張隆司2)、浅野 真司3)、桑原 厚和3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬大2) 立命館大薬 3) 立命館大総合科学技術研	2019/3/23	日本薬学会第139年会
マウス視床下部及び脂肪組織でのNUCB2 mRNA発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2019/5/10	第92回日本内分泌学会学術総会
腸管ペプチドxeninのELISA法の確立とマウス小腸組織での定量 多河 典子1)、浅野 真司2)、中張 隆司3)、桑原 厚和3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学病態生化学研究室2) 立命館大学薬学部分子生理学教室3) 立命館大学総合科学技術研究機構	2019/11/3	第40回日本肥満学会
III 学会等および社会における主な活動		
1986年7月～	日本薬学会会員	
2006年4月～	日本内分泌学会代議員	
2014年6月～	日本臨床化学会評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬剤学研究室	職名	講師	氏名	上田 久美子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 特になし					
2 作成した教科書、教材、参考書 薬物動態学Ⅱプリント冊子作成		2011.4	講義用プリント冊子を作成し、毎年改定、修正した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
「Libra」誌上にて報告		2018.12	上田久美子、寺岡麗子、竹内敦子、安岡由美、内田吉昭、八巻耕也、土生康司、宮田興子、中山尋量、北河修治。"薬学教育早期体験学習におけるピア評価の試み"		
「Libra」誌上にて報告		2018.12	上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、中山尋量、北河修治。"チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み その2"		
「Libra」誌上にて報告		2018.12	上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、力武良行、中山尋量、北河修治。"チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み"		
第3回日本薬学教育学会にて発表		2018.9	上田久美子、八巻耕也、土生康司、寺岡麗子、宮田興子、中山尋量、北河修治。"チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築"		
平成29年度神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラム成果報告会にて報告		2018.6	北河修治、上田久美子、八巻耕也、土生康司、寺岡麗子、宮田興子"チーム基盤型学習（TBL）を用いた分野横断統合演習の構築"		
「薬学教育」誌上にて報告		2017.12	上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、北河修治。薬学教育、2017、doi: 10.24489/jjphe.2017-012."チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み"		
第2回日本薬学教育学会にて発表		2017.9	上田久美子、八巻耕也、土生康司、寺岡麗子、宮田興子、北河修治。"チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み"		
平成28年度神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラム成果報告会にて報告		2017.6	北河修治、上田久美子、八巻耕也、土生康司、寺岡麗子、宮田興子"チーム基盤型学習（TBL）を用いた分野横断統合演習の構築"		
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし					

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara K.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2019, 509, 249-254. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells with intrinsic resistance to decitabine."
Ueda K, Masuda A, Fukuda M, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S	論文	Drug Metab. Pharmacokinet. 2017, 32, 301-310. "Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells."
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S	論文	Biol Pharm Bull. 2017, 40, 2199-2204. "Different schedule-dependent effects of epigenetic modifiers on cytotoxicity by anticancer drugs in colorectal cancer cells."
Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol Pharm Bull. 2017, 40, 1320-1325. "Effects of zebularine on invasion activity and intracellular expression level of let-7b in colorectal cancer cells."
Ueda K, Hosokawa M, Iwakawa S.	論文	Biol Pharm Bull. 2015, 38(8), 1113-9. "Cellular uptake of decitabine by equilibrative nucleoside transporters in HCT116 cells."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヒト大腸がんHCT116細胞におけるデシタビンの取り込みの速度論解析—膜透過クリアランスと代謝クリアランスを含むコンパートメントモデル—	2019. 1	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
Kinetic analysis of decitabine uptake in HCT116 colon cancer cells	2018. 1	2018 International Meeting on 22nd Microsome and Drug Oxidations and 33rd Japanese Society for the Study of Xenobiotics
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞におけるデシタビンの細胞内取り込みの速度論的解析	2018. 5	日本薬剤学会第33年会

ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞によるトランスポーター、解糖系酵素、メタロプロテアーゼの発現量に対するニトロベンジルチオイノシン処置の影響	2018.3	日本薬学会第138年会
Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells	2017.12	日本薬物動態学会第32回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年 4月～2017年 3月	一般社団法人 薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 委員	
2009年 4月～2011年 3月	日本薬学会 ファルマシア トピックス専門小委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 講師	氏名 三上 雅久
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 学部学生への教育	2007年4月～現在に至る	学部1年次生に対して「生化学II」（2014年度新入生までは、学部2年次前期に開講）の講義を、また学部2年次に対して「生化学III」の講義を行っている。「生化学II」では、タンパク質・酵素について、できるだけ日常の話題や疾患との関連性を織り交ぜながら解説している。「生化学III」では、エネルギー代謝と恒常性の維持について、補助プリント等を用意して、体系的に理解してもらえよう努めている。また、学生からの質問に対して個別対応にとどまらず、後の講義やオフィスアワーなどで学生全体にフィードバックしている。 CBTや国家試験への対策として、関連する過去問の解説を実施し、その一部を定期試験に出題することで、学生の理解度の把握に努めている。学生評価アンケート（2年に一度）では、平均以上の評価を得ている。
	2008年9月～2011年3月	学部3年次生（約70名の少人数クラス）に対して、「薬学英語入門II」の講義を行った。既存の薬学英語のテキストや学術論文から抜粋した資料を用い、英文内容の背景ならびに概要の理解に重点をおいた。講義毎に、前回の講義で取り扱った頻出専門用語や注意すべき発音などについて確認テストを実施した。担当期間中に実施された2回の学生評価アンケートにおいて、いずれもベストティーチャー賞を受賞した。
	2000年4月～現在に至る	学部3年次生に対して、生物学系II実習（2014年度より生物学系I実習に、2017年度より生化学実習に名称変更）の実施を担当している。限られた時間の中で、当該分野の必須項目を満たし、自ら考えながら実習を行えるような実習プログラムを組み立てている。実習項目についても、最新の医療や遺伝子操作技術の進展と同調したものにするために、随時改訂している。実習時間の最後に、少人数のグループごとに質疑応答を行い、実習内容と講義や国家試験との関連性を意識させる指導を心がけている。
		学部学生の卒業研究に対する指導を行っている。与えられたテーマに対して、自ら積極的に取り組む姿勢を身につけさせることに重点を置いている。定期的開催される研究室のセミナーでの文献紹介や研究報告などを通じて、携わっている研究分野に対する深い理解と、プレゼンテーション能力や問題解決力の向上を目標に指導している。

(2) 大学院生への研究指導	2000年4月～現在に至る	生化学講座所属の大学院生に対する研究指導ならびに大学院特論（生化学特論、2012年度以降、生命科学特論に改称）の講義を担当している。大学院特論では、糖鎖の生理機能の重要性と正常な機能に異常を来した代謝異常症について発生的視点から講義をしている。大学院生に対しては、研究テーマを理解し、主体的に実験計画と組み立てながら課題解決に取り組めるようになることを目標に指導をしている。また、修了までの間に少なくとも1回の学会発表ができるよう、日々の研究指導にあたっている。
2 作成した教科書、教材、参考書 教科書	2015年3月31日発行	第5章 糖質 スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学I. 生命現象の基礎（東京化学同人，2015）28-34.
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 該当なし。		
4 その他教育活動上特記すべき事項 ベストティーチャー賞受賞	2008年度、2010年度	薬学英語入門II（2008年度および2010年度）
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Mikami T., Kitagawa H.	著書	in Sugar chains (Taniguchi, N., Suzuki, T., and Ohtsubo, K., eds) 2015, pp107-126, Springer. "Glycan structure and neural plasticity."
Koike T., Mikami T., Shida M., Habuchi O., Kitagawa H.	論文	Sci. Rep. 2015, 5, 8994. "Chondroitin sulfate-E mediates estrogen-induced osteoanabolism"

Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2017, 487(3), 678-683. "A characteristic chondroitin sulfate trisaccharide unit with a sulfated fucose branch exhibits neurite outgrowth-promoting activity: Novel biological roles of fucosylated chondroitin sulfates isolated from the sea cucumber <i>Apostichopus japonicus</i> "
Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Biochim. Biophys. Acta Gen. Subj. 2019, 1863(9), 1319-1331. "Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha V \beta 3$ "
Mikami T., Kitagawa H.	総説	Glycoconj. J. 2017, 34(6), 725-735. "Sulfated glycosaminoglycans: their distinct roles in stem cell biology"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
コンドロイチン硫酸の発現量調節による骨格筋分化・再生過程の制御	2015年・8月	第34回日本糖質学会年会（東京）
Distinct roles of highly sulfated chondroitin sulfates in neural polarity formation.	2016年・1月	The 3rd International Symposium on Glyco-Neuroscience (Awaji)
コンドロイチン硫酸鎖による破骨細胞分化の制御メカニズムの解析	2017年・7月	第36回日本糖質学会年会（旭川）
高硫酸化コンドロイチン硫酸Dによる神経突起伸長促進機構の解析	2018年・8月	第37回日本糖質学会年会（仙台）
Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha V \beta 3$.	2019年・9-10月	11th International Conference on Proteoglycans (Kanazawa)

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1997年2月～現在に至る	日本薬学会会員
1996年4月～現在に至る	日本生化学会会員
2000年4月～現在に至る	日本糖質学会会員
1998年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学基礎教育センター	職名 講師	氏名 西村 克己
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年4月から	教科書と演習問題を連動させて解説し、理解に役立てるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2006年4月から	講義内容のレジュメを作成し、適宜配付している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nishimura K., Fukuyama N., Yasuhara T., Yamashita M., Sumiyoshi T., Yamamoto Y., Yamada K., Tomioka K.	論文	Tetrahedron 2015, 71 (39), 7222-7226. "A short-step synthesis of (+)- β -lycorane by asymmetric conjugate addition cascade"

Sugimoto Y., Nishimura K., Itoh A., Tanahashi T., Nakajima H., Oshiro H., Sun S., Toda T. Yamada J.	論文	J. Pharm. Pharmacol. 2015, 67, 1716-1722. "Serotonergic mechanisms are involved in antidepressant-like effects of bisbenzylisoquinolines liensinine and its analogs isolated from the embryo of <i>Nelumbo nucifera</i> Gaertner seeds in mice"
Le D. H., Nishimura K., Tanahashi T.	論文	Natural Product Communications 2016, 11 (7), 949-952. "Alkaloids from the Tuber of <i>Stephania cf. rotunda</i> "
Le D. H, Nishimura K., Takenaka Y., Mizushima Y., Tanahashi T.	論文	J. Nat. Prod. 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i> "
Nishimura K., Horii S., Tanahashi T.	論文	Heterocycles 2018, 97 (2), 865-876. "Asymmetric Synthesis of O-Methylneferine"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
DNA polymerases inhibitory polyprenylated benzoylphloroglucinols from the fruits of <i>Garcinia schomburgkiana</i>	2015・8	Inaugural Symposium of the Phytochemical Society of Asia
α -アレクトロン酸の合成研究	2015・10	第65回日本薬学会近畿支部総会・大会
単離培養地衣菌 <i>Graphis</i> sp. NH9933012 の産生する新規スピロケタール化合物の合成と立体化学	2016・3	日本薬学会第136年会
アポルフィンアルカロイドの鎮痛作用と構造活性相関	2017・3	日本薬学会第137年会

西村

クリッカーを活用した研修会参加前後における気分と意欲の変化及び関連性	2018・9	第3回日本薬学教育学会大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 辰見 明俊
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2014年4月～現在に至る 2008年4月～現在に至る 2013年4月～現在に至る 2018年4月～現在に至る 2019年4月～現在に至る 2012年4月～現在に至る 2010年4月～現在に至る 2011年1月～現在に至る 2011年4月～現在に至る 2012年4月～現在に至る 2011年4月～現在に至る	6年制3年次の「調剤学Ⅰ」を分担した。 6年制4年次の「実務実習事前教育」を分担した。 6年制4年次の「社会保障制度と薬剤経済」を分担した。 6年生4年次の「処方解析Ⅰ」を分担した。 6年生4年次の「処方解析Ⅱ」を分担した。 6年制4、5年次「海外薬学研修」の講義を分担した。 6年制5年次の「病院実習」および「薬局実習」を分担した。 6年制4～6年次の「卒業研究」を分担した。 6年制6年次の「総合薬学講座」を分担した。 6年制6年次の「総合薬学講座（特別講座）」を分担した。 6年制6年次の「処方解析学」および「処方解析演習」を分担した。 補助プリントの作成や視覚教材の利用により理解を深めるよう工夫している。 医療の進歩や制度の変更に対応した最新情報の提供に努めている。 また、病院薬剤師としての経験を活かし、教科書だけでは得られない知識や技能の教授に努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		特になし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし
4 その他教育活動上特記すべき事項		

薬学教育者・薬剤師へのFD活動		2008年11月～現在に至る	タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップin近畿に協力。
II 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別	内容	
波多江 崇, 長谷川 由佳, 白川 晶一, 内海 美保, 猪野 彩, 竹下 治範, 辰見 明俊, 田内 義彦, 濱口 常男	論文	医薬品相互作用, 2015, 39(1), 37-43. "フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査"	
波多江 崇, 石田 好宏, 伊東 真知, 大島 沙紀, 藤森 可純, 猪野 彩, 田内 義彦, 竹下 治範, 辰見 明俊, 森口 紗里, 濱口 常男	論文	日本地域薬局薬学会誌, 2016, 4(1), 16-22. "日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス"	
Akitoshi Tatsumi, Masaya Okada, Yoshihiro Inagaki, Sachiyo Inoue, Tsuneo Hamaguchi, Seigo Iwakawa	論文	Biol. Pharm. Bull., 2016, 39(8), 1364-1369. "Differences in Esterase Activity to Aspirin and <i>p</i> -Nitrophenyl Acetate among Human Serum Albumin Preparations"	
波多江 崇, 田中 智啓, 猪野 彩, 田内 義彦, 竹下 治範, 辰見 明俊, 濱口 常男	論文	医薬品情報学, 2017, 18(4), 289-294. "日本人を対象とした食後血糖値上昇に対する難消化性デキストリンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス"	
Akitoshi Tatsumi, Sachiyo Inoue, Tsuneo Hamaguchi, Seigo Iwakawa	論文	Biol. Pharm. Bull., 2018, 41(2), 277-280. "The Effect of Ethanol on the Hydrolysis of Ester-Type Drugs by Human Serum Albumin"	
2. 学会発表			
演題名	発表年・月	学会名	
日本人を対象とした食後血糖値上昇に対する難消化性デキストリンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス	2017年3月	日本薬学会第137年会	

NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の処方実態調査	2018年3月	日本薬学会第138年会
2型糖尿病患者におけるリラグルチドの血中BNPおよび心機能指標への効果	2018年9月	第66回日本心臓病学会学術集会
免疫チェックポイント阻害剤ニボルマブによる免疫関連有害事象発現予測因子の探索	2019年6月	日本医療薬学会第3回フレッシュャーズ・カンファランス
トラスツマブ，ドキシソルビシン，ペパシズマブ投与による左室機能への影響	2019年9月	第2回日本腫瘍循環器学会学術集会
III 学会等および社会における主な活動		
1997年1月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
2001年3月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2008年4月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 猪野 彩
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～ 2011年4月～ 2011年4月～ 2014年4月～ 2017年～ 2018年～	4年次生の実務実習事前教育を分担した。 4年次生の薬事関係法規・薬事制度にて毒物及び劇物取締法、医療保険関係法規の講義を分担した。 6年次生の処方解析学，処方解析演習を分担した。 3年次生の調剤学 I の講義を分担した。 2年次生の医療コミュニケーション演習を分担した。 4年次生の処方解析 II を分担した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
波多江 崇，長谷川由佳，白川昌一，内海美保，猪野 彩， 竹下治範，辰見明俊，田内義彦，瀨口常男	論文	フィジカルアセスメントに対する薬局薬剤師の意識および活用状況に関する実態調査，医薬品相互作用研究，39(1)，2015

三木有咲, 波多江 崇, 猪野 彩, 井上知美, 上野隼平, 笠谷君代, 近藤亜美, 坂口知子, 佐々木信子, 田内義彦, 竹下治範, 辻華子, 中川素子, 野口 栄, 長谷川由佳, 水田恵美, 矢羽野早代, 山根雅子, 濱口常男	論文	子育て中の母親を対象とした調査にみる薬局薬剤師の職能認知と薬局薬剤師の課題, 社会薬学, 34 (1) 24-33, 2015
波多江 崇, 石田好宏, 伊東真知, 大島沙紀, 藤森可純, 森口沙里, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 濱口常男	論文	日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム比較試験のメタアナリシス, 日本地域薬局学会誌, 4(1), 2016
波多江 崇, 田中智啓, 猪野 彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見明俊, 濱口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス, 医薬品情報学, 18(4)67-72, 2017
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 濱口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響, 医薬品情報学, 20(2) 98-103, 2018
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会
NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の処方実態調査	2018年3月	日本薬学会第138年会
III 学会等および社会における主な活動		
2002年～現在に至る	日本病院薬剤師会 会員	
2016年～現在に至る	日本薬学会 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬用植物園	職名 講師	氏名 西山 由美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1986年～2008年6月 2010年8月～現在に至る	2年次生の生薬化学実習（2017年からは細胞生物学実習）を担当している。実習開始時の講義ではパワーポイントを使って、実験の目的や実験内容について説明し、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカッションを行い理解を深めるようにしている。また、実験中は各実習机を見回り、手技が正しく安全に行われているかチェックし、正しい器具の取り扱いなどを習得してもらうようにしている。
	2011年4月～現在に至る	2年次生（2012年からは1年生）の生薬学を担当している。生薬に関する基本的なことから始め、薬としての生薬について理解を深めてもらえるようにしている。国家試験やC B T試験に必要な知識を習得しながら、生薬に興味を持てるように標本を用意して講義を行っている。
	2014年9月～2017年3月	2年次生の後期（2016年度は前期）の生薬化学の後半部分を担当していた。生薬由来の医薬品の内、特にアルカロイド化合物を中心に講義を行った。重要な医薬品が多いので、国家試験やC B T試験に必要な知識を中心に、興味を持ちやすい内容から始め、化合物の構造式やその特徴・作用を暗記ではなく、化学的に見れるような力をつけていけるように心掛けた。
	2014年4月～現在に至る	4年次生（前期）の漢方医学（2014, 2015年度は4コマ、2016年度からは7コマ）を担当している。これまで学んできた西洋医学とは概念が異なるので、その部分を意識して説明している。近年は、漢方薬も多く処方されるようになったことや、利用を希望する人も増えてきているので、漢方に関する基本的な知識や汎用される漢方薬を中心に講義し、またCBT試験や国家試験の問題に対応できるように工夫している。
	2017年9月～現在に至る	3年次生（後期）の薬学英语入門Ⅱを担当している。英語で書かれた専門的な文章をただ訳すだけでなく、図や資料使いながら内容を深く理解することを目標としている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2013年8月～現在に至る	生薬学の講義で用いる冊子を作成した。書き込み式なので、生薬について自分でまとめながら、勉強出来るようにしている。余白を使って、教科書に載っていないことなどを書き込み、生薬について自分だけのまとめのノートになるように使ってもらいたいと考えている。

	2015年8月～2017年3月	生薬化学の講義で用いる冊子を作成した。書き込み式で、重要な化合物を自分でまとめて勉強できるようにしている。余白を利用して、教科書の内容を自分でまとめて書いたり、教科書に載っていないことなども書き込んで、自分のまとめのノートとなるように使ってもらいたいと考えて作成した。
	2015年4月～現在に至る	漢方医学の講義で用いる冊子を作成した。テキストには多くの情報があり、漢方医学のことを学ぶにはじっくり読むのが一番だが、馴染みのない単語や内容が多いことから、簡単に内容をまとめた冊子を作成した。ただし、冊子だけでは不十分なので、冊子とテキストの両方で勉強して欲しいと考えている。冊子には、国家試験やCBTの問題集も入れて、少なくともどんな内容を勉強し理解しないとイケないかを考えてもらうことにした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2018年10月～2019年11月	薬用植物園を教育に活かすために、植物園を利用してどのような教育ができるかを検討するために、1年生を対象に薬用植物園トライアル実習を行っている。植物園で、植物を直接観察したり五感を使って体験することで、植物の生態や利用法などを学んでもらう。また、薬用植物を用いた利用法として染色などを行うほか、簡単な実験も行い、知識がより定着するように工夫している。今後、これらの内容を、植物園を利用した実習などに役立てていく予定である・
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nishiyama Y., Noda Y., Nakatani N., Shitan N., Sudo T., Kato A., Chalo Mutiso P. B.	論文	Journal of Natural Medicines, 2019, 73(1): 289-296. "Structure of constituents isolated from the bark of Cassipourea malosana and their cytotoxicity against a human ovarian cell line"
北河 修治、西山 由美	著書	果物の色に秘められた巧みな力⑨ かきといちじく 大塚薬報 2019, 4月, No. 744, 22-25.
北河 修治、西山 由美	著書	果物の色に秘められた巧みな力⑩ トロピカルフルーツ 大塚薬報 2019, 5月, No. 745, 26-29.
2. 学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
アボルフィンアルカロイドの鎮痛作用と構造活性相関	2017年・3月	日本薬学会137年会 仙台
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対するタクシャの抗腫瘍活性成分の探索	2017年・9月	日本生薬学会64回年会 千葉
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する漢方薬とシスプラチンの併用効果	2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
ビャクシのヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する抗腫瘍活性成分の探索	2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
<i>Uvaria scheffleri</i> 根の成分検索	2019年・3月	日本薬学会139年会 千葉
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
研究って・・・？ なんだか難しそう	2016年・1月、2017年・1月	兵庫県立西宮高等学校 リサーチII 「課題研究入門・学術講演会」
植物のちから	2019年・9月	2019年度阪神地区相互利用担当者連絡会 神戸
III 学会等および社会における主な活動		
1986年7月～現在に至る	日本生薬学会会員	
1986年12月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	中央分析室	職名	講師	氏名	都出 千里
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1996～2010	有機化学系III実習（旧 機器分析学実習および有機化学系II実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備をおこない、実習講義をおこない実習室で学生の指導に当たる。また、実習内容についての討議を学生と行い理解を深めさせた。		
		2003, 2005, 2006	情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。		
		2010～	構造解析学I（分担）担当分野をわかりやすくするためにパワーポイント、補充プリントを用いて講義を行っている。		
		2017～	有機化学演習（B 4クラス）担当分野の説明をわかりやすくするために補助プリントを用いて講義を行っている。		
		2018～	情報リテラシー（分担）では担当範囲をわかりやすくするためパワーポイントを用いた講義を行っている。また、補講時間を設け、授業だけでは課題が終わらない学生に指導している。		
		2018～	構造解析学II（分担）で担当分野の説明をわかりやすくするためにパワーポイントや補助プリントを作成したり、実際のスペクトルの測定なども行っている。		
		2019～	有機化学演習で理解を深めるために、2回に1回の割合で学生に問題を2～3問、紙に解答させ、それを添削することで、個人個人に反応式の書き方などを指導した。		
		1996～	毎年数名のゼミ生の実験指導を行い、学年末にはプレゼンテーションのためのまとめ方、発表の方法などの指導を行った。		
2	作成した教科書、教材、参考書	2010～2012	分析化学III(分担)NMRやESRの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。		
		2013～	構造解析学I(分担)NMRやESRの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。		
		2010～	現在の薬学総合講座では最低限必要なことをまとめたプリントを用意するとともに毎年、国家試験の問題を追加して解説するための資料を作成している。		

	2018～	構造解析学 I I (分担) NMRでの構造解析を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。演習するスペクトル課題を選定し、プリントにしている。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kimura K., Hirota Y., Kuwahara S., Takeuchi A., Tode C., Wada A., Osakabe N., Suhara Y.	論文	Bitamin, 2017, 91, 499-502. "Synthesis of novel synthetic vitamin K analogues prepared by introduction of a heteroatom and a phenyl group that induce highly selective neuronal differentiation of neuronal progenitor cells"
Kimura K., Hirota Y., Kuwahara S., Takeuchi A., Tode C., Wada A., Osakabe N., Suhara Y.	論文	J. Med. Chem., 2017, 60, 2591-2596. "Synthesis of novel synthetic vitamin K analogues prepared by introduction of a heteroatom and a phenyl group that induce highly selective neuronal differentiation of neuronal progenitor cells"
Teraoka R. Fukami T. Furuishi T. Nagase H. Ueda H. Tode C. Yutani R. Kitagawa S. Sakane T.	論文	Chem. Pharm. Bull. (2019), 67(9), 940-944. "Improving the solid-state photostability of furosemide by its cocrystal formation"
Yutani R. Haku R. Teraoka R. Tode C. Koide T. Kitagawa S. Sakane T. Fukami T.	論文	Crystals (2019), 9(11), 553. "Comparative evaluation of the photostability of carbamazepine polymorphs and cocrystals"
Nishioka T. Endo-Umeda K. Ito Y. Shimoda A. Takeuchi A. Tode C. Hirota Y. Osakabe N. Makishima M. Suhara Y.	論文	Molecules (2019), 24(23), 4316. "Synthesis and in vitro evaluation of novel liver X receptor agonists based on naphthoquinone derivatives"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ζ-caroteneの合成研究—その1—	2019.9	第33回カロテノイド研究談話会
固体NMRでみるロキソプロフェン製剤の経時変化	2017.3	日本薬学会 第137年会

都出

レチノイン酸結晶多形の固体NMR解析－その２－	2016.6	第30回カロテノイド研究談話会
固体NMRを用いた先発および後発医薬品の物性評価	2016.3	日本薬学会 第136年会
固体NMRを用いたレチノイン酸結晶多形の解析－その２－	2015.3	日本薬学会 第135年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1993年12月～	日本薬学会会員	
1995年～	日本カロテノイド学会会員	
2006年～	日本核磁気共鳴学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 生命有機化学研究室	職名 講師	氏名 沖津 貴志
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年4月～2017年3月	3年次配当の有機化学系Ⅲ実習の指導を行った。少人数での実習並びにグループディスカッションを行い、またこれまでの講義で学んだことと実習内容とをリンクさせることで有機化学の理解度の向上に努めた。
	2009年4月～2010年9月	1年次配当の情報リテラシーの講義において進行度の遅い学生のサポートを行った。
	2011年4月～2012年9月	2年次配当の化学系基礎演習Ⅰの講義を行った。自作の小テストを毎回行い、学生の習熟度に合わせて解説することで理解度の向上に努めた。
	2013年9月～現在に至る	2年次配当の有機化学演習の講義を行っている。これまで受講した講義内容ではあるが、基礎的なところから復習した上で問題を解いてもらい、適宜学生に黒板に答案を書いてもらうことで理解度の確認に繋げ、双方向の講義となるように努めている。
	2014年9月～2020年3月	1年次配当の有機化学Ⅱの講義を行っている。基本事項を板書、解説した上で講義後半に問題を解いてもらい、理解を深める工夫を行っている。一般的な規則を理解できれば有機化学は暗記科目ではないことを学生に認識してもらえよう、教科書の章末問題から厳選した良問を解くように指導している。
	2017年4月～現在に至る	3年次配当の機器分析学実習の指導を行っている。実習を行うにあたって理解していて欲しい内容を盛り込んだ「プレテスト」を実習前に実施し、実習をより能動的・積極的に行えるように工夫した。また、これまでの「有機化学系Ⅲ実習」のSGDを引き続き行っている。
	2018年4月～現在に至る	3年次配当の合成化学Ⅱの講義を行っている。与えた課題の合成戦略をSGDで立案してもらい、各班が発表、学生と教員からの質疑応答を受けるという形式をとっている。
2 作成した教科書、教材、参考書		有機化学演習のテキストの取り纏めを担当し、毎年改訂を行っている。

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Okitsu T., Ogasahara M., Wada A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2016, 64(8), 1149-1153. "Convergent Synthesis of Dronedarone, an Antiarrhythmic Agent"
Okitsu T., Kobayashi K., Kan R., Yoshida Y., Matsui Y., Wada A.	論文	Org. Lett. 2017, 19(17), 4592-4595. "3-Methylene-4-amido-1,2-diazetidone as a Formal 1,4-Dipole Precursor: Lewis Acid-Catalyzed Nucleophilic Addition with Silylated Nucleophiles"
Okitsu T., Matsuyama T., Yamashita T., Ishizuka T., Yawo H., Imamoto Y., Shichida Y., Wada A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2017, 65(4), 356-358. "Alternative Formation of Red-Shifted Channelrhodopsins: Noncovalent Incorporation with Retinal-Based Enamine-Type Schiff Bases and Mutated Channelopsin"
Takayama R., Kaneko A., Okitsu T., Tsunoda S. P., Shimono K., Mizuno M., Kojima K., Tsukamoto T., Kandori H., Mizutani Y., Wada A., Sudo Y.	論文	J. Phys. Chem. Lett. 2018, 9(11), 2857-2862. "Production of a Light-Gated Proton Channel by Replacing the Retinal Chromophore with Its Synthetic Vinylene Derivative"
Okitsu T., Nakahigashi H., Sugihara R., Fukuda I., Tsuji S., In Y., Wada A.	論文	Chem. Eur. J. 2018, 24(70), 18638-18642. "Silyl Group-Directed 6-exo-dig Iodocyclization of Homopropargylic Carbamates and Amides"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Iodonium-mediated dearomative cyclization/Diels-Alder tandem of a chiral ynamide toward diastereoselective construction of bridgehead-spiro system	2015年12月	Pacificchem 2015
シリル基を配向基とするプロパルギルグリシン類のヨード環化反応	2016年11月	第42回反応と合成の進歩シンポジウム
イナミドのヨード環化反応を利用した中員環エーテルの即時合成	2017年11月	第43回反応と合成の進歩シンポジウム
σ -求核剤による3-メチレン-4-アミド-1,2-ジアゼチジンの求核的開環反応	2018年11月	第44回反応と合成の進歩シンポジウム
Iodocyclization of Ynamides for the Construction of Medium-Sized Oxacycles	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
3. その他（講演）		
演題名	発表年・月	学会名
ヨード環化反応を基軸とする複素環合成	2016年3月	創薬基盤化学研究 若手セミナー 第14回特別講演会
窒素共役型多重結合の特性を生かした複素環合成法の開発	2016年6月	第2回近畿薬学シンポジウム：化学系の若い力
レチノイン酸を母核とするRXRアゴニストの探索	2016年10月	日本レチノイド研究会第27回学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

沖津

2001年4月～現在に至る	日本薬学会会員
2006年4月～現在に至る	日本カロテノイド研究会会員
2007年4月～現在に至る	有機合成化学協会会員
2009年4月～現在に至る	日本ビタミン学会会員
2011年4月～現在に至る	ヨウ素学会会員
2011年4月～2014年3月	日本薬学会 フェルマシアトピックス専門小委員
2013年4月～現在に至る	日本レチノイド学会会員
2019年3月～現在に至る	日本薬学会代議員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 藤波 綾
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1995年～現在に至る	臨床生化学実習（旧臨床検査実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備を行い、実習中は実習室で指導にあ たっている。また、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカ ッションを行い理解を深めるようにしている。
	2004, 2007～2009年 2011年～現在に至る	情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。 薬学英語入門II 3年次生に対して、生命科学の分野で必要とされる基礎的な英語の知識を習得 しながら、それまでの専門科目の講義内容をも復習できるように講義を行って いる。3年前から双方向授業を指向してソフト「先生わかりませーん！」を用 いている。
	2015年～現在に至る	薬物治療学 I（旧臨床検査学II） 3年次生に対して、血液に関する臨床検査の項目と意義、異常値に対する見方 などを講義している。
	2019年～現在に至る	実務実習事前教育 4年次生に対して、5年次に行われる実務実習時に必要な技能や態度（特に調 剤、処方せん監査、セルフメディケーションなど）を指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書	2014年12月	臨床検査における免疫測定法：自己抗体検査法
	2016年3月	Human Reader -life and disease-第2版（京都廣川書店）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年8月	第1回日本薬学教育学会 ポスター発表
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月	神戸薬科大学教育改革プログラム 基礎教育センターの協力のもと、1,2年次基礎科目からの統合的学習への試み として基礎科目と臨床科目のコラボレーション授業を行った。

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hasegawa Y, Kim SR, Hatae T, Ohta M, Fujinami A, Sugimoto K, Kim KI, Imoto S, Tohyama M, Kim SK, Ikura Y, Kudo M.	論文	Dig Dis. 2015; 33(6): 715-20. "Usefulness of Cytokeratin-18M65 in Diagnosing Non-Alcoholic Steatohepatitis in Japanese Population. "
児玉典子、川西和子、田中将史、藤波 綾	著書	Human Reader -life and disease-第2版 (京都廣川書店) 2016. 3
Imoto S, Kim SR, Amano K, Iio E, Yoon S, Hirohata S, Yano Y, Ishikawa T, Katsushima S, Komeda T, Fukunaga T, Chung H, Kokuryu H, Horie Y, Hatae T, Fujinami A, Kim SK, Kudo M, Tanaka Y.	論文	Dig Dis. 2017;35(6):531-40. "Serum IFN- λ 3 Levels Correlate with Serum Hepatitis C Virus RNA Levels in Symptomatic Patients with Acute Hepatitis C. "
藤波 綾、小山淳子、児玉典子	報告	Libra, 2018; 18: 59-71. 血糖値測定の講義を介した糖とその誘導体の重要性の理解度に関する調査・考察—基礎科目と臨床科目のコラボレーション授業を目指して—
Ohta M, Fujinami A, Oishi K, Kobayashi N, Ohnishi K, Ohkura N.	論文	J. Diet Suppl., 2019; 16(3):331-344. "Ashitaba (Angelica Keiskei) exudate prevents increases in plasminogen activator inhibitor-1 induced by obesity in Tsumura Suzuki Obese Diabetic Mice. "
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
2型糖尿病患者および妊娠糖尿病患者における血清中AIF-1濃度	2016年・12月	第56回日本臨床化学学会年次学術集会
自然発症2型糖尿病モデルマウスにおける西洋ニンジン摂取の効果	2017年・3月	日本薬学会第137年会
脂肪細胞とマクロファージの共培養系におけるTNF-alphaの分泌動態および高血糖、肥大化の影響	2017年・12月	ConBio2017

高脂肪食負荷マウスにおけるアシタバ由来成分カルコンの抗糖尿病作用	2018年・3月	日本薬学会第138年会
脳梗塞におけるアディポネクチンアイソフォームの臨床的意義	2019年・3月	日本薬学会第139年会
3. その他		
演題名	発表年・月	講演内容
健康食品とポリフェノール	2015年・2月	第13回神戸薬科大学健康食品講座
ポリフェノールの多彩な魅力 ーポリフェノールの王様 アシタバカルコンを通してー	2017年・7月	第18回神戸薬科大学健康食品講座
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995年8月～現在に至る	日本臨床化学会会員	
1996年1月～現在に至る	日本薬学会会員	
2001年1月～現在に至る	日本生化学会会員	
2016年4月～現在に至る	初年次教育学会会員	
2016年4月～現在に至る	日本薬学教育学会会員	
2019年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2019年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医薬品情報学研究室	職名	講師	氏名	土生 康司
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2013～現在	CBT対策委員、実施委員			
	2013～現在	実務実習事前教育委員会委員			
	2014～現在	医薬品情報学（4年生前期）			
	2014～現在	薬学入門（1年生前期）			
	2014～現在	情報リテラシー（1年生前期）			
	2014～2017	薬剤設計学II（旧機能性製剤学）（4年前期、2コマ）			
	2015.4～現在	実務実習運営委員会委員			
2 作成した教科書、教材、参考書	2017.4	医薬品情報学（廣川書店）執筆、講義陽プリント冊子作成			
	2018.9	臨床への有機と薬理からのアプローチ（京都廣川書店）執筆			
	2019.1	みてわかる薬学 図解医薬品情報学改訂第4版（南山堂）執筆			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016.8	薬学統合学習の構築～臨床薬学-薬理学-有機化学の橋渡し教育を目指して～ 水谷 暢明、土生 康司、宮田 興子 第1回薬学教育学会.			
	2017.7	医薬品情報 様々な情報源、その選択と活用 土生 康司 第17回薬剤師のためのイブニングセミナー			
	2017.9	薬学統合学習の構築 第2報 ー 臨床薬学-薬理学-有機化学の橋渡し教育を目指して 土生 康司、水谷 暢明、宮田 興子 第2回薬学教育学会.			

	2017. 10	医薬品、サプリメントの 特徴にあった情報活用を考える 土生 康司 サプリメントフォーラム2017
	2018. 8	薬学統合学習の構築 第3報 ―低学年次生への臨床薬学・薬理学・有機化学の橋渡し教育の導入― 土生康司、水谷暢明、宮田興子 第3回薬学教育学会.
4 その他教育活動上特記すべき事項	2013～現在 2014. 4～2017. 3 2015. 4～現在 2016. 4～2018. 3 2018. 4～現在	情報委員会委員 大学広報委員会委員 個人情報保護委員会委員 図書委員会委員 動物実験委員会委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
八巻耕也, 上田昌史, 上田久美子, 江本憲昭, 水谷暢明, 池田宏二, 八木敬子, 田中将史, 土生康司, 中山喜明, 武田紀彦, 森脇健介, 北河修治	ノート (査読有)	基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果 薬学雑誌 136, 1051-1064 (2016).
八巻耕也、池田宏二、上田久美子、土生康司、中山喜明、武田紀彦、森脇健介、和田昭盛、小山淳子、児玉典子、北河修治	ノート (査読有)	分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果 薬学雑誌 137, 1285-1299 (2017).
上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、北河修治	ノート (査読有)	チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み 薬学教育 doi: 10.24489/jjphe.2017-012 (2017).
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
B型肝炎再活性化リスクのあるプレドニゾロン服用患者の抽出と疑義照会に向けたプログラム構築	2018. 3	日本薬学会第138年会
大阪赤十字病院におけるがん疼痛コントロールマニュアル改定に伴うオピオイド持続静注処方の内容及び指示の変化に関する調査	2018. 3	日本薬学会第138年会

PMDA 添付文書情報検索サイトにおける糖尿病薬識別コードの登録様式の多様性	2019. 3	日本薬学会第139年会
薬剤鑑別におけるPMDA 添付文書情報検索サイトの活用状況とニーズに関する病院薬剤師へのアンケート調査	2019. 3	日本薬学会第139年会
近隣5病院統一の問い合わせ簡素化に対する医師の意識調査	2019. 11	第29回日本医療薬学会年会
3. シンポジウム等		
シンポジウム『新時代の医薬品リスクマネジメント ～新たなハザードに対して』 医薬品情報を活用するベースはできているか ～ドイツの状況から再考～	2019. 3	日本薬学会第139年会
臨床の諸問題を基礎薬学の知識でどのようにひも解くか SGLT2阻害薬について 臨床を考えた数字の読み方	2018. 10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム
臨床から基礎までをつなぐ薬学教育をどのように構築するか 低学年での臨床から基礎薬学までをつなぐ薬学教育 ～チーム基盤型教育 (TBL)を活用する橋渡し教育～	2018. 10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム
教育講演 学会発表のhow-to	2018. 2	近畿薬剤師合同学術大会2018
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003. 4～現在	日本医療薬学会会員	
2013. 10～現在	日本医薬品情報学会会員	
2014. 11～現在	日本薬学会会員	
2003. 4～現在	日本病院薬剤師会会員	
2010. 4～現在	日本薬剤師会会員	

士生

2008.10～2013.9	日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師
2007.1～現在	日本医療薬学会認定薬剤師
2012.4～2018.4	認定実務実習指導薬剤師

専任教員の教育・研究業績

所属 機能性分子化学研究室	職名 講師	氏名 前田 秀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る	1年生に「情報リテラシー」（前期）の講義をPower Pointを使用して行った。 ワープロソフトやプレゼンテーションソフトで課題を作成した。
	2009年4月～現在に至る	1年生に「基礎化学実習」（後期）を教えた。 毎回、課題の提出をさせ、終了時に実験ノートの提出を行った。
	2015年10月～現在に至る	1年生に「無機・錯体化学」（後期）を教えた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2007年10月～2009年1月	神戸大学の非常勤講師として、1年生に化学実験を教えた。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Maeda H., Tanaka R., Nakayama H.	論文	SpringerPlus 2015, 4:218 "Inclusion complex of trihexyphenidyl with natural and modified cyclodextrins"

Maeda H., Moriwaki A., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2016, 32, 5-9. "Two sites phosphorylation of salicin with disodium diphosphonate in aqueous solution"
Maeda H., Iga Y., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2016, 86, 337-342. "Characterization of inclusion complexes of betahistine with β -cyclodextrin and evaluation of their anti-humidity properties"
Maeda H., Obata S., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2018, 91(3-4), 125-131. "Preparation and characterization of the inclusion complexes of equol with sulfobutylether- β -cyclodextrin: Their antioxidant activity and dissolution evaluation"
Maeda H., Morita K., Murokawa A., Matsuo R., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2019, 35: 55-58. "Introduction of Phosphonate Group into Kojic acid by Diphosphonate"
2. 学会発表 (平成27年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
Phosphorylation of arbutin with cyclo-triphosphate in aqueous solution	2016. 09. 26	The 9th International Symposium on Inorganic Phosphate Materials (ISIPM-9)
シクロデキストリンによるエトドラクのパッケージング評価	2017. 03. 27	日本薬学会第137年会
ヒドロキシプロリンの保湿性向上を目指したシクロ三リン酸塩によるリン酸修飾	2017. 08. 25	第26回無機リン化学討論会
シクロデキストリンによるプラバスタチンの包接能評価	2019. 09. 12	第36回シクロデキストリンシンポジウム

前田

美白成分の浸透性の向上を目指した無機リン酸化剤によるリン酸修飾	2019. 09. 20	第28回無機リン化学討論会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年10月～2018年10月	日本無機リン化学会学会誌編集委員	
2018年10月～現在に至る	日本無機リン化学会学会誌副編集委員長	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 河内 正二
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年4月～現在 2012年4月～現在 2012年4月～2020年3月 2012年4月～現在 2014年4月～現在 2015年4月～現在 2016年4月～現在 2018年4月～現在 2019年4月～現在 2020年4月～現在 2020年4月～現在	4年次の「実務実習事前教育」を分担した。 4、5年次の「海外薬学研修」の講義を分担した。 6年次の「処方解析学・演習」を分担した。 6年次の「総合薬学講座」を分担した。 3年次の「調剤学Ⅰ」を分担した。 1年次の「早期体験学習（救命救急訓練）」を分担した。 4年次の「安全管理医療」を分担した。 4年次の「処方解析学Ⅰ・Ⅱ」を分担した。 5年次の「在宅医療演習」を分担した。 2年次の「医療コミュニケーション演習」を分担した。 6年次の「感染制御学Ⅱ」を分担した。 臨床現場での経験を活かして最新の情報を提供することを心がけている。講義に使用する資料は、図表や写真画像および動画を多く取り入れ、学生が理解し、知識が定着するよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月～現在 2017年4月～現在に至る	神戸大学附属中学校と連携したがん教育プログラムの推進に参画した。 タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップに協力している。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Kawauchi S, Nakamura T, Horibe S, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Biopharm Drug Dispos. 2016; 37: 522-532. "Down-regulation of hepatic CYP3A1 expression in a rat model of indomethacin-induced small intestinal ulcers"
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata K, Rikitake Y.	論文	J Neurochem. 2018; 147: 495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and α -syntrophin in aquaporin-4 expression"
Horibe S, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochem BiophysRes Commun. 2018; 507 (1-4) :426-432. "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin resistance in human lung cancer A549 cells"
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Mar Drugs. 2019; 17 (2) :104. "Inhibitory effects of sodium alginate on hepatic steatosis in mice induced by a methionine- and choline-deficient diet"
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Exp Cell Res. 2019; 374(2): 333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels"
2. 学会発表（平成27年度に行った学会発表）		
演題名	発表年・月	学会名
アドシルカ [®] 錠の粉碎後の安定性に関する試験	2016年1月	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会
シルデナフィル製剤の粉碎後の安定性に関する検討	2016年1月	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会
インドメタシン誘発小腸粘膜障害モデルにおける小腸と肝臓でのCYPsおよびmdr1a の発現変動機序の検討	2017年3月	日本薬学会第137年会

Inhibitory effects of sodium alginate on methionine and choline-deficient diet-induced hepatic steatosis in mice.	2018年6月	10th International Symposium on Cell/Tissue Injury and Cytoprotection /Organoprotection 2018
肝性脳症患者へのリファキシミン長期投与による有効性と安全性の調査	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
心臓移植時の不整脈管理が免疫抑制剤の薬物動態に及ぼす影響	2017年8月	兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会連携1周年記念大会 分科会4 大学と臨床現場とを繋ぐ研究－臨床現場の課題解決を目指して－
III 学会等および社会における主な活動		
2005年4月～現在	日本病院薬剤師会	
2005年4月～現在	日本医療薬学会	
2009年4月～現在	日本薬学会	
2010年4月～現在	日本薬剤師会	
2017年4月～現在	登録販売者試験委員(兵庫県2017-2018、関西広域連合2019-)	

専任教員の教育・研究業績

所属	職名	氏名
薬学臨床教育・研究センター	講師	竹下 治範
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2014年～	6年生を対象に「処方解析学・演習」を担当している。『処方解析学』の講義において、学生が関節リウマチ、その他の免疫疾患の理解をしやすいように臨床的な写真及び動画をたくさん取り入れる工夫を行った。
	2014年～	6年生を対象に「処方解析学・演習」を担当している。『処方解析学』の講義において、学生が胃潰瘍をはじめ、その他の酸関疾患の理解をしやすいように臨床的な写真及び最新の知見をたくさん取り入れよりレベルの高い知識をえられるように工夫を行った。
	2014年～	4年生を対象に「実務実習事前教育」を担当している。『実務実習事前教育』においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行い特に挨拶や身だしなみ教育についても力をいれている。
	2014年～	『実務実習事前教育』において、輸液の種類と適応、輸液療法について、実薬を用いるとともに計算問題等も作成して、実務実習に先立つ知識をえられるような工夫を行った。また、医療安全の分野では学生が医療事故インシデントを楽しく理解できるようなSDGの運用に努めた。
	2014年～	6年生を対象に「総合薬学講座」を担当している。『総合薬学講座』の授業では、病院薬剤師業務や、注射薬、輸液療法について授業を行った。
	2014年～	3年生を対象に「調剤学Ⅱ」を担当している。『調剤学Ⅱ』の授業では、オムニバスでその他の教員と分担している。私の分担は、注射薬の調剤（計数・無菌調製）、代表的な輸液と適応、栄養輸液など現場の経験をもとに写真を多く取り入れ、最新のトピックスを交えて興味をもてるように工夫を行った。

	2017年～	3年生を対象に「医療倫理演習」を担当している。倫理の4原則など理論的な内容と臨床での症例を交えて、臨床経験を活かして学生が理解しやすいよう補足説明に力を入れて教えている。
	2018年～	4年生を対象に「処方解析学1」「処方解析2」を担当している。処方解析学1では関節リウマチをメインに膠原病について、また処方解析学2では、酸関連疾患を4年生に、薬の知識だけでなく、症状、臨床検査値な幅広い知識と実務実習に役立つ内容を意識して講義している。
	2019年～	「在宅医療演習」の開講の初年度をむかえるが、約3年に渡り準備を行ってきた。甲南女子大学の看護リハビリテーション学部（看護・理学）とともに、在宅医療（地域包括ケアシステム）を想定したIPW(多職種連携)の合同授業の運営に携わり、次世代の多職種のあり方について学生が学べるようサポートした。
2 作成した教科書、教材、参考書		
『コンパス 調剤学』改定第2版（南江堂，2015）	2015年3月31日	2011年には日局が第16局となった。2014年には薬事法が「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」と大幅に改正され、薬剤師法も改正された。2012年の診療報酬改定では「病棟薬剤業務実施加算」が新設された。また、2015から新薬学教育モデル・コアカリキュラムがの教育がスタートするなど薬剤師を取り巻く環境がめまぐるしく変わることに対応して改訂された。
薬学生・薬剤師のための 添付文書徹底活用術（薬事日報社，2016）	2016年10月1日	薬剤師の業務で起こり得る10の事例について、可能な限り添付文書やインタビューフォームで解決する方法を紹介し、薬学生・薬剤師が臨床現場で解決していけるようなヒントを与える構成となっている。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

三木有咲, 波多江 崇, 猪野 彩, 井上知美, 上野隼平, 笠谷君代, 近藤亜美, 坂口知子, 佐々木信子, 田内義彦, 竹下治範, 辻 華子, 中川素子, 野口 栄, 長谷川由佳, 水田恵美, 矢羽野早代, 山根雅子, 濱口常男	論文	子育て中の母親を対象とした調査にみる薬局薬剤師の職能認知と薬局薬剤師の課題, 社会薬学, 34 (1) 24-33, 2015
波多江 崇, 石田好宏, 伊東真知, 大島沙紀, 藤森可純, 森口沙里, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 濱口常男	論文	日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム比較試験のメタアナリシス, 日本地域薬局学会誌, 4(1), 2016
波多江 崇, 田中智啓, 猪野 彩, 田内義彦, 竹下治範, 辰見明俊, 濱口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果: 二重盲検プラセボ対照ランダム比較試験のメタアナリシス, 医薬品情報学, 18(4)67-72, 2017
竹下治範, 井上知美, 高瀬尚武, 波多江 崇, 室井延之, 濱口常男	論文	副腎皮質ステロイド軟膏剤の適正使用に向けたFinger-tip unitによる服薬指導の実態調査と製剤学的使用性の評価, 医薬品情報学, 18(4)48-54, 2017
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 濱口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響, 医薬品情報学, 20(2) 98-103, 2018
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
PTP包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼすフィルムの素材及び膜厚の影響	2018年3月	日本薬学会第139年会
NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の処方実態調査	2018年3月	日本薬学会第138年会

高湿度下における市販錠剤の重量と硬度に及ぼす包装素材の相違について	2019年3月	日本薬学会第139年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2001年から現在	日本薬学会会員	
2003年から現在	日本病院薬剤師会会員	
2005年から現在	日本医療薬学会会員	
2007年から現在	日本リウマチ学会会員	
2017年から現在	日本医薬品情報学会会員	
2019年から現在	日本薬局学会会員	
2008年から現在	日本薬剤師研修センター認定薬剤師 第08-30718号	
2008年から現在	日本薬剤師研修センター認定 実務実習指導薬剤師 実習指導08102621号	
2008年から現在	日本病院薬剤師会 生涯研修履修認定 第6504号	
2009年から現在	日本医療薬学会認定薬剤師 第09-0035号	
2019年から現在	日本医療薬学会認定指導薬剤師 第19-0021号	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	講師	氏名	武田 紀彦
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2015年10月～現在	3年次の「医薬品化学実習」を担当している。医薬品合成を実施し、基本的な化学反応を理解してもらうように努めている。未知検体においては様々な定性試験から得られた官能基の情報をもとに、未知検体の正しい構造へ導ける論理的思考を養うように心がけている。			
	2015年4月～現在	1年次の「薬学入門（分担）」の有機化学の部分を担当している。「これから習う有機化学」を意識しながら、NSAIDsを題材に講義をしている。薬物分子における官能基の役割や性質、どのように効果を示すのか、有機化学の視点を中心に説明するように心がけている。またスモールグループディスカッションを行うことで、薬は有機化合物であり、有機化学、物理化学、薬理学、薬剤学など様々な学問と関連していることを理解してもらうように意識している。			
	2017年9月～現在	3年次の「医薬品化学（分担）」の「代謝系に作用する医薬品、抗がん剤、感染症治療薬」を担当している。医薬品における構造式の重要性とその意味、官能基が果たす役割、薬理効果を示すその理由などを中心に説明している。薬剤名による単なる記憶ではなく、医薬品の構造式をみれば、どのような薬理作用を持ち、その投与方法、溶解度や酸性・塩基性などの物理的性質がイメージできる学問であることを意識してもらうように心がけている。			
	2017年9月～現在	3年次の「有機化学演習 B6」を担当している。これまで習った講義内容の総まとめであるが、すべての内容がつながり、より深く理解してもらう目的で、学生には適宜反応機構や解答などを板書してもらう。学生がわからない箇所、大事なポイントは特に丁寧に説明し、少しでも理解が深まるように意識しながら講義をしている。			
	2018年8月～現在	4年次の「合成化学II(分担)」を担当している。これまで習得した化学反応を活用し、与えられた分子の合理的な合成経路を提案してもらう。始めにチュートリアルで逆合成解析を説明し、各自練習問題を解いてもらう。次に複雑な分子を設定し、スモールグループディスカッションを通して様々な合成経路を議論・考慮し、最終的に合成経路を各グループ発表してもらう。各グループには質疑応答も対応できる十分な対策を練るように指導している。			
2 作成した教科書、教材、参考書					

3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4	その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動			
1. 著書・論文等			
	氏名	種別	内容
	Sato S., Takeda N., Ueda M., Miyata O.	論文	Synthesis, 2016, 48, 882-892. "Sequential [3,3]-Sigmatropic Rearrangement/Nucleophilic Arylation of <i>N</i> -(Benzoyloxy)enamides towards the Preparation of Cyclic β -Aryl- β -amino Alcohols"
	Takeda N., Ueda M., Mori N., Miyoshi T., Shimoda M., Uno Y., Kitagawa H., Emoto N., Mukai T., Miyata O.	論文	Heterocycles, 2017, 94, 750-762. "Fluorescence Quenching Induced by Sequential Addition-Aromatization of A BODIPY-Containing Dienylimine with Thiols"
	Takeda N., Futaki E., Kobori Y., Ueda M., Miyata O.	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 16342-16346. "Nucleophilic Arylation of <i>N,O</i> -Ketene Acetals with Triaryl Aluminum Reagents: Access to α -Aryl Amides through an Umpolung Process"
	Takeda N., Furuishi M., Nishijima Y., Futaki E., Ueda M., Shinada T., Miyata O.	論文	Org. Biomol. Chem. 2018, 16, 8940-8943. "Chiral isoxazolidine-mediated stereoselective umpolung α -phenylation of methyl ketones"
	Takeda N., Arisawa N., Miyamoto M., Kobori Y., Shinada T., Miyata O., Ueda M.	論文	Org. Chem. Front. 2019, 6, 3721-3724. Reagent-controlled regiodivergence in the [3,3]-sigmatropic rearrangement of <i>N</i> -(acyloxy)enamides"
2. 学会発表 (2018年度に行った学会発表)			
	演題名	発表年・月	学会名

N-イミノラクタムの求核付加-環縮小反応の開発	2019年3月	日本薬学会第139年会
アミドの極性転換反応： α 位および γ 位への求核剤導入法の開発	2019年5月	第17回次世代を担う有機化学シンポジウム
Synthesis of pyrazoles from conjugated hydrazone through acid-promoted β -protonation/nucleophilic addition/cyclization/aromatization sequence	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress (27th ISCHC)
ヒドラゾンを利用した形式的[3+2]付加環化反応によるトリアゾール合成	2019年10月	第69回日本薬学会近畿支部総会・大会
連続ヘテロ原子を有するラクタムを利用したアルキン導入を伴う連続反応の開発	2019年10月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
3. その他（講演など）		
演題名	発表年・月	学会名
N-アルコキシアミドを用いた新分子変換法	2019年7月	第5回関西薬学シンポジウム：化学系の若い力（依頼公演）
連続ヘテロ原子が関与するアミドの化学	2018年8月	第38回有機合成若手セミナー 「明日の有機合成を担う人のために」（依頼講演）
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年～現在に至る	日本薬学会会員	
2010年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2015年～現在に至る	近畿化学協会会員	
2019年～現在に至る	近畿化学協会ヘテロ原子部会幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属	職名	氏名
エクステンションセンター	講師	鎌尾 まや
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1997.4～2017.3	「衛生薬学系実習」 書き込み式実験プロトコルを導入し受講前の事前学習を促進することにより、実習の教育効果を向上させた。
	2017.4～現在に至る	「健康食品」 薬剤師向け健康食品講座の受講に加え、健康食品に関する情報検索の演習を実施し、科学的根拠に対する考え方の教育に努めた。
	2017.4～現在に至る	「実践薬学」 薬剤師を対象としたグループディスカッション形式の研修への参加を必修化し、学生と薬剤師が共に学ぶ場を提供すると共に、生涯研修の意義の啓蒙に努めた。
	2019.10～現在に至る	「総合薬学講座」 衛生薬学系分野のうち栄養と健康について、どこが重要ポイントであるかがわかるような講義を心がけた。また、近年の関連する法・制度の変更点について重点的に解説した。
2 作成した教科書、教材、参考書	1997.4～2017.3	神戸薬科大学衛生薬学系実習書
	2007.4～2017.3	書き込み式実験プロトコル（プリント）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2018.3.28	神戸薬科大学薬剤師生涯研修支援事業であるシンポジウムにおける10年間の受講者調査（日本薬学会第138年会）
	2019.2.22	神戸薬科大学における生涯研修支援事業と健康食品領域研修認定薬剤師制度（生活習慣病予防のための機能性食品開発に関する研究会）
	2019.3.22	神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者の調査（日本薬学会第139年会）
	2019.8.24	神戸薬科大学における薬剤師を対象とした在宅医療研修プログラムの受講者調査及び学部学生を対象とした多職種連携1日見学実習の試み（第4回日本薬学教育学会大会）
	2019.8.25	薬剤師の生涯研修と神戸薬科大学における生涯研修支援事業（令和元年度 神戸薬科大学同窓会支部生涯研修企画委員夏季研修会）

	2019. 10. 17	薬学における健康食品分野への取り組み ―神戸薬科大学における健康食品領域研修認定薬剤師制度について― (レギュラトリーサイエンス財団 大阪事業所職員研修会)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2018. 6	2018 (平成30) 年度 学長裁量経費教育改革プログラム採択 「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推進」
	2019. 4	2019年度 学長裁量経費教育改革プログラム採択 「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推進」 (継続)
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hirota Y, Nakagawa K, Sawada N, Okuda N, Suhara Y, Uchino Y, Kimoto T, Funahashi N, <u>Kamao M</u> , Tsugawa N, Okano T	論文	Functional characterization of the vitamin K ₂ biosynthetic enzyme UBIAD1. PLoS One, 10, e0125737, 2015 ビタミンK ₂ の生合成に関わるUBIAD1の基質特異性等、酵素化学的性質を解析した。 本人担当部分：ビタミンK濃度の測定
Tsugawa N, Uenishi K, Ishida H, Ozaki R, Takase T, Minekami T, Uchino Y, <u>Kamao M</u> , Okano T	論文	Association between vitamin D status and serum parathyroid hormone concentration and calcaneal stiffness in Japanese adolescents: sex differences in susceptibility to vitamin D deficiency. J. Bone Miner. Metab., 34(4), 464-74, 2016 日本人思春期男女を対象として血清ビタミンD代謝物濃度や骨密度について調査した。25-hydroxyvitamin D濃度は男子より女子で低い傾向を示し、男子では30%、女子では47%がビタミンD不足領域であった。また、踵骨骨密度に与える影響はカルシウム摂取量よりビタミンD摂取量の方が強く、思春期においてビタミンD摂取が骨密度の向上に有用であることを示した。また、25-hydroxyvitamin D濃度が50 nmol/Lを保つために必要なビタミンD摂取量を、男子では12μg、女子では14μgと推定した。 本人担当部分：ビタミンD濃度の測定とデータ解析

<p>Kamao M, Hirota Y, Suhara Y, Tsugawa N, Nakagawa K, Okano T, Hasegawa H</p>	<p>論文</p>	<p>Determination of Menadione by Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry Using Pseudo Multiple Reaction Monitoring. Anal. Sci., 33(7), 863-867, 2017 疑似的なmultiple reaction monitoring (MRM)を用いたLC-MS/MS法により、従来定量が困難であった側鎖を持たないビタミンKであるmenadione (MD)の定量法を確立した。本法によるMDおよび重水素化MDの検出限界は40 pgあるいは2 pgであり、日内変動、日差変動は5.4-8.2%と良好な値を示した。本法により尿中、血漿中、細胞あるいは培地抽出物中のMDの定量が可能であった。 本人担当部分：研究デザイン、測定およびデータ解析</p>
<p>Hirota Y, Nakagawa K, Isomoto K, Sakaki T, Kubodera N, Kamao M, Osakabe N, Suhara Y, Okano T.</p>	<p>論文</p>	<p>Eldecalcitol is more effective in promoting osteogenesis than alfacalcidol in Cyp27b1-knockout mice. PLoS One. 13, e0199856, 2018 ビタミンD誘導体のエルデカルシトールはアルファカルシドールよりも骨形成促進作用が強いことをビタミンD活性化酵素であるCYP27B1の遺伝子欠損マウスを用いて証明した。 本人担当部分：CYP27B1遺伝子欠損マウスの維持・管理、ビタミンD濃度測定</p>
<p>鎌尾まや</p>	<p>総説</p>	<p>ビタミンDと生殖機能 最新女性医療, 6, 83-87, 2019 ビタミンDと女性の月経異常、着床、妊娠あるいは男性の精子機能との関係について、最近の知見を概説した。</p>
<p>2. 学会発表</p>		
<p>演題名</p>	<p>発表年・月</p>	<p>学会名</p>
<p>25-Hydroxyvitamin D 1α-Hydroxylase (CYP27B1) 遺伝子欠損マウスにおける性機能の解析</p>	<p>2015. 9</p>	<p>フォーラム2015 衛生薬学・環境トキシコロジー, 神戸</p>
<p>ビタミンD受容体欠損マウスの生殖機能不全に及ぼす高カルシウム食の影響</p>	<p>2016. 6</p>	<p>日本ビタミン学会第68回大会, 富山</p>
<p>ビタミンD受容体およびビタミンD活性化酵素遺伝子欠損マウスの生殖機能低下に及ぼすカルシウム補充の影響</p>	<p>2017. 3</p>	<p>日本薬学会第137回大会, 仙台</p>
<p>若齢ラットの血中25-Hydroxyvitamin D₃濃度に対するvitamin D₃および25-hydroxyvitamin D₃の補給効果ならびにカルシウム摂取量の影響</p>	<p>2018. 6</p>	<p>日本ビタミン学会第70回大会, 高槻</p>
<p>血中25-hydroxyvitamin D₃濃度に対するカルシウム摂取量の影響ならびにvitamin D₃および25-hydroxyvitamin D₃の補給効果の検討</p>	<p>2019. 6</p>	<p>日本ビタミン学会第71回大会, 鳥取</p>

3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
いきいきと元気に暮らすための骨の健康のお話	2018.12	神戸薬科大学第15回健康サポートセミナー
健康食品って大丈夫？	2019.3	千代が丘つながりの場所～エナガの家～イベント 薬剤師に聞いてみよ
一緒に学ぼう！ 健康食品・サプリメントの正しい知識	2019.9	神戸薬科大学第20回健康サポートセミナー
III 学会等および社会における主な活動		
2019.6～	消費者庁セカンドオピニオン事業 健康食品の表示・広告に関する科学的根拠の妥当性評価における論文レビュー	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 講師	氏名 泉 安彦
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 本学薬学部学生への教育(講義)	2017年～現在	薬理学Ⅱ(2年次後期)
	2018年～現在	薬理学Ⅳ(3年次前期) (分担4コマ)
	2018年～現在	医薬品毒性学(4年次前期) (分担4コマ)
	2017年～現在	総合薬学講座(6年次後期)
(2) 本学薬学部学生への教育(実習)	2017年～現在	薬理学実習 (3年次後期)
	2017年～現在	卒業研究Ⅰ、Ⅱ(4年次、5年次)研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2018年	病態薬理生化学特論(後期)
(4) 他大学での講義	2017年11月2, 9, 30日, 12月7日	京都大学薬学部にて薬理学Ⅰの講義を実施。
	2017年12月25日	京都大学薬学部にて薬理学Ⅲの講義を実施。
	2017年12月1日	京都大学大学院薬学研究科にて基礎医療薬科学特論Ⅱの講義を実施。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Izumi Y, Kondo N, Takahashi R, Akaike A, Kume T.	論文	Reduction of Immunoreactivity against the C-terminal region of the intracellular α -synuclein by exogenous α -synuclein aggregates: possibility of conformational changes. J Parkinsons Dis. 6:569-579, 2016.
Masaki Y, Izumi Y, Matsumura A, Akaike A, Kume T.	論文	Protective effect of Nrf2-ARE activator isolated from green perilla leaves on dopaminergic neuronal loss in a Parkinson's disease model. Eur J Pharmacol. 798:26-34, 2017.
Izumi Y, Wakita S, Kanbara C, Nakai T, Akaike A, Kume T.	論文	Integrin $\alpha 5 \beta 1$ expression on dopaminergic neurons is involved in dopaminergic neurite outgrowth on striatal neurons. Sci Rep. 7:42111, 2017.
Izumi Y, Kataoka H, Inose Y, Akaike A, Koyama Y, Kume T.	論文	Neuroprotective effect of an Nrf2-ARE activator identified from a chemical library on dopaminergic neurons. Eur J Pharmacol. 818:470-479, 2018.
Yamamoto K, Izumi Y, Arifuku M, Kume T, Sawada H.	論文	α -Synuclein oligomers mediate the aberrant form of spike-induced calcium release from IP3 receptor. Sci Rep. 9:15977, 2019.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
新規Nrf2-ARE活性化物質のヘムオキシゲナーゼ-1を介した抗パーキンソン病作用	2019年6月	第135回日本薬理学会近畿部会
ミクログリアにおけるNrf2-ARE経路活性化物質による炎症性サイトカインの抑制作用とその機序の解析	2019年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019

DAT 遺伝子へのインテグリン $\alpha 5$ 遺伝子ヘテロノックイン ES 細胞の作製と神経分化効率に関する検討	2019年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019
新規 Nrf2-ARE 活性化物質のヘムオキシゲナーゼ-1 を介したドパミン神経保護作用	2019年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019
Nrf2活性化薬によるミクログリア活性化の抑制作用とその機序解析	2019年11月	第136回日本薬理学会近畿部会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年1月～現在	日本薬理学会	
2005年2月～現在	日本神経科学学会	
2008年4月～現在	日本薬学会	
2013年4月～現在	日本薬理学会 学術評議員	
2018年10月～現在	日本薬理学会 代議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 生命分析化学研究室	職名 講師	氏名 大山 浩之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
分析化学実習	2010年4月～現在	分析化学実習では、講義で学んだ原理・原則などについて実習を通してより理解を深くし、安全かつ円滑に実験を遂行するための手法や技術の指導に努めている。
分析化学II	2018年4月～現在	各種滴定の原理およびこれらの応用例を講義している。医薬品の定量分析では国家試験でよく出題されるポイントを中心に解説している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2015, 87(24), 12387-12395. "Gaussia luciferase as a genetic fusion partner with antibody fragments for sensitive immunoassay monitoring of clinical biomarkers"
Kimura H., Mikawa S., Mizuguchi C., Horie Y., Morita I., Oyama H., Ohgita T., Nishitsuji K., Takeuchi A., Lund-Katz S., Akaji K., Kobayashi N., Saito H.	論文	Sci. Rep. 2017, 7, 2988, "Immunochemical approach for monitoring of structural transition of ApoA-I upon HDL formation using novel monoclonal antibodies"

Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Banzono E., Ishii K., Kubo S., Watanabe Y., Hirai A., Kaede C., Ohta M., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-shot in vitro evolution generated an antibody fragment for testing urinary cotinine with more than 40-fold enhanced affinity"
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Morishita T., Nishimori Y., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(12), 2191-2198. "A single-step breeding generated a diagnostic anti-cortisol antibody fragment with over 30-fold enhanced affinity"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Katayama E., Narasaki M., Yokoyama A., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(7), 1062-1070. "Antibodies and engineered antibody fragments against M13 filamentous phage to facilitate phage-display-based molecular breeding"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
試験管内親和性成熟による実用抗体の創製：低分子バイオマーカーを例に	2015年11月	生物化学的測定研究会第20回学術シンポジウム
抗 Δ^9 -テトラヒドロカンナビノール一本鎖Fvフラグメントの作製と試験管内親和性成熟	2017年7月	日本法中毒学会第36年会
高親和力を保持した抗エストラジオールscFv最少変異体調製の試み	2017年9月	日本分析化学会66年会
V _H -CDR3内チロシン残基を変異標的とする抗 Δ^9 -テトラヒドロカンナビノールscFvの親和性成熟	2018年3月	日本薬学会第138年会
In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019年5月	23rd IFCC-EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
III 学会等および社会における主な活動		
2004年4月～現在	日本薬学会会員	

大山

2006年6月～現在	日本分析化学会会員
2010年4月～現在	日本臨床化学会会員
2013年4月～現在	生物化学的測定研究会会員
2017年6月～現在	日本法中毒学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 講師	氏名 細川 美香
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
薬学部学生への教育 実習	2009～2014年	神戸薬科大学薬学部4年生に実務実習事前教育 前期(薬剤学関連実習)、実務実習事前教育 後期（処方せんと調剤・鑑査）の指導を行った。
薬学部学生への教育 実習	2009年～現在に至る	薬剤学研究室（卒業研究I, II）に配属された学生に（5,6年生）、研究の指導を行い、また研究したことをまとめ、発表できるように指導した。
薬学部学生への教育 実習	2014年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部3年生に薬剤学・製剤学実習の指導を行った。
薬学部学生への教育 薬学英語入門	2013年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部3年生に薬学英語入門の指導を行った。
薬学部学生への教育 薬物動態学 I	2019年～現在に至る	神戸薬科大学薬学部3年生に薬物動態学 I の指導を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
学会発表	2017年9月	第2回日本薬学教育学会大会にて、以下の発表を行った。 演題名「神戸薬科大学の薬学英語入門での学力向上に導くジグソー法の検討—コーディングによる質的分析から学生の意識を可視化する—」
学会発表	2018年9月	第3回日本薬学教育学会大会にて、以下の発表を行った。 演題名「薬学英語入門」におけるジグソー法を用いた協調学習の効果的な予習方法の検討—ジグソー活動での深い学びを目指して—」
4 その他教育活動上特記すべき事項		

	2017年	神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムへ参画し、プログラム：ジグソー法を活用した「薬学英語入門Ⅰ、Ⅱ」の授業改善を代表者として実施した。
Ⅱ 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tanaka S, Hosokawa M, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2015, 38, 1272-1279. "Effects of decitabine on invasion and exosomal expression of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells"
Hosokawa M, Saito M, Nakano A, Iwashita S, Ishizaka A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Oncol. Lett. 2015, 10, 761-767. "Acquired resistance to decitabine and cross-resistance to gemcitabine to gemcitabine during the long-term treatment of human HCT116 colorectal cancer cells with decitabine"
Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40, 1320-1325. "Effects of zebularine on invasion activity and intracellular expression level of let-7b in colorectal cancer cells"
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40, 2199-2204. "Different schedule-dependent effects of epigenetic modifiers on cytotoxicity by anticancer drugs in colorectal cancer cells"
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2019, 509, 249-254. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells intrinsic resistance to decitabine"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
エピジェネティック修飾薬デシタピンはオキサリプラチン併用により相乗効果を示す—デシタピンに自然耐性を示す大腸がん細胞での相乗効果の機構解明—	2018年10月	第68回 日本薬学会近畿支部総会・大会
DNAメチル基転移酵素阻害剤デシタピンに対する耐性を改善する物質の探索	2019年3月	日本薬学会 第139年会

イオン交換基と疎水基を併せ持つ逆相系カラムによるヌクレオチドの分析：移動相条件による比較	2019年3月	日本薬学会 第139年会
逆相HPLCにおける親水性化合物の分析条件の最適化	2019年5月	日本薬剤学学会 第34回年会
Optimization of analytical conditions for hydrophilic compounds by reversed-phase HPLC	2019年7月	The 3rd Workshop for Korea-Japan Young Scientists on Pharmaceutics
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2004年～現在に至る	日本薬学会会員	
2005年～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2007年～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2008年～現在に至る	日本薬物動態学会会員	
2016年～現在に至る	日本薬学教育学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 講師	氏名 増田 有紀
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
微生物学実習	2010年10月～現在	学部2年次後期に、微生物実習を行っている。学生の理解度を向上させるため、少人数でのディスカッションを実施している。また、操作（特に無菌操作）の一つ一つの意味について理解を深めるために、実習開始時に説明に加えてデモンストレーションを行っている。
情報リテラシー	2014年4月～現在	学部1年次前期に、情報リテラシーの講義の一部として、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの作成について指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masuda Y., Ohta Y., Morita Y., Nakayama Y., Miyake A., Itoh N., Konishi M.	論文	Biol. Pharm. Bull., 2015, 38, 687-693. "Expression of Fgf23 in activated dendritic cells and macrophages in response to immunological stimuli in mice."
Masuda Y., Nawa D., Nakayama Y., Konishi M., Nanba H.	論文	J. Leukoc. Biol., 2015, 98, 1015-1025. "Soluble β -glucan from <i>Grifola frondosa</i> induces tumor regression in synergy with TLR9 agonist via dendritic cell-mediated immunity."

Masuda Y, Nakayama Y, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	PLoS One., 2017, 12(3):e0173621. "Antitumor activity of orally administered maitake α -glucan by stimulating antitumor immune response in murine tumor."
Nakayama Y., Masuda Y., Ohta H, Tanaka T, Washida M, Nabeshima YI, Miyake A, Itoh N, Konishi M.	論文	Sci. Rep., 2017, 23:7(1):330. "Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus."
Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	Int. Immunopharmacol., 2019, 67:408-416. "Maturation of Dendritic Cells by Maitake α -glucan Enhances Anti-Cancer Effect of Dendritic Cell Vaccination."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
分泌因子Neudesin のがん免疫抑制作用について	2019年3月	日本薬学会 第139年会
分泌因子Neudesinのがん免疫抑制作用について	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会
III 学会等および社会における主な活動		
2003年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	日本免疫学会会員	
2010年～現在に至る	日本分子生物学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 講師	氏名 堀部 紗世
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
4年生に対する実務事前実習	2013年10月1日～	本学4次生を対象に、事前実務実習を指導している。疑義照会では、現場で働いている先生方とロールプレイおよびグループディスカッションを行い、実際に疑義照会する時の注意点や配慮および薬剤師としての倫理について指導している。
卒業研究	2013年10月1日～	本学5年生および6年生を対象に、卒業研究を指導している。卒業研究を通して、問題を提議しその問題を自己解決する力を養いように指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Horibe S, Matsuda M, Tanahashi T, Inoue J, Kawauchi S, Mizuno S, Ueno M, Takahashi K, Maeda Y, Maegouchi T, Murakami Y, Yumoto R, Nagai J, Takano M.	論文	Life Sciences (2015), Vol. 124, p31-40 "Cisplatin resistance in human lung cancer is linked with dysregulation of cell cycle associated proteins."

Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	International journal of medical sciences (2016), Vol. 13, p653-63 "Preventative Effects of Sodium Alginate on Indomethacin-induced Small-intestinal Injury in Mice."
Kawauchi S, Nakamura T, Horibe S, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Biopharmaceutics & drug disposition (2016), Vol. 37, p522-532 "Down-regulation of hepatic CYP3A1 expression in a rat model of indomethacin-induced small intestinal ulcers."
Horibe S, Kawauchi S, Yasuike S, Mizuno S, Kato I, Rikitake Y.	論文	Journal of Biomedicine (2017), Vol. 2, p101-108 "Anti-inflammatory Effect of JBP485 on Dextran Sulfate Sodium-induced Colitis in Mice."
Terao Y, Fujita H, Horibe S, Sato J, Minami S, Kobayashi M, Matsuoka I, Sasaki N, Satomi-Kobayashi S, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Biochemical and biophysical research communications (2017), Vol. 486, p811-816 "Interaction of FAM5C with UDP-glucose:glycoprotein glucosyltransferase 1 (UGGT1): Implication of N-glycosylation in FAM5C secretion."
Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	BMC Cancer (2018), 18, 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	J Neurochemistry (2018), Vol. 147, p495-513 "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and α -syntrophin in aquaporin-4 expression."
Horibe S*, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochemical and biophysical research communications. (2018) Vol. 507, p426-432 "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin-resistance in human lung cancer A549 cells. "
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Experimental Cell Research (2019), Vol. 374(2), p333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels."
2. 学会発表 (平成30年度に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
ミクログリア活性化における脳血管内皮細胞老化の役割	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会

アルツハイマー病モデルマウスの成熟期における認知機能に対する血管内皮細胞老化の影響	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会
シスプラチン耐性獲得における電子伝達系複合体サブユニットタンパク質をコードするミトコンドリアDNA変異の役割	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会
シスプラチン耐性獲得機構におけるミトコンドリアDNA変異の役割	2019年12月	第42回日本分子生物学会年会
脳血管内皮細胞老化からのSASPを介したミクログリアの活性化	2019年12月	第42回日本分子生物学会年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2000年4月～現在に至る	日本薬学会会員	
2001年1月～現在に至る	医療薬学会会員	
2008年1月～現在に至る	癌学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	講師	氏名	森田 いずみ
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1995. 4. 1～現在に至る	『分析化学系実習』を担当している。全体講義で器具の扱い方を見せながら説明を行うことはもちろんのこと、特に注意すべき点に関しては班ごとの少人数にわけて、操作を実際に見せてから実施させるなどの工夫を心がけている。 『卒業研究』を担当している。長い時間を費やす卒業研究において得られる様々な経験を通し、社会に出てからも自ら実践できるような学習の機会となるよう常に心がけている。		
2	作成した教科書、教材、参考書		特になし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		特になし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Morishita T., Fukushima S., Nishimori Y., Niwa T., Kobayashi N.		論文	Biol. Pharm. Bull., 2017, 40(12), 2191-2198. "A Single-Step "Breeding" Generated a Diagnostic Anti-cortisol Antibody Fragment with Over 30-Fold Enhanced Affinity."		

Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-Shot in Vitro Evolution Generated an Antibody Fragment for Testing Urinary Cotinine with More Than 40-Fold Enhanced Affinity"
I. Morita, H. Oyama, M. Yasuo, K. Matsuda, K. Katagi, A. Ito, H. Tatsuda, H. Tanaka, S. Morimoto, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(2), 174-181. "Antibody Fragments for On-Site Testing of Cannabinoids Generated via in Vitro Affinity Maturation"
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, E. Katayama, M. Fujita, M. Narasaki, A. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 47(7), 1062-1070. "Antibodies and Engineered Antibody Fragments against M13 Filamentous Phage to Facilitate Phage-Display-Based Molecular Breeding."
I. Morita, H. Oyama, Y. Kanda, M. Yasuo, A. Ito, M. Toyota, Y. Hayashi, T. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(1), 123-131. "Enantioselective Monoclonal Antibodies for Detecting Ketamine to Crack Down on Illicit Use"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
In vitro affinity maturation of a single-chain Fv fragment for on-site testing of cannabinoids	2017.6	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
試験管内親和性成熟を目的とする抗シロシビン一本鎖Fvフラグメントの作製	2019.7	日本法中毒学会第38年会
幻覚性キノコ成分のオンサイト分析を目的とするシロシンシリル化体に対する新規モノクローナル抗体の作製	2019.9	日本法中毒学会第37年会
Generation of monoclonal antibodies for on-site analysis of psilocin and psilocybin in hallucinogenic mushrooms	2019.5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019.5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine

森田

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1995年4月～現在	日本薬学会会員
2003年9月～現在	日本分析化学会会員
2013年4月～現在	生物化学測定研究会会員
2017年6月～現在	日本法中毒学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬学臨床教育・研究センター	職名 講師	氏名 富田淑美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
富田 淑美	論文	ファルマシア 2017, 53(4), 313-316.
富田 淑美	論文	ファルマシア 2018, 54(10), 976-977.

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
DPC対象病院の院外処方箋を対象とした患者の後発医薬品に対する意識調査	2016年・3月	日本薬学会第136年会
当薬局における疑義照会実施状況の分析とその評価	2016年・11月	第49回東海薬剤師学術大会
薬剤師が在宅療養支援に介入を続けることにより薬物治療が適正化された1症例	2017年・10月	第50回日本薬剤師会学術大会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
化学的考察から患者のために薬剤師だからできること	2017年・9月	第6回日本くすりと糖尿病学会学術集会
薬局での有機化学を活かした働き方	2018年・10月	臨床・基礎薬学連携シンポジウム
現場で生きる考える力	2018年・11月	第47回徳島大学薬学部卒後教育公開講座
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2013年9月～2020年3月	静岡県災害薬事コーディネーター	
2004年～	日本薬学会	
2012年～	日本薬剤師会	
2016年4月～	日本病院薬剤師会	
2014年4月～	日本医療薬学会	
2011年10月～	国際薬剤師・薬学連合（FIP）	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療統計学研究室	職名	講師	氏名	阿部 興
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2018年9月26日	「ベーシックトレーニング」：名古屋大学において、R言語を用いた主成分分析、クラスターリング、生存時間分析等の演習		
		2019年9月18日～19日	「ベーシックトレーニング」：名古屋大学において、R言語を用いた基本的なデータ操作、プロットの作成、主成分分析、クラスターリング、生存時間分析、回帰分析等の演習		
		2019年11月22日	「自然環境と人間」：名古屋大学において、医学研究と統計の関わりを最新の研究事例とともに紹介する講義を行った		
2 作成した教科書、教材、参考書		2018年9月26日	「ベーシックトレーニング」に使用する演習用プログラムの作成を行った。		
		2019年9月18日～19日	「ベーシックトレーニング」に使用する演習用プログラムの作成を行った。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

Abe Ko, Hirayama Masaaki, Ohno Kinji, Shimamura Teppei	論文	ENIGMA: an enterotype-like unigram mixture model for microbial association analysis. BMC genomics 20(Suppl 2) 191 2019年4月
Abe Ko, Hirayama Masaaki, Ohno Kinji, Shimamura Teppei	論文	A latent allocation model for the analysis of microbial composition and disease. BMC BIOINFORMATICS 19 2018年12月31日
阿部 興, 鎌倉 稔成	論文	窓打ち切りされた観測データの交代再生イベントのモデルとパラメータの推定方法および推定量の比較. 計算機統計学 31(1) 1 - 15 2018年
阿部 興, 作村 建紀, 鎌倉 稔成	論文	項目反応理論を用いた野球選手の能力評価指標の提案. 統計数理 65(2) 235 - 249 2017年12月
阿部 興, 鎌倉 稔成	論文	窓打ち切り状況下での交代再生過程のパラメータの最尤推定. 計算機統計学 29(2) 133 - 146 2016年
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
拡張された非負値行列因子分解によるオミクスデータの解析	2019年・9月	2019年度統計関連学会連合大会
補助情報を用いた非負値行列因子分解による腸内細菌叢の分析	2019年・6月	日本計算機統計学会第33回大会
トピックモデルによる腸内細菌叢とパーキンソン病の関連分析	2018年・9月	2018年度統計関連学会連合大会
混合分布を用いたセール施策への反応の分析	2017年・11月	日本計算機統計学会シンポジウム
Comparison of the estimators of the parameters of alternating renewal process under the window censored	2016年・12月	Australian Statistical Conference 2016
III 学会等および社会における主な活動		

専任教員の教育・研究業績

所属 医薬細胞生物学研究室	職名 助教	氏名 山田泰之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年9月1日～現在に至る 2018年4月1日～現在に至る	本学2年生を対象に「細胞生物学実習」にて、顕微鏡の使用方法や、動物・植物の組織の観察、マウスの解剖、重要生薬の観察や鑑定についての指導を行っている。 本学1～3年生を対象の選択科目「アクティブ・ラボ」にて、学生に持参してもらった植物を用いた組織培養実験や動物細胞の継代培養と蛍光顕微鏡によるGFPの観察実験などについて、指導を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hori K., Yamada Y., Purwanto R., Minakuchi Y., Toyoda A., Hirakawa H., Sato F.	論文	Plant & Cell Physiology, 2018, 59, 222-233. doi: 10.1093/pcp/pcx210. "Mining of the Uncharacterized Cytochrome P450 Genes Involved in Alkaloid Biosynthesis in California Poppy Using a Draft Genome Sequence"

Yamada Y., Shimada T., Motomura Y., Sato F	論文	PLoS One 2017, 12, e0186953 “Modulation of benzyloisoquinoline alkaloid biosynthesis by heterologous expression of CjWRKY1 in Eschscholzia californica cells.”
Yamada Y., Yoshimoto T., Yoshida T.S., Sato F.	論文	Frontiers in Plant Science 2016, 7, 1352 “Characterization of the Promoter Region of Biosynthetic Enzyme Genes Involved in Berberine Biosynthesis in Coptis japonica”
Yamada Y., Sato F.	論文	Scientific Report 2016, 6, 31988 “Tyrosine phosphorylation and protein degradation control the transcriptional activity of WRKY involved in benzyloisoquinoline alkaloid biosynthesis”
Yamada Y., Motomura Y., Sato F.	論文	Plant & Cell Physiology 2015, 56, 1019-1030 “CjbHLH1 homologs regulate sanguinarine biosynthesis in Eschscholzia californica cells”
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ケシ科ハナビシソウのドラフトゲノムデータを利用したイソキノリンアルカロイド生合成関連遺伝子のマイニング -ドラフトゲノムデータを利用した生合成関連遺伝子の探索-	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会 神戸
ハナビシソウドラフトゲノムデータを利用したイソキノリンアルカロイド生合成関連遺伝子のマイニング	2019年3月	日本農芸化学会2019年度大会 東京
オウレンのイソキノリンアルカロイド生合成におけるERF転写因子の機能解析	2018年10月	日本植物化学調節学会第53回大会 札幌
ハナビシソウドラフトゲノムデータを利用したアルカロイド生合成関連遺伝子のマイニング	2018年9月	日本生薬学会第65回年会 広島
オウレンのイソキノリンアルカロイド生合成系を制御するAP2/ERF型転写因子	2018年8月	第36回日本植物細胞分子生物学会 金沢
3. その他		

招待講演・演題名	発表年・月	学会名
輸送工学を用いた効率的な有用アルカロイド生産系開発への挑戦	2019年7月	第14回トランスポーター研究会年会 北海道
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2008年5月～現在に至る	日本植物細胞分子生物学会会員	
2008年11月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2010年1月～現在に至る	日本植物生理学会会員	
2018年7月～現在に至る	日本生薬学会会員	
2019年2月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	助教	氏名	山崎 俊栄
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年～現在	物理化学実習（2年次後期）（分担） 生体膜モデル粒子への薬物の分配係数の決定を担当		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Nakamura M., Yamasaki T., Ueno M., Shibata S., Ozawa Y., Kamada T., Nakanishi I., Yamada KI., Aoki I., Matsumoto KI.		論文	<i>Free Radic. Biol. Med.</i> , 143: 412-21 (2019) Radiation-induced redox alteration in the mouse brain.		
Kannaka K., Sano K., Hagimori M., Yamasaki T., Munekane M., Mukai T.		論文	<i>Bioorg. Med. Chem.</i> , 27(16): 3613-8 (2019) Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs.		

Yamasaki T., Buric D., Chacon C., Gérard A., Braguer D., Marque S. R. A., Carré M., Brémond P.	論文	<i>Bioorg. Med. Chem.</i> , 27(10): 1942-51 (2019) Chemical modifications of imidazole-containing alkoxyamines increase C-ON bond homolysis rate: effects on their cytotoxic properties in glioblastoma cells.
Sano K., Bao L., Suzuno N., Kannaka K., Yamasaki T., Munekane M., Mukai T.	論文	<i>ACS Appl. Polym. Mater.</i> , 1(5): 953-58 (2019) Development of Cancer-Targeted SPECT/Fluorescence Dual Imaging Probe Based on Polyoxazoline.
Yamamoto K., Yasui H., Bo T., Yamamori T., Hiraoka W., Yamasaki T., Yamada K., Inanami O.	論文	<i>Appl. Magn. Reson.</i> , 49: 837-51 (2018) Genotoxic Responses of Mitochondrial Oxygen Consumption Rate and Mitochondrial Semiquinone Radicals in Tumor Cells.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
生体内の脂質アルキルラジカルを検出する放射性ヨウ素標識ニトロキシドプローブの開発	2019年11月	第3回日本核医学会分科会放射性薬品科学研究会／第19回放射性医薬品・画像診断薬研究会
生体内脂質アルキルラジカル検出に向けた放射性ヨウ素標識ニトロキシドの開発	2019年11月	第59回日本核医学会学術総会
レドックスバランスの崩壊によるがん治療を指向したラジカル放出剤の開発	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部大会
Synthesis and evaluation of radioiodinated nitroxide probe for lipid alkyl radicals	2019年 9月	第78回日本癌学会学術総会
[4+2]環化付加Diels-Alder反応を用いたリポソームの薬物放出制御法の開発	2019年 3月	日本薬学会第139年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年 ～ 現在	日本薬学会会員	
2007年 ～ 現在	電子スピンサイエンス学会会員	
2014年 ～ 現在	International EPR Society会員	

山崎

2018年～現在	日本核医学会会員
2019年～現在	日本癌学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬化学研究室	職名 助教	氏名 高木 晃
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年10月-現在に至る 2017年4月-現在に至る	薬化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を行っている。実験で行うことを薬剤師国家試験と関連付けすることで実験にも興味を持てるように工夫している。 有機化学実習(学部2年生)を分担している。実習時間の終わりにディスカッションを行い、実習の目的と実際に行った手順の理解を促進できるように努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Ikawa, R. Yamamoto, A. Takagi, T. Ito, K. Shimizu, M. Goto, Y. Hamashima, S. Akai	論文	Adv. Synth. Catal. 2015, 67, 2287-2300. "2-[(Neopentyl glycolato)boryl]phenyl Triflates and Halides for Fluoride Ion-Mediated Generation of Functionalized Benzynes"
T. Ikawa, S. Masuda, A. Takagi, S. Akai	論文	Chem. Sci. 2016, 7, 5206-5211. "1,3- and 1,4-Benzdiyne equivalents for regioselective synthesis of polycyclic heterocycles"

T. Ikawa, Y. Sumii, S. Masuda, D. Wang, Y. Emi, A. Takagi, S. Akai	論文	Snlett 2018, 29, 530-536. "Synthesis of Optically Active 2,3-Disubstituted Indoline Derivatives through Cycloaddition Reactions between Benzynes and α, β -Unsaturated γ -Aminobutyronitriles"
H. Tsujino, T. Uno, T. Yamashita, M. Katsuda, K. Takada, T. Saiki, S. Maeda, A. Takagi, S. Masuda, Y. Kawano, K. Meguro, S. Akai	論文	Bioorg. Med. Chem. Lett. 2019, 29, 126607. "Correlation of indoleamine-2,3-dioxygenase 1 inhibitory activity of 4,6-disubstituted indazole derivatives and their heme binding affinity"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Theoretical analysis of regioselectivities in cycloaddition reactions of 3-silyl- and 3-borylbenzynes	2015年11月	SKO symposium
反応性官能基を有するベンザインの効率的発生法	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会
小胞体ストレス応答を制御する化合物群の創製研究	2019年6月	第25回癌治療増感研究会
Development of Drugs for Modulating Endoplasmic Reticulum Stress Response	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
小胞体ストレス応答を標的とする創薬化学研究	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
III 学会等および社会における主な活動		
2009年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2017年～現在に至る	国際癌治療増感研究協会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 医薬細胞生物学研究室	職名 助教	氏名 池田義人
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
細胞生物学実習	2019年4月1日～現在に至る	本学2年生を対象に、顕微鏡の使用方法や、動物・植物の組織の観察、マウスの解剖、重要生薬の観察や鑑定についての指導を行っている。
アクティブ・ラボ	2019年4月1日～現在に至る	本学1～3年生の一部対象の選択科目にて、動物培養細胞への外来蛍光タンパク質遺伝子導入実験、共焦点蛍光顕微鏡を用いた蛍光タンパク質の発現評価に関する実験の指導を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし
4 その他教育活動上特記すべき事項	2019年1月1日～現在に至る	日本医療薬学会 認定薬剤師(認定番号 19-0093)
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
T. Suzuki , Y. Wakao, T. Watanabe, M. Hori, Y. Ikeda, H. Tsuchiya, K. Kogure, M. Harada-Shiba, M. Fujimuro, H. Kamiya	論文	Effects of plasmid-specific histone acetyltransferase recruitment system in vivo. : Nucleosides Nucleotides Nucleic Acids, 38 (12), 942-949 (2019)
Y. Ikeda, SY. Morita, R. Hatano, T. Tsuji, T. Terada	論文	Enhancing effect of taurohyodeoxycholate on ABCB4-mediated phospholipid efflux. : Biochim. Biophys. Acta. Mol. Cell Biol. Lipids, 1864 (10), 1495-1502 (2019)

T. Tsuji, SY. Morita, Y. Ikeda, T. Terada	論文	Enzymatic fluorometric assays for quantifying all major phospholipid classes in cells and intracellular organelles. : Sci. Rep., 9 (1), 8607 (2019)
SY. Morita, Y. Ikeda, T. Tsuji, T. Terada	論文	Molecular mechanisms for protection of hepatocytes against bile salt cytotoxicity. : Chem. Pharm. Bull., 67 (4), 333-340 (2019)
S. Noda, T. Yoshida, D. Hira, R. Murai, K. Tomita, T. Tsuru, S. Kageyama, A. Kawauchi, Y. Ikeda, SY. Morita, T. Terada	論文	Exploratory investigation of target pazopanib concentration range for patients with renal cell carcinoma. : Clin. Genitourin. Cancer, 17 (2), e306-e313 (2019)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
カンデサルタンシレキセチルの併用はパクリタキセルールポプラチン併用療法施行患者の好中球減少リスクを増加させる	2019年3月	日本臨床腫瘍薬学会
酵素蛍光法を用いたオルガネラ膜における主要リン脂質クラスの定量分析	2019年5月	日本膜学会
ABCB4による胆汁中リン脂質排出を促進する胆汁酸の探索とメカニズムの解明	2019年5月	日本薬剤学会
ABCB4リン脂質排出を促進する分子の探索とメカニズムの解明	2018年5月	日本膜学会
タウリン抱合型ヒオデオキシコール酸によるABCB4を介したリン脂質排出の促進	2018年3月	日本薬学会
III 学会等および社会における主な活動		
2010年4月～現在に至る	日本薬学会会員	
2010年4月～現在に至る	日本生化学会会員	
2014年4月～現在に至る	日本脂質生化学会会員	
2014年4月～現在に至る	日本医療薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	助教	氏名	安井基博
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2019年4月～現在	3年次の「医薬品化学実習」を担当している。医薬品合成を通して有機合成化学の魅力を伝えると共に、これまでの学習内容をより深く理解できるよう、学生との議論に重点を置いている。未知化合物の構造を定性試験から解明する「未知検体実験」では有機化学の体系的理解と思考力の向上が図れるよう意識している。		
		2019年4月～現在	薬品化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を担当している。日々の実験の考察と議論において、薬剤師国家試験に必要な知識や論理的思考力の養成を図っている。		
2	作成した教科書、教材、参考書				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Nakamura, H.; Tsukano, C.; Yoshida, T.; Yasui, M.; Yokouchi, S.; Kobayashi, Y.; Igarashi, M.; Takemoto, Y.		論文	J. Am. Chem. Soc. 141, 8527-8540 (2019). "Total Synthesis of Caprazamycin A: Practical and Scalable Synthesis of syn- β -Hydroxyamino Acids and Introduction of a Fatty Acid Side Chain to 1,4-Diazepanone"		

Konishi, K.; Takeda, N.; Yasui, M.; Matsuzaki, H.; Miyata, O.; Ueda, M.	論文	J. Org. Chem. 84, 14320-14329 (2019). "Copper-Catalyzed Cycloisomerization of Cyclopropenylimine for Synthesis of Pyrroles"
Yasui, M.; Ota, R.; Tsukano, C.; Takemoto, Y.	論文	Org. Lett., 20, 7656-7660 (2018) "Synthesis of cis/all-cis-substituted cyclopropanes through stereocontrolled metalation and Pd-catalyzed Negishi coupling"
Yasui, M.; Ota, R.; Tsukano, C.*; Takemoto, Y.	論文	Nat. Commun., 8, 674 (2017) "Total synthesis of avenaol"
Nakamura, H.; Tsukano, C.; Yasui, M.; Yokouchi, S.; Igarashi, M.; Takemoto, Y.	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 54, 3136-3139 (2015) "Total Synthesis of (-)-Caprazamycin A"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Copper-Catalyzed Synthesis of Multisubstituted Pyrroles by Cycloisomerization of Cyclopropenyl Oxime Ether	2019年11月	International Joint Symposium on Synthetic Organic Chemistry
連続ヘテロ原子を有するラクタムを利用したアルキン導入を伴う連続反応の開発	2019年10月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
アルキンを有するヒドラジドを用いた縮環型ピラゾロン骨格構築法の開発	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
Copper-Catalyzed Synthesis of Multisubstituted Pyrroles by Cycloisomerization of Cyclopropenyl Oxime Ethers	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
N-イミノラクタムの求核付加-環縮小反応を利用したピロリジン合成法の開発	2019年8月	39回有機合成若手セミナー
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
Avenaolの全合成と不斉 γ -アルコキシブテノリド合成法の開発	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会 (受賞講演)

安井

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2014年～現在に至る	日本薬学会会員
2016年～現在に至る	有機合成化学協会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 衛生化学研究室	職名 助教	氏名 北條 寛典
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 衛生薬学実習	2018年4月～	各実習項目ごとに教員と学生でディスカッションを行い、思考力の向上につながるように努めている。また、身近なものを例に挙げ学生自身が深く考えるきっかけを与えるように工夫を凝らしている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Razali N., Horikawa I., Hohjoh H., Yoshikawa C., Hasegawa H.	論文	BPB Reports, 2019, 2(4), 39-47. "Prostaglandin-Modulated Interaction of Thymic Progenitor Cells with Blood Vessels during Estradiol-Induced Thymic Involution"
Iwasaki R., Tsuge K., Kishimoto K., Hayashi Y., Iwaana T., Hohjoh H., Inazumi T., Kawahara A., Tsuchiya S., Sugimoto Y.	論文	Sci. Rep., 2019, 9(1), 7650. doi: 10.1038/s41598-019-44095-5. "Essential Role of Prostaglandin E2 and the EP3 Receptor in Lymphatic Vessel Development During Zebrafish Embryogenesis"

Tsuchiya H., Hohjoh H., Fujiwara Y., Sugimoto Y., Koshimizu T.A.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun., 2016, 470(4), 804-810. "Prostaglandin D2 Elicits the Reversible Neurite Retraction in Hypothalamic Cell Line"
Kawahara K., Hohjoh H., Inazumi T., Tsuchiya S., Sugimoto Y.	論文	Biochim. Biophys. Acta., 2015, 1851(4), 414-421. "Prostaglandin E2-induced Inflammation: Relevance of Prostaglandin E Receptors"
北條 寛典、土屋 創健、杉本 幸彦	著書	疾患モデルの作成と利用：脂質代謝異常と関連疾患・下巻 2015, 174-186 第3節プロスタノイド
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
末梢神経再生におけるT細胞の役割の解析 - T細胞は末梢神経再生を促進する -	2019年・10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
T細胞による軸索再生促進機構の解析	2019年・9月	第92回日本生化学会大会
妊娠初期のDEHP曝露が腫免疫能に与える影響	2019年・8月	フォーラム2019衛生薬学・環境トキシコロジー
T cells facilitate peripheral nerve regeneration	2019年・7月	NEURO2019
末梢神経再生におけるT細胞機能の解析	2019年・3月	日本薬学会第139年会
III 学会等および社会における主な活動		
2012年～	日本生化学会会員	
2015年～	日本脂質生化学会会員	
2017年～	日本薬理学会会員	
2018年～	日本薬学会会員	
2019年～	日本神経科学学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	助教	氏名	田中 晶子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）				
	アクティブラボ	2018年4月～	3年次生を対象に薬物動態関連の研究を行い、研究の面白さと研究室の雰囲気を感じてもらうように工夫している。		
	製剤学・薬剤学実習	2018年4月～	3年次生後期の薬剤学・製剤学実習において、製剤試験法についての指導を行っている。		
	卒業研究	2018年4月～	製剤学研究室に配属された4、5、6年次生に対し、卒業研究の指導を行っている。卒業研究を通して、問題解決能力・プレゼンテーション能力等を養うことができるように指導している。		
2	作成した教科書、教材、参考書 特になし				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし				
4	その他教育活動上特記すべき事項 特になし				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	

Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Akifumi Matsushita, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	PLoS One, 2016, 11 (9), e0159150. Nasal absorption of macromolecules from powder formulations and effects of sodium carboxymethyl cellulose on their absorption.
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Yuki Enomura, Tomoki Hori, Rina Shimomura, Chiaki Maeda, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Biol. Pharm. Bull., 2017, 40(2), 212-219. "Nasal Drug Absorption from Powder Formulations: Effect of Fluid Volume Changes on the Mucosal Surface."
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Manami Tomisaki, Mayuko Kawakami, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2017, 96, 284-289. "Nasal drug absorption from powder formulations: The effect of three types of hydroxypropyl cellulose (HPC)"
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Mari Arai, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 1105-1111. "Delivery of Oxytocin to the Brain for the Treatment of Autism Spectrum Disorder by Nasal Application"
田中晶子、坂根稔康	著書	肥満症に対する新規治療システム: 鼻腔内投与による中分子ペプチドの脳内送達 180-187 (2019) CMC出版.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
生理活性ペプチドの鼻腔内投与による脳への送達と中枢疾患治療への応用	2019年3月	日本薬学会第139年会
鼻腔内投与後の脳への薬物移行機構の解析	2019年5月	日本薬剤学会第34年会
鼻腔より直接脳内に移行した薬物の脳内動態	2019年7月	第35回日本DDS学会学術集会
鼻腔内投与されたOxytocinの脳内移行特性	2019年7月	第35回日本DDS学会学術集会
ステロイド軟膏と保湿軟膏剤との併用: 塗布の順番とステロイドの経皮吸収性との関係	2019年7月	医療薬学フォーラム2019
III 学会等および社会における主な活動		

田中 晶子

2010年10月～現在に至る	日本薬学会会員
2011年3月～現在に至る	日本薬剤学会会員
2015年3月～現在に至る	日本DDS学会会員
2017年3月～現在に至る	日本薬物動態学会会員
2019年4月～現在に至る	日本医療薬学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 特任助教	氏名 田中 章太
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年4月～現在 2016年10月～現在	薬剤学研究室に配属された学生（4,5,6年生）に、卒業研究の指導を行って3年生次の薬剤学・製剤学実習を分担している。
2 作成した教科書、教材、参考書 特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tanaka S, Hosokawa M, Yonezawa T, Hayashi W, Ueda K, Iwakawa S	論文	Biol. Pharm. Bull., 38 (3): 435-440, 2015. "Induction of epithelial-mesenchymal transition and down-regulation of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells."
Tanaka S, Hosokawa M, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull., 38 (9): 1272-1279, 2015. "Effects of decitabine on invasion and exosomal expression of miR-200c and miR-141 in oxaliplatin-resistant colorectal cancer cells."
Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull., 40 (9): 1320-1325, 2017. "Effects of Zebularine on Invasion Activity and Intracellular Expression Level of let-7b in Colorectal Cancer Cells"

Ueda K, Masuda A, Fukuda M, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S.	論文	Drug Metab. Pharmacokinet., 32 (6): 301-310, 2017. "Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells."
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun., 509 (1): 249-254, 2019. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells intrinsic resistance to decitabine."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヒト大腸がん細胞におけるオキサリプラチン感受性を反映するexosome中microRNAの探索	2019年5月	日本薬剤学会 第34回年会
ヒト大腸がん細胞におけるオキサリプラチン感受性を決定するmicroRNAの探索	2019年3月	日本薬学会 第139年会
オキサリプラチン耐性ヒト大腸がん細胞における幹細胞マーカーmRNAと幹細胞特異的microRNAの発現量比較	2018年3月	日本薬学会 第138年会
オキサリプラチン耐性を示すヒト大腸がん細胞株HCT116細胞の白金製剤感受性に及ぼすヒストン脱アセチル化酵素阻害薬の影響	2017年10月	第66回 日本薬学会近畿支部総会・大会
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞の遊走能、浸潤能に及ぼすオキサリプラチン長期処置の影響	2017年5月	日本薬剤学会 第32回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2012年～現在に至る	日本薬学会会員	
2012年～現在に至る	日本薬物動態学会会員	
2016年～現在に至る	日本薬剤学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	特任助教	氏名	宗兼 将之
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 物理化学系実習（2年次後期）		2018年4月～	化合物の加水分解反応速度、表面張力の測定に関する実習等を担当。		
(2) アクティブラボ（1～3年次通年）		2018年4月～	アクティブラボの一部（物理化学関連の実験指導）を担当。		
(3) 卒業研究（4～6年次通年）		2018年4月～	研究室に配属された学生の卒業研究指導を実施。		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項			該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Kannaka K., Sano K., Hagimori M., Yamasaki T., Munekane M., Mukai T.		論文		Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs, <i>Bioorg. Med. Chem.</i> , 27(16), 3613-3618, 2019.	
Sano K., Bao L., Suzuno N., Kannaka K., Yamasaki T., Munekane M., Mukai T.		論文		Development of Cancer-Targeted SPECT/Fluorescence Dual Imaging Probe Based on Polyoxazoline, <i>ACS Appl. Polym. Mater.</i> , 1(5), 953-958, 2019.	

M. Munekane, M. Ueda, S. Motomura, S. Kamino, H. Haba, Y. Yoshikawa, H. Yasui, S. Enomoto	論文	Investigation of biodistribution and speciation changes of orally administered dual radiolabeled complex, bis(5-chloro-7-[131I]iodo-8-quinolinolato)[65Zn]zinc, Biological and Pharmaceutical Bulletin, 40(4), 510-515, 2017.
M. Munekane, S. Motomura, S. Kamino, M. Ueda, H. Haba, Y. Yoshikawa, H. Yasui, M. Hiromura, S. Enomoto	論文	Visualization of biodistribution of Zn complex with antidiabetic activity using semiconductor Compton camera GREI, Biochemistry and Biophysics Reports, 5, 211-215, 2016.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Synthesis of amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component for flexible drug release	2019年9月	第78回日本癌学会学術総会
Development of SPECT/Fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline derivative for detection of tumors.	2018年11月	The tenth China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences
がんの光熱治療を目的としたコンドロイチン硫酸被覆金ナノロッドの開発	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会
がんセラノスティックスを目的としたコンドロイチン硫酸被覆リポソームの作製と基礎的評価	2018年6月	第28回金属の関与する生体関連反応シンポジウム
抗糖尿病作用を有する亜鉛錯体の体内動態と化学形態の解析	2016年11月	第55回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部大会
III 学会等および社会における主な活動		
2011年～現在	日本薬学会会員	
2018年～現在	日本分子イメージング学会会員	
2018年～現在	日本核医学会会員	
2019年～現在	日本癌学会会員	
2020年～現在	日本DDS学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬化学研究室	職名	特任助教	氏名	高嶋 一平
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2019年4月-現在に至る 2019年4月-現在に至る	薬化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を行っている。研究進捗の定期的な報告会を行うように工夫した。これは論理力やコミュニケーション能力の習得を目的としている。企業での勤務経験から社会で必要なコミュニケーション技術を教科書などを用いて学生に教育する。 有機化学実習(学部2年生)を分担している。実習時間の終わりにディスカッションを行い、実習の目的と実際に行った手順の理解を促進できるように努めている。		
2	作成した教科書、教材、参考書	2019年7月	アクティブラボ用の教材作成		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Ippei Takashima, Kosuke Kusamori, Thi Hue Vu, Yuya Mizukami, Megumi Takashima, Yousuke Katsuda, Yukiya Takayama, Shin-ichi Sato, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Motonari Uesugi		論文	ACS Chem. Biol., 14: 775-783 (2019) Multi-functionalization of cells with a self-assembling molecule to enhance cell engraftment		
Kenji Yatsuzuka, Shin-ichi Sato, Kathleen Beverly Pe, Yousuke Katsuda, Ippei Takashima, Mizuki Watanabe and Motonari Uesugi		論文	Chem. Comm. 54: 7151-7154 (2018) Live-cell imaging of multiple endogenous mRNAs permits the direct observation of RNA granule dynamics		

Ryosuke Kawagoe, Ippei Takashima, Shohei Uchinomiya, Akio Ojida	論文	<i>Chem. Sci.</i> , 8: 1134-1140 (2017) Reversible Ratiometric Detection of Highly Reactive Hydropersulfides Using a FRET-Based Dual Emission Fluorescent Probe
Ippei Takashima, Ryosuke Kawagoe, Itaru Hamachi, Akio Ojida	論文	<i>Chem. Eur. J.</i> , 21: 2038-2044 (2015) Development of an AND Logic-Gate-Type Fluorescent Probe for Ratiometric Imaging of Autolysosome in Cell Autophagy
Ryosuke Kawagoe, Ippei Takashima, Kazuteru Usui, Anna Kanegae, Yusuke Ozawa, Akio Ojida	論文	<i>ChemBioChem</i> , 16: 1608-1615 (2015) Rational Design of a Ratiometric Fluorescent Probe Based on Arene-Metal-Ion Contact for Endogenous Hydrogen Sulfide Detection in Living Cells
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
自己集合性分子による移植細胞の機能化	2018年3月	日本薬学会第135春季年会（金沢）
Self-assembling molecules functionalize transplanted cells	2018年3月	日本化学会第98春季年会（日本大学理工学部 船橋キャンパス）
ANDゲート型蛍光プローブを応用したミトファジーの蛍光レシオイメージング	2015年3月	日本薬学会第135春季年会（神戸）
III 学会等および社会における主な活動		
2007年2月-現在に至る	日本化学会会員	
2011年1月-現在に至る	日本薬学会会員	
2012年8月-現在に至る	日本ケミカルバイオロジー学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	特任助教	氏名	木口 裕貴
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 分析化学系実習	2019. 4. 1～現在に至る	分析化学系実習では実験室を巡回し、実技指導や全体説明の補足を個別に行うことで、学生全員が実験の原理・原則を理解できるように努めている。		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当無し		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.		論文	Anal. Chem. 2015, 87(24), 12387-12395. "Gaussia luciferase as a genetic fusion partner with antibody fragments for sensitive immunoassay monitoring of clinical biomarkers"		

Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Banzono E., Ishii K., Kubo S., Watanabe Y., Hirai A., Kaede C., Ohta M., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-shot in vitro evolution generated an antibody fragment for testing urinary cotinine with more than 40-fold enhanced affinity"
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Morishita T., Fukushima S., Nishimori Y., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(12), 2191-2198. "A single-step "breeding" generated a diagnostic anti-cortisol antibody fragment with over 30-fold enhanced affinity"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Katayama E., Fujita M., Narasaki M., Yokoyama A., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(7), 1062-1070. "Antibodies and engineered antibody fragments against M13 filamentous phage to facilitate phage-display-based molecular breeding"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
実用診断試薬の創製を目指す抗コルチゾールscFvの試験管内親和性成熟	2018年3月	日本薬学会第138年会
高親和力変異scFvの創製におけるアレイ型選択法の有用性	2019年3月	日本薬学会第139年会
抗体の試験管内親和性成熟を迅速化する酵素融合型抗ファージscFvの作製	2019年3月	日本薬学会第139年会
ナンセンス変異を持つscFv遺伝子産物の構造及び機能解析	2019年9月	日本分析化学会第68年会
免疫測定法の高感度化を目指す高親和力抗コルチゾール変異抗体の効率的創製	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2015年4月～現在	日本薬学会会員	
2019年1月～現在	日本分析化学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療薬学研究室	職名	特任助教	氏名	田中 亨
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 卒業研究	2020年4月～	医療薬学研究室に配属された4, 5, 6年生を対象に卒業研究の指導を行なっている。研究の背景や研究方針などを丁寧に説明し、理解を促すとともに自ら考えて研究を進められるように工夫している。		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Tanaka T, Maekawa N, Kashio T, Ishiba R, Izawa K, Shirakura K, Ishimoto K, Hino N, Aird WC, Doi T, Okada Y		論文	Tumor necrosis factor α induces the expression of the endothelial cell-specific receptor Roundabout4 through the nuclear factor- κ B pathway. Biol Pharm Bull. (40):505-509 (2017)		

Araki M, Hisamitsu T, Kinugasa-Katayama Y, Tanaka T, Harada Y, Nakao S, Hanada S, Ishii S, Fujita M, Kawamura T, Saito Y, Nishiyama K, Watanabe Y, Nakagawa O.	論文	Serum/glucocorticoid-regulated kinase 1 as a novel transcriptional target of bone morphogenetic protein-ALK1 receptor signaling in vascular endothelial cells. Angiogenesis. (2):415-423 (2018)
Tanaka T, Izawa K, Maniwa Y, Okamura M, Okada A, Yamaguchi T, Shirakura K, Maekawa N, Matsui H, Ishimoto K, Hino N, Nakagawa O, Aird WC, Mizuguchi H, Kawabata K, Doi T, Okada Y.	論文	ETV2-TET1/TET2 Complexes Induce Endothelial Cell-Specific Robo4 Expression via Promoter Demethylation. Sci Rep. 8(1):5653 (2018)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Robo4プロモーターの血管内皮細胞特異的なDNAメチル化パターン形成に寄与する因子の探索	2015年5月	第9回エピジェネティクス研究会年会
血管内皮細胞特異的Robo4発現が生み出されるメカニズムの解明	2016年9月	第17回pharmaco-hematology学会
Significance of Hey transcription factors in endothelial cell differentiation and embryonic vascular development	2019年10月	NAVBO Vascular Biology 2019
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2012年6月～現在に至る	日本薬学会会員	
2015年3月～現在に至る	エピジェネティクス研究会会員	